

---

# 超弩級要塞のサンタクロース

聖兎月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超弩級要塞のサンタクローズ

### 【Nコード】

N74190

### 【作者名】

聖兔月

### 【あらすじ】

花巻ニコラはごく普通の、ロシア人ハーフの中学生として、日本の孤児院で暮らしていた。しかしある日、いつものようにいじめっ子のダンプに一方的なケンカを売られている時、天空より声が聞こえたのだ。

「チカラガホシイカ」

迷わず、欲しいと答えるニコラ。

しかし、その力を手に入れるには条件があつたのだ。  
今まさに、天界・魔界に跋扈する黒い権力闘争の果てに、廃位の噂  
が立っているサンタクロースの地位を継ぎ、サンタクロース二世と  
なることを。

そうとは知らずにサンタクロース二世を襲名したニコラは、やがて  
行われた森羅万象国際会議の決議により、携帯ストラップの神に左  
遷されることが決定する。

世界で一番サンタクロースを愛している少年、ニコラ。

そして、はぐれグレムリンのナナ。

二人が平和に暮らす世界は、やがて世界を巻き込むハルマゲドンへ  
と続いていく

## 序章 世紀末サンタクロース伝説（前書き）

タグに残酷描写が入っていますが、実のところ、一応わずかに入る程度です。

とは言え、ごく一部にて内容に含むのでタグを入れてますが、そういう伝奇もの的なものをお求めであれば、かなり盛大な肩透かしを食らいます。

誠に恐れ入りますが、ご注意下さい。

念のために入れたものであることを、重ねてお伝えしておきます。基本的には「ライトノベル」という意識で書いています。

皆様上記ご同意の上、お付き合い頂ければ幸いです。

## 序章 世紀末サンタクロース伝説

「じんぐつベー じんぐつベー じんぐーおーざうえー」

少年は声も高らかに歌い上げる。

雪の降る町を、孤児院のみんなで食べるケーキを持って、家路を急ぎながら。

町はクリスマススムード一色に包まれ、そこかしこの商店や、最近では民家までがイルミネー

ションを施し、ムードを高めようとしている。

ドアに掛かるリース。

手に手にプレゼントを抱えた大人達。

巨大なもみの木がツリーとなつて景色を彩り、人々はメリークリスマスと声を掛け合う。

ああ、クリスマスは幸せだ。

毎日がクリスマスだったらしいのに。

「おいニコラ、どこ行くんだよ？」

声を掛けられた少年、花巻ニコラはくるりと振り返る。

嫌な奴に会ってしまった。

学校で、いつも孤児院の仲間をいじめる事で有名な、あだ名をダンプと呼ばれる少年だ。

雪が降っているというのに、薄手のジャンパーに袖を通しただけの寒そうな服装で、真っ赤

な頬を気にも留めず、ニヤニヤと嫌な笑いを浮かべている。

「どこでもいいだろ？」

僕は急いでるんだ」

「急ぐ必要なんてねえだろ？」

俺に付き合えよ」

「やだよ、本当に急いでるんだ」

露骨にしかめ面をして見せるが、ダンプは人の話を聞こうとしな

い。

薄く積もった雪を踏みしめ、ずかずかとこちらに歩いてくる。だが、そこでつるりと足を滑らせた。

べしゃり。

ダンプが尻餅を着く音。

そして、少し雪が溶けてできていた水たまりに、思い切り転がる。

「冷てえっ?!」

「うわっ、ダンプ大丈夫?」

「馬鹿野郎! お前のせいだ!」

「えーっ?」

何が何だかさっぱり分からない。

勝手に因縁を付けてきて、勝手にこっちに来て、勝手に転んで、それが僕のせい?

ニコラはただうろたえるだけで、そこから逃げ出す事もできず、かたかたと小さく肩を震えさせている。

自慢じゃないがケンカは弱い。

ケンカ通信簿があれば、オール1をもらう自信がある。

ダンプからはよく、ロシア人と日本人のハーフだからケンカも強いんだろつと言われるが、その根拠そのものが良く分からない。

普通ならばここで、一般的に言うところの「ボッコボコ」にされて終わりとなるだろう。

しかし、彼が普通のいじめられっ子と違うのは、重度の負けず嫌いという事だった。

それは、クリスマス・イヴの今日も健在だ。

「テメエのせいで母ちゃんに怒られちまうだろう!」

どうしてくれるんだよ! おう!」

「知るかよ!」

お前が勝手に転んでびしょ濡れになっただけだろう?」

「おお〜まあ〜ええ〜、まだ俺にそんな口を聞くのか!」

言い終わる前に、ダンプの拳が空を切る。

そして、避ける事もできずに、それはニコラの左頬を直撃した。ケーキを持ったまま、彼の体は雪の上を半回転して倒れ込む。

「うわっ、みんなのケーキ!」

「お前が悪いんだ。ざまあみろ」

「バカ! ダンプのバカ!

許さないぞ!

僕は絶対にお前を許さない!」

「掛かって来いよ。弱虫ニコラあ」

「うおおおおおおおおおおお!」

いつも通りの光景だが、雪の中では相手に掴み掛かる前に転んでしまう。

うつぶせに倒れたニコラの横腹に蹴りを入れると、ダンプはそのまま馬乗りになる。

「オラオラ、生意気言ってるからだよバアーカ!」

「ダンプ! この野郎! 畜生!

良い子にしてないと、サンタさんはプレゼントくれないんだぞ?」

「サンタなんていねえよ!

お前、その歳でまだサンタなんて信じてんのかよ!」

「いるよ! サンタクロースは絶対にいる!

僕達が良い子にしてれば、プレゼントをくれるんだ!」

「いねえつつつてんだろ! 黙れバカ野郎!」

一方的に打ちのめされるニコラ。

だが、気が付けば周囲には人が居なくなっていた。

ダンプを止める大人もおらず、彼は一方的にやられるだけ。

しかし彼は諦めない。絶望など認めない。

ましてや、今日はクリスマスなのだ。

クリスマスに涙を流すなんて、そんなことがあつてはならない。

僕は男の子だと自分に言い聞かせ、必死に歯を食いしばる。

「いるよっ! くそうくそう! サンタはいるんだ!

サンタはお前なんて許さないんだ!

僕は負けない！ 見てるよねサンタさん？」

「うるせえ！ このっ！ このっ！」

降り積もる雪景色の中に、無情な音が響き渡る。

神も仏も居ないのか。

この世界に救いは無いのか。

涙がこぼれ落ちそうだった。

自分に負けてしまいそうで、それがとても悔しかった。

だがその時、誰かが頭の中に語り掛ける声が聞こえる。

『少年、力が欲しいか』

「誰だ?!」

『良い子の味方、サンタクロースだ』

「サンタさん！」

「お、おいニコラ、お前誰と喋ってんだよ。気味が悪いぞ……」

ダンプは手を止め、きよろきよろと辺りを見回す。

だが、通りには人影は見当たらない。

『ニコラよ、お前は天上界で開催される、世界で一番サンタクロースラヴ選手権で優勝した。』

そんなお前に、サンタの私はプレゼントをあげよう』

「世界で一番サンタクロースラヴ選手権！ いつの間に僕はエント

リーしてたんだ！」

「おいニコラ……お前キモいって、マジで……」

ダンプの顔が青ざめてくる。

まさか自分の殴りどころが悪くて、ニコラの頭がおかしくなってしまうたのではないだろうか。

もしそんなことがあれば、母親から怒鳴られる程度では済まされない。

『ただし、プレゼントをもらうには条件がある。』

お前は私の後を継いで、新サンタクロースとなる事を約束せねばならない』

「するよ、約束する！ 僕はサンタクロースになる！」



ニコラは力の限り叫ぶ。

プレゼントがもらえてサンタになれるなんて、夢のようだ。

『良かるう。その願い、聞き届けた』

その瞬間、ニコラの体が眩しく光る。

ダンプは思わず手で目を覆い、道の横へと転がってしまふ。

「まぶしっ！ 冷たっ！ 寒う！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

力がみなぎってくる。

これがサンタクロースの力。

これが良い子のプレゼント。

僕こそが今、クリスマス。

そして僕だけが、サンタクロースだ。

「お、おい、ニコラ……浮かんでる……」

「ダンプ！ 許さないぞ！」

「ま、待てよ！ 何だよお前、おかしいって！」

「正義は待っててくれない！」

「意味わかんねえよ！」

立ち上がる事もできないダンプを見て、ニコラはにやりと笑う。

勝利を確信したのだ。

浮かび上がったニコラの両手には、光る弾が徐々に大きさを増している。

「食らえっ、サンタクロース波ア

ッ！」

「うぎゃあーっ！」

「波あーっ！ 波あーっ！ 波あーっ！ 波あーっ！」

一発で済ませようかと思ったが、まだ出せそうなのでサービスしておく。

「ちよっ、待、死ぬ！ 死んじやう！」

母ちゃん！ 母ちゃああああん！」

まばゆい光に包まれ、爆発音と共にきこ雲が立ち上る。

しかし、見た目は派手だが手加減をしていた為に、ダンプのズボ

ンは後ろが焦げて、尻が露わになるだけで済んでいた。

みねうちは正義の印。

でも見た目は華々しく。

サンタクロースは罪を憎んで人を憎まず。

「うああ……ニコラ……」

「さつさと帰るんだな。母ちゃんが待ってるんだろっ」

「うわあああああん！」

尻も隠さず、何度か滑っては転び、滑っては転びを繰り返しながら、ダンプは元来た道を走って行った。

辺りには再び、何も無かったような静寂が訪れ、しんと雪が降り積もる。

『少年よ、約束は聞き届けてもらっぞ』

「サンタさん！ もちろんです！」

雪の降る空から光が射し込み、天使のラツパが鳴り響く。

やがて、ニコラはゆっくりと天に昇っていった。

その日以降、彼の姿を見た者は誰も居ない

## 第1章 森羅万象国際会議 議題 サンタクロース予算削減について

その日、天上界特別平和自治区の国際会議場KUMONOUには、天界と魔界の全土より、名だたる神霊、悪魔、天使、妖精達が集まっていた。

ハルマゲドンの勃発かと思まごうばかりの光景だが、そうではなく、これからも天界と人間界と魔界のバランスを保つべく、神と悪魔が一同に介して、様々な議題を決める国際会議が百年に一度開かれているのだ。

「えー、それでは第二十一回、森羅万象国際会議を始めます。

まずは議題、人間界でうっかり失敗した天使を、墮天使認定する基準が厳しすぎるのではないか？

「についてです」

黒服に身を包み、人間に擬態している悪魔、アスタロトが議題を提出する。

会場からは、にわかになわめきが起こった。

「ただでさえ魔界の悪魔が増え続けているのに、失敗したくらいで墮天使としてこっちに送らないで欲しい」

「そうは言いますが、私共としても、うっかりしたからといって、人間達に戦争を起こさせてしまった天使を、天使と扱うわけにもいかない事情がありました……」

天の下も天の上も、台所事情が悪化しており、どこが尻拭いをするのか？ というパワーバランスについて、問題は恒常化しつつある。たまに下界を見渡す神や魔王達は、あまりにも自分達と人間の似通った姿に、思わず溜息をもらす事も多い。

「えー、続きましての議題です。

サンタクロース予算の削減について」

アスタロトの声に、会議場は静まり返る。

サンタクロース予算は、天界、魔界、双方より共同で毎年費用が

計上されている上に、かなりの負担となっているのだ。

そして、その予算削減こそは、この会議に於ける最大の争点となっていた。

「えー、サンタクロース予算についてですが、現在のところ、年間千億へブンを計上していますが、最近の人間の子供達はサンタクロースの存在を信じず、良い子の割合も減っており、もはや必要ではないとの声が天上界、魔界の双方より上がっております」

「異議あり！」

声を出したのは、閻魔大王の娘、六道炎夜だ。

真紅のドレスに身を包み、彼岸花のコサージュを付けたその姿は、まさに貴族の令嬢という雰囲気漂わせている。

有力議員、閻魔大王の代理として、森羅万象国際会議に初出席という事もあって、この異議に対し、誰もが一斉に注目した。

「サンタクロース予算は人間達の、特に子供達の情操教育と秩序を保つ為に、大変必要なものです。それを削減するなど、言語道断です。私は地獄を代表し、正式に反対を表します！」

すぐに可決の流れになると思っていただけに、閻魔大王代理からの反対表明は議場をざわつかせる。

隣の者と相談する者、考え込む者、何かを手帳に書く者、それぞれの顔には何とも言えない空気が漂っている。

「えーっと、お嬢さん、閻魔さんとことはよく付き合いがあるんですが、初めましてかなあ？」

私、釈迦という者ですけどね、サンタは神でもなく悪魔でもない。一応、イエスさんところのカテゴリには入るみたいですが、もはや子供達が作り上げた虚像ですよね。

別にご神体があるわけでもなければ、聖典があるわけでもない。

奇跡を起こした事も無いし、明確な信者もいない。でしょう？」

ぼりぼりと頭を掻きながら、仏スマイルで優しく訴える。

「だからどうしたと言っんですか。」

お釈迦様が子供の夢を奪って宜しいんですか」

「子供は大切ですよ、ええ。」

けれど、私ら仏教の立場からしたら、別にクリスマスそのものも無くても良いわけですし、そもそもサンタって何？ とかね。

私も子供に聞かれると、説明にも困るわけですし。後ね、予算とかの絡みもあるでしょ？」

「そんなもの！ このお釈迦様お供え思いやり予算を削れば宜しいでしょう！」

にわかには会場はざわめき出す。

それもそのはずだ。あからさまに不透明な出費と言われながらも、公然と批判される事は無かった予算の聖域。

だが、閻魔の娘はお構いなしに、ずけずけと突っ込んでくる。

さすがの釈迦も、これにはびっくりと眉をつり上げた。

「あのね、必要な予算は必要な予算ですよ。」

それにねお嬢さん、今はサンタクロースの事を話しているんですよ？

お釈迦様お供え思いやり予算は関係無いと思いませんか」

「無駄なお金があるならそれを削って、サンタ予算に回せと言っているんです！」

炎夜は書類を高らかに掲げ、それを机に叩きつける。

それは天歴二万八九八年度予算案だ。

サンタクロース予算は、このうち一%未満なのに対し、お釈迦様お供え思いやり予算は、三%近くを占めている。

全仏教連合予算が十六%であることを考えれば、不透明な予算としてはあまりにも多額と言える。

だが、そこにさらなる言葉を投げる人間が居た。

茨の冠をかぶり、白い薄衣に身を包んだ髭の男性、そう、イエスキリストだ。

「炎夜さん。」

実際の所、サンタを信じてる人間も少ないという現実があります。

私としても、あの赤い服を着て子供にプレゼントを配って歩く人と、サンタクロースの語源ともなっている、教父聖ニコラウスとは区別している現実があるんですね。

つまりその、時代の流れというのものもあるでしょう？」

「イエスさんまで！

見損ないました！」

「天には天の現実つてもものがあるんですよ、お嬢さん」

サンタクロースの最大の保護者と思われていたイエスが、サンタクロース廃止派として名乗りを上げる。

この事態に、議会の流れは目に見えて変わった。

「皆さん、どうかよく考えて下さい！」

サンタクロースに心を時めかせる子供達の事を！」

声を張り上げる炎夜だが、その響きはどこか虚しい。

所々から聞こえて来るのは、やはり廃止が妥当、予算的に仕方がない、そもそもサンタって何？ など、彼女にとって向かい風となる発言ばかりだ。

もはや自分に味方はいないのだろうか？

だが、諦めるわけにはいかない。

自分が諦めたら、サンタクロースは本当にお伽話の存在にされてしまうのだ。

「サンタクロースはこの事を知らないんでしょう？」

本人に知らせずに職務解任。

こんな横暴がまかり通るなんて、我々の民主主義はここまで落ちたのですか？」

「それにつきましては、事後処理案として、サンタクロースから携帯ストラップの神になるという移籍が決定しています」

ずり落ちた眼鏡を上げながら、書類の項目を淡々と話すアスタロトに、炎夜はひどい頭痛がしてきた。

こいつらは、真面目に天上天下の事を考えているのか。

自分達が良ければそれでいいのか、と。

「そろそろ時間が差し迫っていますよ。議長、決を採って下さい」  
「おっと、そうですね。」

それではサンタクロース予算削減について、賛成の方、起立をお願いします」

アスタロトの声と同時に、さざ波が押し寄せるように、議員達は次々と起立する。

天上界に於ける最有力議員二人が賛成を明確にしたのだ。

これに従わねば目を付けられ、左遷ポストに追いやられてしまうだろう。

一方で、悪魔としてはそもそも反対する理由が無い。

有力な神霊達が是とするなら、これに従っておけば、波風を立てずに済む。

結果、着席しているのは炎夜一人という、何とも寂しい状態になってしまった。

「うう、どいつもこいつもわからんちん共なんだから」

「賛成一九九九、反対一、よって本案を可決します。」

以上、議題は全て遅滞なく終了しました。

第二十一回、森羅万象国際会議の閉幕を宣言します」

どつと拍手が湧き起こり、誰もが席を立っていく。

だが、納得のできない炎夜だけは、苛立ちを隠そうともせず、座ったまま、空席となった議長席を睨み付けている。

「炎夜さま、もうおうちに帰りましょうよ」

付き人の鬼三郎おにまがらうが、こわごわと声を掛ける。

だが、聞こえていないのか、炎夜はそれに返事をしない。

「炎夜さまあーっ、そろそろ迎えの輸入道が来ますよ」

「わかってるわよっ！

うるっさいなあ！」

「ひいっ！」

「あーっ……ごめんごめん、鬼三郎に怒っても、どうにもならないよね。」

「ごめんね」

「いえ、世界で一番サンタクロースラヴ選手権で惜しくも二位になられる程、サンタ信仰をしていらっしやる炎夜さまですから、お気持ちとはとても分かります」

「そうよ。」

私ほどサンタクロースを愛してる存在は居なかったはずなのよ。

なのに、天界や魔界の住人ならともかく、よりによって下界の人間に負けちゃうなんてさ！

でも、二番だったから、私の思いが議会に届かなかったのかなあ。私のサンタさんへの熱い思いが無駄になっちゃった。

寂しいなあ」

「でも、炎夜さまが好きだったサンタさん、引退されちゃったんでしょう？」

「そうなのよ。よりによって、人間がサンタになるなんて信じられない。」

けれど、サンタには違いないし、サンタにはサンタの義務、サンタ・オブリージュ（サンタなる者の義務）を守ってもらわなきゃいけないわ」

頬をぷつつと膨らませ、腰に手を当てている。

その姿はどう見ても、地獄を統べる閻魔王の娘には見えない。

だが、そんな人懐っこい姿の炎夜の方が親しみやすいと、鬼三郎はいつも炎夜に言っている。

「そう言えば、この予算削減案って、一応拒否権がサンタの方にあるのよね」

「あ、はい。天界法第三八条九項により、三ヶ月以内には異議申し立てを行う事が出来ます」

「だけじゃないでしょう。十項も読んだ？」

「異議申し立てをしても受け付けられない場合、聖戦を宣言し、当該議員達に対し、宣戦布告を行い、武力解決を図る事ができる特例ですよね。」



でも、これをやっちゃうと、今の世界ではハルマゲドンになってしまう。

「サンタさんも多分、携帯ストラップの神になれるでしょう」

「そうかなあ……」

炎夜はにやにやと笑い、ほおづえを突く。

「この天上界の全てにケンカを売るようなサンタならば、自分はいつでも馳せ参じよう。」

子供達の夢を守るために、命を賭けられるような男なら、私のムコにしてもいい。

この閻魔大王の娘、六道炎夜に相応しい相手だ。

「そしてサンタさんとあんな事やこんな事……あつ、だめ、そこはくつ下じゃないのほおおお！」

うふふつ、いけないサンタさん

それはクリスマスまでおあずけなんだモン！」

「何やってるんですか炎夜様……」

「あ、輸入道」

思わず辺りの空気が凍り付く。まさに絶対零度のエクスペリエンス。

六道炎夜は地獄の象徴にして、高貴なるもの。

まかり間違っても妄想の中でサンタクロスとくつしたを追い掛け合い、きゃっきゃうふふしている妄想に浸っている姿を見られるなど、あつてはならない。

絶対に、あつてはならないのだ。

「あなたは今、何も見ていないわね輸入道……」

「はいっ、いつもの事ですが何も見てません！」

「いつもの事？」

炎夜の顔が満面の笑みに包まれる。

「あ、しまった」

その日、天上界特別平和自治区では、初めて守護天使と悪魔警察が出動する騒ぎとなったが、色々な大人の事情から、天上界新聞各

社、並びに天上テレビ局はこれを報じることは無かった。

## 第2章 知られざるサンタクロース・リアル・ライフ

燃え盛るような太陽！ トロピカルな果物！ 打ち寄せる波の音はまさにパラíso！

浜辺のデッキチェアに寝そべり、やどかりつて不思議だよねなどと思いを馳せる。

二代目サンタクロースを襲名して十年。花巻ニコラは毎年、クリスマスになると世界各地の子供達にプレゼントを配って回り、残りの休みはバカンスを楽しんでいた。

「 という妄想にふけて、楽しいのかしらニコラくん？」

ガラガラと音を立てて、南国の風景は崩れ落ちていく。

だが、まぶたを開けたくない。

信じれば夢は叶う。

サンタのおじいさんは教えてくれた。

夢は見るものじゃない、叶えるものだ。

「黙ってくれ。僕の心は今、グアムのビーチにあるんだ」

「ここは地の果て、ロシア領でシベリアの最奥だよ」

「シベリアなんて知らない！ 知らないんだ！

僕の心は今グアムなんだああああ！」

頭を抱えてごろごろ転がるが、シベリアがグアムになるはずもない。

まぶたを開けば、そこは永久凍土に包まれた、およそ人間が近寄る事のない氷の世界が広がっている。

「やれやれ、あんたつてば本当に昔から変わらないわね」

そう言つて、両手で欧米人のような小馬鹿にしたジェスチャーをしているのは、彼よりも五歳ほど若く見える少女だった。

だが、彼女の背中にはこうもりのような漆黒の翼があり、毛の生えた立派な耳が、ピンと頭の上に立っている。

ニコラがサンタとしてシベリアの奥地に赴任してすぐ、死にそう

になっていた所を助けた、はぐれグレムリンのナナ。

最初は治療が終われば、好きな場所に帰れと言ったのだが、行き場の無い彼女はここに居候し、ニコラの乱れた日常を監視している。いわば小さな母親代わりとなっている。

炊事、洗濯など、実に器用にこなすことから、彼としてもナナの存在は、話し相手になるということもあり、彼としても追い出す理由も無いことから、最北の地で二人静かに暮らしているのだ。

「ナナのおっぱいと違って、僕はちゃんと去年より身長が一センチ伸びたんだ」

「うそくさーい」

「なっ、本当だぞ!？」

ナナ、疑ってるのか？

サンタを疑うとおっぱいが小さくなるんだぞ？」

「どうせこれ以上無いくらいフラットなのよ。」

へこんだら水を溜めればいいしー」  
そう言っつて、ナナはぺたんこの胸を撫で回し、えへんとばかりに胸を張る。

何を自慢したいのだろう。

小さな胸には夢と希望など無く、ツンドラのように冷たくて平らなだけだというのに。

ああもう、可愛くない。

すごくすごく可愛くない。

なぜこんなにビッチなグレムリンに育ってしまったんだ。

拾った時はあんなに小さくて、きゅんきゅんするほどぷりていだっただのに。

ニコラは自問自答する。

だが、あまりにも自分好みに育てようとして、へそ曲がりになっってしまったというのは、分かっついても気にしてはいけない。

「全世界の子供が知ればガツカリだな。

トナカイじゃなくて、お前みたいないびつグレムリンがサンタさ

んのそりを引いてるなんて知ったら」

「誰がビッチよ、誰が！」

「そもそも私が居なきゃ、あんたはサンタの仕事できないでしょう？」

「うー、トナカイの奴め。僕を裏切るとは……」  
声のトーンがダウンする。

赴任してすぐのあの時、彼はどうしても欲しいゲーム機があった。家賃の支払いはあるが、どうしても今すぐ欲しい。

誘惑に負け、家賃は来月まとめて払えばいいと思って、後回しにしたところ、天上銀行からトナカイのエサ代に差し押さえが入ってしまったのだ。

結果、トナカイたちは、自分達のひづめを使って、トナカイ語の置き手紙（おそらく三日だけ一緒に過ごした事への感謝の言葉と、思いつきをいっぱいに書きつづっていただろうが、残念ながら読めなかった）を、こたつの上に置いて、フィンランドの実家に帰ってしまったのだ。

天界の住民としての試練と現実に深く絶望したニコラは、それ以後の出費を慎むようになった。

結果として、はぐれグレムリンだったナナがその代わりとしてそりを引くようになり、今に至っている。

「いつも思うけど、人望が無いサンタってどうなのよ？」

「そんなことはないぞ。」

「ほら、感謝の手紙は、クリスマスを過ぎて、正月になった今でも届くだろう？」

「えーっと、サンタさんへ。」

「ぼくがほしかったのはこれじゃないです。きをつけてください。」

「……これが感謝の手紙かしら？」

「みんなはありがとう、ちゃんとと言えるかな？」

「誰に向かって言ってるのよ！ ごまかすなっ！」

「違うぞナナ！ 僕が悪いんじゃないだろ？」

この魔法の袋が、子供達の欲しいものを出さないのが悪いんだ！  
バンバンと、部屋の片隅に置かれた袋を叩く。

それはサンタ秘密道具の最終兵器、魔法のプレゼント袋だ。  
子供が欲しいもの（ただしニコラ本人は除く）を、精神感応でキ  
ヤッチして取り出してくれる、すぐれもののパートナー！

なのだが、最近はそのリクエストの間違いも多く、こうした不満  
の手紙も届く事がある。

「なんかプラカード出して抗議してるよ」

「なにに、」予算不足で、子供が欲しいものが手に入らない事も  
あります」なるほど」

「予算不足……最近の私達、本当に現実的な事してるよね……」

ナナは溜息を吐いて外を見る。自分も本当は、子供達が喜ぶ顔を  
見るのが好きだ。けれど、最近の高いおもちゃも多く、実際に子  
供が望むものを出せない事もある。

「そうだな。まさか世界中の子供達も、正月のサンタさんが貧乏過  
ぎて、具の全く入ってない日本式お雑煮を食べているとは思っまい」

「わびしいよねえ。もう少しサンタ予算増えないの？」

「森羅万象国際会議に、予算増加願いを提出したんだが、議題にさ  
えされず、却下された」

ぐにぐにともちを噛んで伸ばしながら、ニコラは気のない返事を  
する。

「まあ、信者が居るといつても子供だけだしね」

「でも、その子供達が待つてるから、頑張れるんだろう」

「そうだね」

『がんばりましょう！』

袋もちやつかり、プラカードを出して会話に加わる。

二代目サンタクロースを襲名して十年。

色々紆余曲折もあったけれど、少しは自分がサンタだと、胸を張  
れるようになっただろうか。

ケーキ屋の帰り道に、突然サンタに力を授かり、二度と帰らなか

ったあの日。

今でも園長先生達の事を考えると、目頭が熱くなる。

まだ健在だろうか。

お変わりないだろうか。

僕は今、こんなに立派に育ちましたよ。

いつかもう一度会って、お礼を言いたい。

「また昔の事、思い出してる？」

「ああ……」

「私なら、いつでも日本まで飛んでつてあげるのに」

「駄目だよ。こんな飛び出し方をした放蕩息子が、今さらどの面下げて会えばいい」

自嘲気味に笑うと、こたつの上に常備しているウォッカを呷る。

半分流れているロシアの血のせいか、しんみりした時ほどウォッカはじわりと胸に来る。

アルコールであつと熱くなったらレモンを嚙り、塩をなめる。

「よくそんなの飲めるよね。私はお子さまだからアイスマルクでいい」

「つつーか、お前ミルク以外の栄養、ほとんど受け付けられないだろうが」

ちゅうちゅうと、ストロー付きのマグからミルクを吸い上げながら、ナナはにこにここと笑う。

今日もシベリアの奥地は平和だ。

宇宙人が攻めてくるか、ハルマゲドンでも起きない限り、これからもずっと平和であり続けるだろう。

「おなか一杯になったら眠くなってきちゃった。起きたら来年のクリスマスプレゼントのデータ打ち込みするから、起こしてね」

「ああ、お腹出して寝るなよ」

「おなか出しても、グレムリンは風邪引かないもん」

そう言っつて、ナナはごろりとこたつで横になる。

開いているノートパソコンにも、きちんとパスワードでロックを

掛ける。

ニコラは見ないだろうけれど、念のためだ。

遅くなったけれどクリスマスプレゼント、今年こそは手編みのマフラーをプレゼントしたい。

けれど、一生懸命に勉強してるところを見られたら、恥ずかしいもんね。

「ふああ……僕も眠くなってきたなあ……」

天界通信だけ確認したら、僕もお昼寝しよう」

いつも通り、天界専用ノートパソコンにアクセスすると、メールが来ていた。

天界新聞のメールマガジンで、森羅万象会議の内容が届いているだけだった。

どうせ自分には関係ないだろう。

そう思い、スイッチをオフにして横になる。

外は静かで、昼間だというのに太陽はほとんど昇らない。

お昼寝にはもってこいの環境だ。

今日も子供達の笑顔に会える夢を見れるといいな。

そう思いながら、ニコラはそつとまぶたを閉じる。

いつしか、粉雪がしんしんと降り始めている。

ニコラがサンタに出会った、あの夜のように。

それはゆっくりと、思い出のよう積もっていく。



### 第3章 ぱんつと平和

森羅万象会議を終えて、神族と魔族はそれぞれ自分達の国へと帰っていく。

その際に、特に悪魔にとっては、わざわざ天上界の近くまで出向かねばならないこのイベントに於いて、観光を楽しんで帰る者も多い。

悪魔と言っても、人間の欲望や嘘などのバランスを取るものであり、人間達が言うほどに、危険な者達ではない。

むしろ、天上界に於いては、互いに違う国として、対抗意識はあれど、それほど相争うというわけでは無かった。

それは、魔王達が絶大な力を持って、彼らの秩序を維持しているという事もあるが、誰もが理性の無い荒くれ者というわけではない。ましてや、森羅万象国際会議に参加する者達は、魔族の中でも知識層として、天界にも名を知られる者が多い。

ベルゼブブの息子、次期悪魔大公爵として知られる、ベルもまたその一人だ。

「とても平和な時代になったよね。」

こうして、神霊達の店でショッピングが楽しめちゃうんだから「デュラハン」は、自分の首を脇に抱えたまま、あちらこちらと、ネットレスを品定めする。

しかしベルは、お前のどこにそれを着けるんだ？

というツツコミを出来ずに困っている。

黒い触覚をぴくぴくと動かし、何とも言えない表情を浮かべた。

アスタロトと同じく、人間に擬態している彼は、黒のマオカラースーツに袖を通してている。

下界の者達が生み出すファッションを楽しむのは、彼のお気に入りとなっており、いくら蠅の王だからと言って、虫達の姿で居る事は、彼はあまり好きではない。

そもそも、虫の姿で居るとモテない。

特に若い女の天使達にキモいなどと言われると、この上なく腹が立つのだ。

「ねえねえ、ベルはどれが良いと思う？」

この瑪瑙細工が綺麗なものと、こっちの琥珀で出来た、落ち着いたデザインのもの。

それとも、こっちの猫目石の方がいいかな」

「えーっと、デュラにはどれも似合うと思うよ」

「もー、そんなこと聞いてないのっ！ 適当に返事してるでしょう？」

くるりと、持っている頭を後ろに向ける。

しかし、ベルにとつては、なぜ怒られるのかが分からない。

そもそもどうやって首に着けるのか？

と聞いても、それはそれで、きつと後ろを向くに違いないのだ。

「悪魔さんは、女心を読むのが相変わらず苦手そうですね」

そう言っつて、百年前と同じ姿のまま、店員をしている女天使は笑う。

その手には、ラピスラズリをあしらったブレスレットを着けて、首にはエメラルドで草をかたどったペンダントを下げている。

最初に店に訪れた時、それと同じものがないとデュラハンは言ったのだが、非売品なんですと言われ、やっぱりと断られたものだ。相変わらずセンスがいい。

天界の連中と比べて、魔界は……いや、言っても仕方あるまい。

「ねえねえアテナさん。百年経ってるのにこの人、相変わらずの才様ぶりでしょう？」

これだから、私がそばに居てあげないといけないんです」

「いや、俺はお前が居なくてもいいんだが」

「ちえすとおおおおお！」

「ぐはっ！」

空いている手でサーベルを鞘ごと引っこ抜き、横の壁までベルを

吹っ飛ばす。

ゴムボールのように軽くあしらわれたベルは、見事に自分の形のままに、壁にめり込んでいる。

「ぐすん。ベルのばかばか！」

照れてるからって、ひどいよ！」

「なあデユラ、百年前もこれ、やらなかったっけ……」

「お二人とも仲がよろしくて、本当に羨ましいですね」

アテナと呼ばれる店員は、口元に手を当て、上品に笑う。

壁の修理代は父親のベルゼブブが大幅に上乘せして払うので、彼女も安心して接客ができるのだ。

ただ、俺の身があまり安心じゃないのは、気のせいだろうか。

「なあアテナさん。」

あんたの目、一度誰かに診てもらった方がいいですよ。絶対」

「さあて、視力には問題ありませんけどね」

「えへへ。私達、魔界の仲良しカップルとして、サタン様も公認なんですよ」

「まあまあ、それは妬げちゃいますね！」

お前が勝手に言いふらしてるだけだろう！

と思つても、言わない俺は優しい。

ベルは一人で納得しつつ、壁から自分の体を剥がす。

何だかんだで否定しない辺りが、自分の弱みと言えばその通りだろう。

無論、否定したらまた壁にめり込むだけなのだが。

腐れ縁の幼なじみとは言え、なんで首無し女騎士が幼なじみなのだろうか。

どうせならば、ローレライかサキュバス辺りと幼なじみになりたかった。

「ベルさまー、お迎えに上がりましたよ」

「あれ、ドラコじゃないか。どうしたんだ？」

「えっと、ベルゼブブ様が呼んでおられます」

「ふうん、親父が？」

今日は一日、自治区観光を楽しむって言ったのになあ」

まじまじとドラコを見ると、彼女は恥ずかしそうに、小さく下を向く。

彼女はヴァンパイアの子供で、いつもベルの付き人として、身の回りの世話をしている。

だが、今日は一日中、デュラハンに振り回される予定なので、彼女にもいとまを与えていた。

呼びに来るとしたら、父親のベルゼブブから、何かの伝言を受けたくらいしか、理由が無い。

「龍の帰巢時間が、予定より早くなりそうらしいです」

「え？ なんでだ？」

「龍のファフニーさんが、おながが空いてるから早く巢に帰りたいそうです」

その言葉に、ベルは思わず頭を抱える。

またか、またなのか、と。

この世界は絶対おかしい。

神の世界は時の神が居て、様々な交通や物流なんかをきちんと管理しているのに、魔界の奴らは、悪魔だからと言って、あまりにも適当過ぎる。

遅刻しても、約束を破っても、平気な顔で反省をしない。

その事について、父親のベルゼブブが怒ってさえも、悪魔に秩序を求めるっておかしくないですか？

などと、奴らは天使の子供のような言葉を返してくる。

一応、絶対的な魔力で臣下を束ねる魔王達は、その力で秩序と法を守らせているが、歳をとって丸くなったベルゼブブのような者の場合は、なめられているとしか思えない。

たかが龍の言う事に、いちいち都合を合わせる魔王。

ベルにはそれが、何よりも気に食わない事の一つになっている。

「ファフニーさんがそう言うなら仕方ないね。」

ベル、帰ろっ」

「ああ、ちよっと待て。

アテナさん、あれを出してくれる？」

「はいはい、出来てますよ」

そう言っつて、アテナは店の奥に入ると、小さな箱を持って戻ってくる。

それを受け取ると、きよとんとするデュラの手に渡した。

「今日はお前の八百歳の誕生日。おめでとっ」

「ベル……覚えててくれたんだ……」

「悪魔だから、忘れてるつもりだったか？」

「うっん、ありがとう！」

そう言っつて、人目をはばかることもなく、抱きついてくるデュラ。この時ばかりは、頭をちゃんと首の上に乗せて、頬を寄せている。まあ、たまにはこういう事もあっていいだろう。

ぽりぽりと鼻の頭をかきながら、彼女のお礼にまんざらでもない表情を浮かべる。

「ねえ、開けていい？」

「もちろんだ」

中に入っていたのは、ざくろ石で作った髪飾りだった。

血のように赤いその宝石は、天界では貴重品となっている、天使の古戦場で取れるものだ。

「良かったですねデュラさん！ おめでとっございます！」

ドラコが小さく拍手をすると、周囲の天使や悪魔達も、やんややんやとはやし立てる。

口笛がピーピーと鳴り、そばに居た花屋の天使は、お二人に言っつて、バラの花を渡す。

「嬉しいな……えへっ……本当は、忘れられてると思ってたんだよ。

私、いつもいつも、ベルのこと振り回してばかりだから……」

「泣くほどって、俺はどれだけ信頼されてないんだ」

「嬉し涙は、いくら流しても良いものですよ。」

また百年後も、当店を宜しくお願いしますね」

アテナはぺこりとお辞儀をする。

その姿に、ベルは感慨深いものを感じた。

数百年前の緊張状態だった頃からすれば、信じられないほど均衡が保たれている。

天界の者達が、自分達のような悪魔達に頭を下げるというのは、あり得ない話だったのだ。

確かに悪魔達は適当で粗暴な者が多く、その事から、悪魔は野蛮だと言われ、天界から忌み嫌われていた。

それが、昨今の科学が進化した人間界では、神も悪魔も共に信奉者が廃れ、どちらもわずかな奇跡を起こす事さえ難しいという状態だ。

共に危機感を感じた天界、魔界の双方は、鉄のカーテンを払いのけて、互いに手を取り合ったのだ。

「平和つていいよなあ」

「ぐすつ……どうしたのベル？」

「ああいや、何でもない。アテナさんありがとう。また来るよ」

ドラコは先ほどからちらちらと、ポケットから取り出した懐中時計を気にしている。

時間があまり無いのだろう。

空いている手にドラコを抱えると、ベルは羽根を出して、空に舞い上がる。

「うひゃあつ?!」

「ドラコ、しっかり俺に掴まれよ。デュラ、俺は先に帰るから!」

「うん。また魔界で会おうね!」

「またな!」

「うわあ、ぱぱぱ、ぱんつが見えちゃいます!」

「ドラキュラはぱんつはかないんだぞ」

「え? 本当ですか!」

「嘘だ」

「はっあー！」

ドラコはまだごうもりにも変化できない状態で、今落ちれば大けがを負ってしまう。

だが、それを知ってか知らずか、今もぱんつがごうごうと声をあげ、じたばたと猫のように暴れている。

もちろん、取り落とさないように、しっかりと小脇にドラコを抱えたままで空を飛ぶ。

どこかの首無し女騎士と違って、か弱いドラコのこととは、ついじめたくなってしまうのは自分の悪い性分だと思う。

だが、ついやってしまうのだ。

「ほらほら、もうすぐだからじっとしてろよ」

「ぱんつが！ ぱんつーっ！」

「ほい、到着」

龍の停車場に着くと、黒服姿の虫の化身達が集まっているところに降り立つ。

ベルの到着に、誰もがしんと静まり返る。

そして、黒服達の列が割れると、杖を突いている片眼鏡の男性が姿を現す。

空いている手には、自分が著した魔界全書を持っている。

ベルとドラコを見て、老人はにこりと笑みを浮かべた。

彼こそ魔界の大公爵、サタンに次ぐ地位を持つベルゼブブだ。

「お帰りベル。ありがとうよ、ドラコ」

「ベルゼブブさま！ ぱんつ見えましたが！」

「ぱんつ？」

「お前は余計な事を言わなくていい」

ごっん

「はっあっ！」

「ただいま親父。ファフニーの奴が腹減ってるんだって？」

「ああ、そうらしい。」

「育ち盛りの龍族だから、仕方なかるうて」

そう言って、ベルゼブブは上品に笑う。

だが、ベルはそんな彼に少し不満を抱いていた。

今日こそは言ってやろう。

そう決めて、握り拳に力を入れる。

「親父っ！ 親父は仮にもサタンに継ぐ悪魔大侯爵なんだ！

たかが龍相手に時間を守れと、ビシツと言ってやってもいいんじゃないか？」

「でもなあベル、ファフニーが居てくれるからこそ、ワシらはこうして多くの軍団を率い、この会議に出席する事が出来るんだらう？」

感謝こそすれ、怒る理由など無かるう」

頭痛がしそうになって、思わず額に手を当てる。

まただ。

またこれだ。

この上品な笑い方、やんわりとした否定。

仮にも魔界で二番目の地位を持つ大侯爵なのに、まるで神のような性格になってしまっている。

確かに思いやりは肝心だ。

大切だ。

だが、悪魔を束ねる、最も大切な事は強さだ。

圧倒的な恐怖によって、相手を意のままに支配する事だ。

かつてのベルゼブブと言えば、大天使さえも恐れる悪魔の中の悪魔。

サタン様さえ凌ぐのではないかと言われ、自分も鼻が高かった。

それなのに、今は

「ところでドラコ、ぱんつとはなんじゃ？」

「気にしないでくださいっ！」

「今、ちらりと調べたが、ワシの魔界全書には『ぱんつ』なる単語が載っておらぬのじゃよ。

良ければ教えてくれぬか、ドラコ」

「はうあーっ！ おそれ多くもベルゼブブさまの魔界全書に、その



ような単語の意味を載せる必要はありませんっ！」

「ぬう、ワシの知識に泥を塗るかドラコよ」

「めっそも御座いません！」

「されば私、体を張ってお教えいたしますっ！」

ドラコは後ろを向き、スカートの縁を持つ。

おもむろにそれをめくり上げると、そこにはぷりんとした小さなお尻と、彼女の大好きなトマトが描かれた、白いぱんつが姿を現す。そして、ベルゼブブはそれをまじまじと見て、どこか感心したように、ほほうと小さく呟いた。

「親父、犯罪の匂いがするんだが。」

ベルは喉元まで出かかった言葉を、ぐっと飲み込む。

「なるほど、ぱんつとはおなごの腰巻き的事だな！」

体を張った忠義、誠に天晴れじゃぞ！

皆の衆、ワシは今猛烈に感動しておる！

「これを讃え、この地にドラコのぱんつ像を建てる事を提案するぞ！」

「え？ え？ えーっ！」

ドラコの顔から血の気が引いていく。

予想外の展開に、ベルはもはや言葉も忘れて立ち尽くすしかない。

「あわれドラコ、がんばれドラコ。」

俺じゃなくてよかった。彼は心から思う。

「ぱんつ！ ぱんつ！ ぱんつ！」

「ベルゼブブ様万歳！ ぱんつ万歳！」

「ドラコ万歳！ ぱんつ万歳！」

「新しい知識がまた一つ魔界に誕生した記念じゃ！」

「祭りじゃ！ 宴じゃ！」

ベルゼブブは杖を振り上げて、高らかに魔界全書を掲げる。

彼は、知恵が増える事に無上の喜びを感じるのだ。

そして今、彼は歓喜に包まれている。

彼が知らぬ事は、この地上からほぼ消えていたはずだったのだから

ら。

「あ、あの、ベルさま、たすけて……」

「父上、ドラコのような忠義者を従者にしていただけた事、このベルは誠に、誇りと思っております」

ひざまずき、涙を流すベル。

ベルゼブブはその頭に、祝福の粉を掛けて喜びを分かち合う。

「はうあああああああ！」

その日、魔界のスポーツ新聞の一面には、ベルゼブブの魔界全書に三千年ぶりの新語が掲載された事を祝う記事が、一面に掲載された。

写真はもちろん、半ベそになっているドラコと、トマトが描かれたばんつだ。

それを見た各地の魔王達は、魔界の未来はちょっと危ないかもと、軽く首を傾げたという。

## 第4章 誰、このパンチパーマ？

「なあ父ちゃん、父ちゃんも奇跡起こしてよ。

この石ころ、パンにしてよー」

帰りの道すがら、ラーフラは釈迦に食ってかかる。

久々に会ったキリストに、とても美味しいパンをご馳走してもらったのだ。

それも、気合いを入れるだけで石がパンに変わるといって、サブライズまで付いてきたのだから、若く好奇心旺盛なラーフラにとっては大はしゃぎだ。

しかし、よそはよそで、うちはうち。

仏教には、石をパンに変える奇跡など無い。

釈迦は自分の息子のわがままに、渋い顔を隠そうともしない。

「あのねえラーフラ、カレーが一番合うのは米なの、米。

こればかりは譲れないですね」

パンについて困っていたが、それ以上に、釈迦は熱狂的な米食信者なのだ。

昨今のナンで食べるカレーというものの存在に、計り知れない悲しみを感じているが、人の食い物に難癖を付ける器の小さい仏と思われたくない為、彼はぐつと堪えている。

そんな釈迦の気持ちを汲み取りもしない、ラーフラは親不孝な息子だと釈迦は思った。

「ナンおいしいよ。うちにも石窯作るうよー！

タンドールって言うんだっけ？

作るうよー、タンドリーチキンもできるしさあ」

「馬鹿者！ 今日の会議を見てただろう？

ただでさえ私への風当たりが厳しいのに、タンドールなんて作ったら、何を言われる事やら……」

釈迦の頭痛の種は尽きない。

まさか閻魔大王の娘、炎夜から、あんな指摘を受けるとは思ってもみなかったのだ。

基本的に仏教と地獄は深い関係にある。

蜜月と言っても過言ではない。

だからこそ、そのシヨツクは大きかった。

「あーあ、何だか興ざめだな。頭巾取っちゃおーつと」

「あつ、こら、やめなさい！」

今まで目だけが出るような頭巾を被っていたが、これを颯爽と外す。

そこにあるのはさらりとした黒髪と、切れ長で獣のような目。

まさに東洋的美男子の特徴の全てを受け継いだような、凜々しい横顔だった。

すらりとして背は高く、細身でありながらも筋肉質の体は、まさに色気をまとっていると言えるだろう。

そして、通りを歩いていた女性達はそれを見て、早くも色めき立つ。

「あつ、ラーフラ様よ！」

「きゃーっ、ラーフラ様あーっ！」

彼女達が手に持っているのは、天上界タレント雑誌『ODABU TU』だ。

今月号は折りも良く、彼の特集「ナンミヨー系男子を攻略しちやえ！ ラーフラ様大特集」と銘打たれている。

もちろん、表紙には笑顔のラーフラが写っている。

「あれあれ、見つかつちゃったら仕方ないなあ。あまり騒がないでくれないかい？」

「きゃーきゃーっ！ ラーフラ様あーっ！ 私も解脱しちやうつうう！」

「うわあーっ！」

私もう、輪廻転生しちやいそう！」

「ほらほら君達、前に進めなくてお父様が困っているだろう？」

「あーあ、お父様とか言ってるよラーフラ！  
さっきまで父ちゃんだったのに。」

「何だか情けなくて涙が出ちゃいそう。」

「お父さんとしては、これはショックだよ。」

「釈迦は目に見えて、辺りの空気を暗くする。」

「だが、そんな横でラーフラの笑顔は後光を放つ。」

「眩し過ぎてサングラスが必要な程だ。」

「ねえラーフラ様、誰このパンチパーマ？ 付き人？」

「ラーフラ様が見えないし、おじさんってばすごく邪魔だよー」

「そのヘアスタイル格好いいと思ってるの？」

「ねえ、格好いいと思ってるの？」

「ぶちつと、何か切れる音がしたけれど、仏の顔も三度まで。」

「まだ大丈夫、我慢したよ私。」

「偉いよ私。梵我一如。」

「私は宇宙、宇宙は私。」

「すーはー、すーはー。」

「みんなひどいなあ。この方は、僕のお父様なんだよ」

「えーっ、このパンチが？ 信じられない！」

「ラーフラ様のお父様って誰だっけ？ パンチだから髪の毛の神様

？」

「確か、頭良すぎてはみ出した脳みそがパンチヘアに見えるところか聞いたよ。うそくさーい」

「ぶちぶちぶちぶちぶちぶちっ」

「釈迦の中で色々なものが弾ける。」

「天地が創造され、瞬く間に終わりを告げる。」

「宇宙の真理が一回転し、巨大なビッグバンを巻き起こす。」

「仏ビーム！ 仏カッター！ 仏デストロイ！」

「うおおおおおおおおお！」

「父ちゃんっ、ここ特別平和自治区！」

「特別平和自治区だから！」





「えー、続きまして、豊胸エクササイズ詐欺です。

悪魔グループKYONYUが本日未明に、天界三丁目の雑居ビルにて摘発されました」

「うわっ、僕がナナの為に買っておいた通信教育の豊胸体操、詐欺だったのか！」

「豊胸体操って何よ、豊胸体操って……」

「二万へブンも出して買ったのに……うおお、悪魔めえ……」

ニコラは血涙を流し、悲嘆に暮れている。

ナナは真剣に頭痛がした。

そんなものに二万へブンも出したのかオイ。

後ろ頭に飛び膝蹴りを入れてやりたい気持ちをぐつと堪えて、それじゃないと訴える。

「え、通信教育の豊胸体操の事じゃないの？」

「ニューズが切り替わった時にニコラが起きたの！」

さつきやっていたのは、サンタクロースの予算削減による廃止決定が、森羅万象国際会議で決まったっていうニューズよ！」

「なんだとおおおおおお！」

「今さら驚くんじゃないバカ！」

さすがのニコラも、寝ぼけている場合ではない。

サンタクロース廃止。

それでは自分はどうなるのか？

気が気ではない。

「でね、その後は携帯ストラップの神様に配置換えらしいよ」

「携帯ストラップの神……なんて地味なんだ……」

「まあ、さすがに私も地味だと思う……」

二人で言っていて、なおさらにへこむ。

まだサンタになって十年というのは、新米も良いところだ。

そして、やっと仕事に慣れてきたところだとも言える。

天界・魔界にも景気、不景気の波があるとは言え、サンタクロース廃止。



これはちょっと、子供達に対してひどい仕打ちではないだろうか。  
「抗議するにはどうしたらいいんだろう。」

私、ひとつ走り、天界と魔界に行ってくる。」

「まあ待て、闇雲に抗議したって何もできやしない。」

まずは、この決定の効力がいつからで、どんな抗議手段があるのか調べよう。」

なんだ、ニコラにしてはまともな事を言っじゃないか。

ナナは少し感心する。

「で、調べるって?」

「もちろん、天界ネットの教えてへブンちゃんねるに書き込むんだ!」

キラキラとした瞳は、何かの確信に満ちている。

駄目だ、この人早くなんとかしないと。

ナナは淹れ終わったコーヒをサーバーからカップに移すと、無言のままニコラに渡す。

これでも飲んで落ち着け。

彼女なりの小さな抵抗だった。

「見なよほら、親切な人が早くも僕達に教えてくれてるじゃないか!」

「どうせろくでもないんでしよう」

期待はせずに、画面を覗き込む。

一件目 : ヤホーでゴグれば良いんじゃない?

二件目 : ゴグれカス

三件目 : 新参乙

四件目 : そんな質問で大丈夫か? ああ、問題ない。

それ以後も返事が書かれるが、似たような調子だった。

予想通り過ぎて、もはや何と言っていいか分からない。

ナナはがっくり膝を突く。

「うーん、今日の僕は冴えてると思ったんだが、不発だったか」

「ニコラはいつも不発でしょう？ まったく！ ここに天上六法があるから、調べようよ！」

「こんな事もあるのかと、既に調べておいたのさ。フッフ」  
きらりと白い歯が光る。

ナナとしては、ここでアルゼンチンバックブリーカーを極めておきたい欲望をぐっと堪えて、ニコラの話を聞く事にした。

「さて、この天界六法の天界法第三八条九項によると、森羅万象国際会議にて発議され、可決された事項に不服がある者は、三ヶ月以内に異議申し立てを行う事が出来る」

「じゃあ早速、異議申し立てしなきゃ！」

「まあ待て、その後、実際の異議申し立てに関する事例が載っているけど、全て却下されてる」

「それって……異議申し立ての意味あるの……？」

ナナの表情はにわかに曇る。

だが、ニコラは続きがあると言って、ページをめくる。

「さっきの法には十項があり、異議申し立てをしても受理されなかった場合、聖戦を宣言し、会議で賛成に票を投じた当該議員達に対し、宣戦布告を行い、武力解決を図る事ができる特例が認められている、と書いてある」

そう言って、十項の特例の説明に、蛍光ペンでラインを引く。

やけに冷静だが、この人は何を言っているか、理解しているのだろうか。

ナナはますます頭痛がひどくなる予感がする。

「あのねニコラ、森羅万象国際会議では、最低でも三分の二以上の賛成を得られないと、あらゆる提案は可決されないの。」

逆に言えばね、天界、魔界の両方を合わせた、千数百の有力魔族、天使達が私達の言うことに耳を傾ける必要があるの。

もし下手をすれば、主やサタンなんかにまで弓を引く事になる。

だからみんな、この会議で決まった事については、仕方なく受諾

して来たんだよ?」

ナナは幼い子供に教えるように、お姉さんぶった態度でニコラに言い含める。

しかし、彼はそんな彼女の言葉を聞きながら、大きくあくびをした。

さすがのナナも、これにはムツとする。

「ちよつとニコラ、あなた真面目に聞いている?」

「聞いているよ。それくらい分かってるさ」

「じゃあニコラ、あなたまさか、サンタクロースの地位を賭けて、今の世界にハルマゲドンでも起こすつもりなの?」

「そうだよ」

ニコラはさらつと言い流す。その態度に、ますますナナは腹が立つのを隠せない。

「あのねニコラ? 私達、二人だけなんだよ! あつちは天界軍と魔界軍。分かる?」

「怖いのか、ナナ」

ぶつきらぼうで短いその言葉に、少しだけ返事に詰まる。

言いたくはないが、この状況ではやはり格好を付ける分けにいかない。

むしろ、寝起きで頭がボケているのか、自暴自棄になっているニコラを止めるのは、自分の役目だ。

深呼吸をして、いつもと違う真剣な眼差しを向ける。

「怖いに決まってるでしょう? 何バカなこと言ってるのよ!」

「じゃあ逃げろ。逃亡資金は僕の口座に余ってる金、全部使えば事足りるだろう」

「逃亡資金って何よ? ニコラは貧乏じゃない」

「ほらよ」

ポケットから天界銀行の通帳を取り出すと、ナナの目の前にぽんと置く。

それはいつも見ている通帳とは違う、天界銀行の定期預金向け通

帳だ。

中身を確認したナナは、己が目を疑った。

「いちじゅうひやくせんまん……ちよつとこれ、何？ ゼロの桁数が、普段見るより三つほど多いんだけど」

「世界中のおもちゃ会社から、僕に入ってくるリベートだ」

「リベートつて、それ、賄賂じゃない！」

「きれいな事だけで子供の夢が成り立つのか？」

サンタクロースは天界・魔界連合から一定の資金提供を受けているが、それだけで全て事足りるほど、甘くないんだ」

面白く無さそうに、ナナの方に振り向きもせず、ニコラは答える。

「でもでもっ！ 子供達に夢を配るのがサンタでしょ？ それがニコラの誇りでしょ？」

「そうだよ。誇りだからこそ、ナナに対しても今まで黙ってたんだらう？」

だから僕は報いを受ける。

このリベートの罪に対する報いを。

天界と魔界を相手に、たった一人でも戦ってやるよ。

それで死ぬなら本望だ。

子供達の笑顔の為に、僕はこの世界の塵になる。

神が正しくて、悪魔が間違ってるとか、神は間違っていて、悪魔が正しいとか、理屈や理論はどうでもいい。

どっちも正しいか正しくないか、頭の悪い僕には分からないからでもね、子供達の笑顔を守る事は、間違いじゃないと思う。

どうせ天界も魔界も、ろくでもない余分な予算を、じゃぶじゃぶ計上してやがるんだ。

それを削りたくなくて、一番削りやすい僕らのところにしわ寄せが来た。

こうなることは分かってたよ。

引退した初代サンタは、その瞬間を迎える事に耐えきれず、見ず知らずの子供で、たまたまサンタを世界一愛していた僕に、二代目

サンタを譲ったに違いない。

あの時は分からなかったけれど、天界テレビのニュースを見ている内に、こうなるだろう未来は予想できたんだ。

頭の悪い僕にもさ」

「じゃあニコラは死ぬの？ こんな事で死んじゃうの？

バカだよ！ そんなのバカ！」

ナナが半べそになってバカ扱いをすると、ニコラは彼女ににやりと笑う。

「僕は男の子なんだ。何歳になっても、バカな男の子だよ。

女の子に理解してもらおうなんて思ってない。

だからナナ、君だけでも逃げる。僕のバカな遊びに付き合う必要は無い」

「やだ！ ニコラが死ぬなら私も死ぬ！

やだやだやだ！ バカニコラ！ うんこ！」

うんこはひどくないか、ナナ。

言葉に出さず、ニコラは少しへこむ。

「とにかくそういう訳なんだ。

君はもう、一人でも生きていけるだろう。

十年間楽しかったよ。本当にありがとう」

ニコラはそつと目を閉じ、ナナを優しく抱きしめようとした。が

「自分の命を粗末にするんじゃないわよ。バカニコラあ！」

「ぶべらっ！」

ナナの力一杯の一撃を、横っ面にお見舞いされる。

その痛みに、何が起きたのか分からず、呆然として頬をさする。

だが、その痛みは少しだけ優しい気がした。

「だいたい何よ、さつきから格好付けてばかりでさ！

私の事泣かせたり！

調子に乗るんじゃないわよ！

ニコラはいつもそう、わがままで、エッチで、最低！」

「わがままでエッチで最低な奴の為に、ナナが死んでどうするんだよ」

「それを私が直してあげるまで、ニコラを死なせてなんかやらないんだから！」

「あははっ、それじゃあ僕が死ぬまで直らないかもよ」

「だったら死なせてなんてやらないっ！」

そう言っつて、今度はナナの方からニコラに抱きついてきた。

だが、突然の事で受け止めきれずに、そのままバランスを崩し、後ろに倒れ込んでしまう。

やれやれまいったね。

言葉にできずに、そのままぼんやり天井を見上げる。

「エッチな僕にしがみついたら駄目だろう？」

「ニコラは優しいから大丈夫だもん」

「そうだな、僕は優しいぞ」

ナナがまだ小さかった頃のように、頭を軽く撫でてやる。ぐずつて泣いているナナを、泣きやむまでこうして撫でていた。

時間は過ぎてても、やることは変わらないらしい。

「僕のそばにいたら、死んじゃうかも知れないんだぞ」

「死なせないもん。絶対私より先に死なせない」

「やれやれ、バカなペットを拾ったもんだ」

「バカなご主人様だから、お似合いでしょ」

「なるほど、その通りだな」

ナナの切り返しに、思わず笑ってしまう。

ああ、本当に僕らはバカだ。

きっとこの世が終わるまで、救いようが無い大バカだ。

けれど、小利口な天界や魔界の奴らより、遥かにマシだ。

初代サンタさん、僕はあなたが出来なかった事、引き継ぎます。

あんな無謀で頭の悪い出会い方をした僕だけど、サンタ魂は宇宙で一番のつもりです。

どうか見守っていて下さい。

「で、いつまで僕の上につかっているの？」

「うーん、もうちょっと」

「そっか」

「うん」

たまにはこういうのも良いだろう。

こんな時しか素直になれない、僕らはそういう不器用なDNAを持っている。

分かっているからさ。

と、しみりりしているのも束の間だった。

今度は小屋が揺れ、轟音が辺りに響き渡る。

まだ宣戦布告をした覚えは無いんだが？

「ナナ、こたつの中に頭を入れる！」

「だめ！ ニコラが先に入って！」

「バカっ、僕の性格を直す為には、お前が生きてなきゃ駄目なんだからっ！」

「うわあっ」

嫌がるナナをむりやりこたつにねじ込み、尻を押す。

意外と大きいんだな、胸は小さいのに。

「ニコラ、よく分からないけど今私の事バカにした？」

「していないしてない」

首を左右に振り、落ち着いて辺りの様子を伺う。

すると、窓の外に見慣れない、黒い大きな影が映っている。

音と振動は、それが原因らしい。

さて、鬼が出るか蛇が出るか。

唾を呑み込み、ニコラはサンタクローズ波を徐々に撃つ事を頭の中でシミュレートしながら、相手の出方を待っている。

すると、突然ドアが開き、上等そうなスーツに身を包み、白い息をはずませる東洋人の女性が姿を現した。

「まいどおおきにサンタさん！ 大阪のマミヤ商会代表取締役社長、間宮倫音ただ今参上！」

暗闇の中、巨大な塊にライトが当たると、それはロシアの軍用ヘリだというのが分かった。

人が忙しい時に限って、政府の誰かがサンタの自分を紹介したのだろうか。

だが、彼は同時にその名前を聞いて、ある記憶が蘇ってくる。

彼女は束ねた髪をヘリの風になびかせながら、眼鏡の位置を直す  
と、満面に笑みを浮かべた。

面白いなあ、実に面白い。

漫画でもない映画でもない、現実こそが面白い。

そしてこれこそが運命なのか。

ニコラは苦笑しつつも立ち上がると、ようこそと言って両手を広げた。

どうせなら、こいつも事件に巻き込んでやれ。

花火は派手な方が面白い。

なあ、そう思うだろうか？



## 第6章 はぐれサンタクロースと愉快な死の商人

こがねむしーはー かねもちだー かねぐらたーてた くらたて  
たー

それは自分の為にある歌だと、彼女は今も信じて疑わない。

間宮倫音という女は、金を心の底から愛する、根っからの大阪商人だ。

本来の両親は、東北の小さな鉄工所を経営していたが、資金繰りの問題から自殺した。

その後、十歳までを孤児院で育ち、大阪で小さな玩具問屋を営んでいた養父、間宮勝治に引き取られた。

しかし、高齢だった勝治はすぐに現役を退いてしまう。

倫音は急遽その後を継ぎ、中学校を卒業してすぐに社長に就任した。

それからわずか五年で世界に名だたる総合商社、ママヤ商會を育て上げた敏腕社長として、業界でその名を知らない者は無い。

派手な演出を好む事から、テレビの露出も積極的であり、今や美人女社長として、タレント業でも成功を収めている。

そして、様々な業界に進出してまだ間もない彼女は、買収したアメリカの玩具会社を通じ、サンタクロースの存在と、その取引方法について知ったのが、つい最近の事だった。

思い立ったら即実行。

野武士上がりの商売コンピューターを脳に搭載した倫音は、ロシア軍に賄賂を渡し、軍用ヘリにてこの地まで運んでもらう契約を取り付ける事に成功。

晴れてサンタが住んでいる、シベリアの奥地へとやって来たのだ。

「いやあ、サンタさんってえっらい男前やねえ！

ヘリを降りて早々、こんな歓迎してもらえとは思わなかったわ！

ホンマに、まいどおおきにー！」

「遠いところをようこそ。外は寒いでしょ？  
中にお入り下さい。」

温かいお茶とお菓子もありますよ」

「あはははっ！

うち、ロシア語も勉強しましたのに、なんや、日本語でOKです  
やん！」

「サンタクロースですからね！

さあ、どうぞどうぞ！」

突然の来客、それも初対面に対して、やけに愛想が良い。

これは何かあるなど、倫音は勘で察知する。

突然の来訪で度肝を抜いて、いきなり手を出して握手でもしたら、  
そこから交渉が始まると思っていたが、さすがに思惑通りにはいか  
ないらしい。

しかし、何事も平坦ではつまらない。

取引先がマフィアを連れて来た事もあれば、軍事政府の施設に監  
禁された事もある。

たかが二十歳の女丈夫、学歴も職歴も無い、気合いと根性だけの  
ナマモノ。

自分は所詮女だ。

そしてただの若者だ。

メディアにどれほど露出しようが、どれほど稼ごうが、一步外に  
出れば極東の島国で生まれたメス猿という扱いを受ける。

むしろ、下手に大金を持っているが故に、このメス猿からどうや  
ってむしり取ってやるうか？

狼達は常に牙を隠して笑い掛け、時には脅しを掛ける。

しかし、それはスタート地点に過ぎない。

狼だろつが悪魔だろつが、巨万の富はその懐に眠っている。

手を組むか、懐柔するか、従属するか、逆に脅し返すか、時と場  
合によって為すべき事は変わる。

サンタクロースが子供の味方と言っても、実態は多額のリベート

を受け取って、世界各地の玩具会社と取引を行っている、一商売人に過ぎない。

彼もまた狼であり、企業戦士なのだ。

「分かってると思いますけど、うちはサンタさんにインタビューに来たテレビ局や新聞社とはちやいますねん。」

言うまでもないと思いますけどね」

「当然でしょう！ あなたもまさか、こんなシベリアの奥地に僕に会いに来たわけではないはずだ！」

湯気の立つお茶をナナから受け取ると、倫音は軽く口を付ける。

商談の席は喉が乾く。

一時たりとも気を抜けない。

信頼できるのは、自分自身と、この茶のみ。

「契約を交わした場合、毎年最低でも一万ドルを契約料として払うこと。」

でしたねえ」

「はい、その通りです」

にこにことして、愛想の良い笑みを浮かべるニコラ。

さて、何を言ってくるやら。

倫音は胸が高ぶるのを感じる。

彼は一番嫌なタイプだ。

自分にとって、一番嫌な条件を出してくるタイプ。

言いくい事を、その場の勢いだけで強引にねじ込もうとする、

オス狐野郎の匂いがする。

部屋の中はまるで日本のお茶の間。

ご丁寧に畳まで敷いていて、こたつの上にはみかんが鎮座。

壁に飾られているのは、一昔前に流行った自然を描く画家のリトグラフ。

そしてふすまの押入。

部屋の中はまるで純日本風。

聞いていた通りの造りだ。

特別な事は何も無いし、経済的に困窮している様子も雰囲気もない。

既に名刺は渡した。従者として、幼い人型のグレムリンが一匹。これも情報通り。

彼女は何だか緊張した面持ちをしている。

見た目通り、純情で純粋な子なのだろう。

こちらはノーマークでも構わない。基本的に商売には関わらない、ただの事務要員だ。

「ところで間宮さん、大変申し上げにくいお願いがあるんですよ」

満面の笑みで切り出すニコラ。

「さあ来た、何を言ってくる？」

「おやおや、うちとサンタさんはもはや心の友と書いてしんゆうと読む！」

困った事があれば、不肖このマミヤがお役に立ちませ！」

倫音はドンと胸を叩く。カネならある。何ら心配など無い。アタツシユケースには常に百万ドルを持ち歩いているのだ。

「それは心強い！」

「はっはっは！ 大阪商人はケチやなんて嘘ですわ！ さあ、何でもおっしゃって下さい！」

「実はですねえ、今の人間界以外に、この世界には天界、魔界というのがあるんですよ」

「なるほど、ファンタジーやねえ。」

でも、サンタクロースがおられるくらいですから、神も悪魔も当然おられるんじゃないかな」

「ええ、それですね、天界と魔界というのは、百年に一度だけ、森羅万象国際会議というのを開催してまして、この前、ちょうどそれが行われたんですよ」

「ほうほう、それで？」

「そこですねえ、サンタクロース予算削減などという、まことに！ まことにバカな提案がされたんですよ！」

「なるほど！ それはあきません！

子供の夢を奪うような愚かしい行為ですわ！」

カネカ。

OK、了解だ。

倫音はポケットの中にある、アタツシユケースの鍵を握りしめる。

「しかもですね、これにより、サンタクローヌは廃止して、この僕に携帯ストラップの神になれなどと、こんな事まで言い出す始末です！」

「え、廃止……？」

焦るな。落ち着け私。

サンタ廃止などというのはハツタリだ。

そうであれば、自分を部屋に通すはずがない。

いや、詐欺に巻き込まうとしている？

アタツシユの鍵を握った手に、じつとりと汗が滲む。

相手の意図が分からなくなってきた。

「ね、愚かしい話でしょう？」

こんな事が許されるはずありません！」

「いやはや、全くその通り！」

それで、うちにお願ひゆうのは何ですやる？」

「これから天界と魔界を相手に戦争するので、一緒に戦って下さい！」

満面の笑み。

素晴らしい笑み。百万ドルの夜景よりもなお眩しい。

倫音の顔は凍り付く。

これはジョークか？

試しているのか？

わざと嘘を吐いて、忠誠心を試そうというのか？

天界と魔界を相手に戦争。つまるところがハルマゲドン。

最終戦争であり、天使が角笛を吹き鳴らすアレでナニだ。

「はっはっはっ、サンタさんも冗談がお上手やね！」

うちと一緒に大阪に移住しませんか？

日本語も堪能なようやし、サンタが漫才となれば人気も出まつせ

！」

「冗談だったら良かったんですけどねえ。現実ってのは厳しいんですよ」

ニヤニヤとした嫌な笑いを浮かべるニコラ。

倫音はいかんとも返事をできない。

果たしてどう言ったものだろうか。

これは嘘だ。

絶対に自分は試されている。

相手は自分を値踏みしているのだ。

よくある事。

常套手段。

若い女だと思って、相手も舐めているのだろう。

「あのね……マミヤさん……すぐ言いにくい事なんですけど……」

「あ、えーっとグレムリンの、確かナナさんでしたっけ」

「はい、ナナです」

ペこりとナナはお辞儀をする。

彼女はなぜか、とても申し訳なさそうな顔をしている。

「っと、話の腰を折ってしまいましたね。」

すみません。で、何でしょう？」

「ニコラが言っている事は本当です。私は」

そこで言葉を切って、ナナは倫音をきつと見据える。

「私は、ニコラと一緒に戦います。」

ですが、あなたはただの初対面の人間。

無理にニコラや私と一緒に戦う必要はありません。

その気が無いなら、今すぐお帰り下さい」

話が見えない。

自分は商売にやってきたのであって、戦争に来たのではない。

ましてや天界と魔界相手、人外の者や雲の上と戦争をする。

天地開闢して以降、生物が二足歩行を始め、猿が人間に進化し、文明を造り、科学の洗礼を受けて今がある。

人は争い、殺し合ってきた。

その歴史は戦争の歴史。

血にまみれた汚れた歴史。

肌の色が違う。

喋る言葉が違う。

信じる神が違う。

だが、戦争は戦争屋の仕事。

自分は関係無い、そのはずだ。

「あー、んー、具体的な話が見えませんか。うちにどうしろと?」

「戦争の支援をして下さい」

「勝算はあるんですかね」

「ゼロです」

「負け戦にカネを注ぎ込めと?」

「そうです」

くそまじめな顔で、さらりと言っただけ。

なるほど、嘘や冗談の類ではないらしい。

商談は終わりだ。流れた。

もうここに居る時間は一分一秒さえも惜しい。帰ろう。

「あ、急にたこ焼きが食べたくなっただわ! 帰ります! さいなら

!」

「待てよ。商談はまだ終わってない」

ニコラはその肩を掴み、倫音を引き留める。

だが、彼女はその手を払うと、無言のままドアのノブに手を掛ける。

「逃げるのか?」

あんたはその程度の根性で、こんな地の果てまで来たのか」

「悪いけど、商売にならんことに興味は無いんや。」

「うちはカネが好きや。」

カネ以外何も信じてへんし、カネがあれば幸せも買えると思とる。安っぽいヒューマンドラマがしたいなら、そのグレムリンの嬢ちゃんとか、宗教家や道徳家どもとでも語らって欲しいねん」

「お前もずいぶん変わったなあ、リンネ」

「やれやれと言った仕草をしながら、ニコラはプレゼント袋に手を入れる。」

「いきなり下の名前で呼んで、何やねんな。馴れ馴れしいで」

「十年前、児童養護施設のふじむら園にお前は居た」

「何で知つとるんよ」

「その時のみんなの呼び名はリンネ。大好きなのはアニメ『クマプー伯爵の大冒険』とチョコドーナツ。」

「嫌いなものは、園長先生の作るちよつと辛すぎる麻婆豆腐」

「……………」

「何を言っている？」

「この男は何だ？」

「何者だ？」

「サンタは神か？」

「ぐるぐると心の中で渦を巻く。」

「心臓の鼓動が速くなる。」

「思考が停止する。」

「いや、停止してはいけない。」

「相手のペースに飲まれては駄目だ。」

「必死になって冷静を装う倫音の手に、プレゼント袋から取り出したぬいぐるみをそつと渡す。」

「十年遅れだが、メリークリスマス。リンネ」

「クマプー伯爵のぬいぐるみ……………」

「サンタクロースは、良い子の味方だ。大人になつたとしても、ね」  
「目頭が熱い。」

「涙がこぼれていた。」

「忘れていた思い出が蘇る。」



ショーウィンドウに張り付いて、欲しい欲しいと泣きじゃくって、園長先生を困らせた。

あの日あの時、あのぬいぐるみ。

分かっていたのだ。児童擁護施設の経営はとても苦しくて、あんな高額のプレゼントなど、とても買えるような状態に無いことを。

それでも、自分はどうしても欲しかった。

そして、買ってくれなきゃ死ぬと言って、倫音は道路に走り出す。迫り来るトラック。

信号は赤。

横断歩道でさえ無い道。

けれど、ギリギリで約束を引き出したら、逃げるつもりだった。なのに、足がすくんで動けない。

このままでは死ぬ。

そう思い、目を閉じた。

次の瞬間、向かいの歩道に自分は転がっていた。

雪と泥でぐしょぐしょになった、バカな男の子に抱えられながら。

『リンネ、良い子にしていればいつの日か、サンタクロースがプレゼントしてくれるよ』

彼はそう言って、笑ったのだ。

あいつはサンタクロースバカ。年がら年中頭の中がクリスマス。

クリスマスの翌日には、あと三六四日寝るとー くりすますーと歌い出す。

そんな大馬鹿野郎。

そう、あいつの名前は

「花巻……ニコラ……?」

「イエス、アイアム!」

くしゃくしゃと倫音の頭を撫でる。

その顔は、良い子を前にしたサンタクロースのものだ。

「あのサンタフェチのニコラ?」

「待て、サンタフェチって何だ」

「鹿とトナカイの見分けが着かへんくて、靴下売場に行くと頬を染めるニコラ?」

「まあ……間違っではないが……」

「ニコラ! ニコラちゃん!

うわ、うんニコラ!」

「またか! またうんこかよ!」

「あははっ……何や、生きてたんや……みんなあの日……あなたの帰りを待ってたのに……」

「それは本当に、悪かったと思ってる」

「あんな、今さらやけどな、あんたに言わなアカンことあんねん」

「何かな」

「おかえりなさい、ニコラ」

「ただいま」

十年ぶりに交わす挨拶。

何気ない、いつも通りの言葉。

なのにそれは、ひどく懐かしい。

彼女はニコラの胸に顔を埋め、涙で顔をくしゃくしゃにする。

眼鏡を外して、何度も何度もまぶたを拭う。

まさに電撃的な再会。

そのタイミングは、史上最低で最悪だ。

ハルマゲドンを起こそうとするサンタクロースと、彼に商談を持ちかけにきた強欲な商人。

しかし、二人はかつて同じ場所で、同じ時間を過ごしていたのだ。ドラマチックにも程がある。

運命は神にも仏にも分からず、ただ自然がそれを知るのみ。だが、なるほど。

運命という言葉はまさにこのためにあるのかも知れない。

『ああ、泣かせるじゃないですか』

プレゼント袋がプラカードを出すと、ナナももらい泣きをしながら、うんうんと頷く。

こんな時、サンタの助手をしていて良かったと心から思える。いくつになっても、どれほど時が過ぎても、欲しいものがある。それは決して高いものじゃない。

すぐに手に入るはずなのに、忘れていたり、わざと目を逸らしたりして、結局手に入れられないまま。

でも、サンタクロースは忘れない。

世界中の良い子達、みんなの事を覚えている。

「リンネの活躍はテレビやネットのニュースで見たよ」

「見てたんやったら、なんでうちに声をかけてくれへんねんな！水くさいわ！」

「いきなり家出して、サンタになっちまうような放蕩息子の僕が、園長先生やお前に合わせる顔があるはず無いだろう」

「それを言うんやったら、たかが五年の間に、色んな人様の血を吸ってきたうちはどないしたらええねんな……」

にわかに倫音の表情が曇る。

だが、ニコラは全く気にする様子も無い。

もう一度座り直すように促すと、倫音はこたつに足を入れる。

「会社、結構黒い噂が多いみたいだな」

「半分は嘘。けれども、半分は本当や。」

一介の中小企業が短期間でのし上がるのに、正攻法で清く正しくなんて、そんなことできへん」

「ああ、リンネは頑張ってる」

「そうや、うちは頑張ってるねん。」

ふじむら園の子らが、大学や専門学校に通えるように、奨学金を作ったんやで？

今、子供達はクリスマスにプレゼントを園長先生からもらうこともできるし、パソコン環境も整えた。

他の児童養護施設にも、同じように奨学金を創設したんや。全部うちのカネ、うちのゼニ、うちはちゃんと社会に還元してる。

カネに綺麗も汚いも無い。大切なのは、使い方や！」

「そうだね」

「おとんが叶えられんかったこと、おかんが夢見たこと、園長先生ができたこと、うちが全部やっとなねん！」

「素晴らしいよ」

「でもな、世間はうちのことカネの亡者言うねん！」

カネの為に人を殺す言うねん！

うちかてな、色々考えてんねんで？

頑張つてんねんで？

みんなの為になることもしてるやんか！

巨大企業になったマミヤ商会はもう、うち個人の持ち物やないね

ん

「だろうね」

倫音は溜息を吐き、ほおづえを突いてニコラを見る。

軽い自嘲を含んだ笑みを浮かべ、彼女は続けた。

「なあニコラ。うちはこのクマプー伯爵のぬいぐるみ、受け取れん

よ

「良い子じゃないからか」

「そうや」

「これからなればいいだろう？」

「これからって、もうなれんよ」

「いいや、なれる」

そう言つて、ニコラはクマプー伯爵を持つと、倫音に渡す。

「お前はこれから、サンタクロース存続を求めて戦うんだ」

「負け戦なんやろ」

「勝たせてくれ。お前の力で」

「神と悪魔相手にケンカせえって？」

「ああ」

真剣な眼差し。

サンタクロースを信じて疑わなかった少年は、十年経つてもあの頃のまま。

一方の自分は十年経って、カネの亡者になり果てた。

止めどなく、ただ稼ぐ事を正義と思い、世界中を飛び回ってきた。取り戻せるだろうか。

壊れた時計の止まっていた秒針は、動かせるだろうか。

「なあ、ナナちゃん」

「何ですか？」

「こいつ、アホやろ」

「アホですね。真性の、屈指の、宇宙一の、空前絶後の、選りすぐりのサラブレッドアホです」

「あはははっ、そやなあ」

「アホでバカで救いようがないけど、世界で一番のサンタクロースです」

そう言って、ナナは笑う。

彼女をこんな素敵なお顔にできる、ニコラはそういう男だ。

彼はきつと世界中の子供達に、年に一度、こんな笑顔をプレゼントしている。

ああ、嫌だ嫌だ。

最低だ。

最悪だ。

妄想にも程がある。

夢見る少女の時代は終わった。

そのはずなのに。

こんな事に心が揺れる。揺れている。

「このクマプー伯爵、もろてもええのん？」

「君のものだよ、リンネ」

「報酬をもらった以上、働かなアカンよなあ」

「そうだね」

「例えば、神と悪魔を相手に戦争をするアホの手助けとか、どうやら」

「それは良いアイデアだ」

「ええやろ？ うちもそう思っわ」

笑いが込み上げてくる。

背筋がぞくぞくとする。

どこで儲ける？

どうすれば儲かる？

どうすれば勝てる？

どうすればいい？

不可能尽くし、無い無い尽くし、無理無茶無駄のオンパレードだ。

間宮倫音は負けない。

刺されても撃たれてもくたばらない。

不滅のヴィーナス、金の亡者。

そんな私に相応しい大勝利を。

大団円を迎えねばならない。

神よ悪魔よ、見ているがいい。

私はお前達を信じない。

信じた事も無い。

だが、そんなお前達に弓を引く。

私の名前は間宮倫音。

通りすがりの商売人だ。

## 第7章 ウキウキときめきハルマゲドン

『1、2、3、はい皆さんこんにちは！

銀河宇宙天界魔界全ての良い子のみんな、お元気ですか？

僕はサンタクロースのお兄さんだよ！

現在天上界テレビ局の第三スタジオから、全天界・魔界に対して生放送をしていまーす。

ところでみんな、森羅万象国際会議が開催されたのは、もう知ってるよね？

そこは天界・魔界の最高意思決定機関として、とても大切な場所なんだ。

そして僕こと、サンタクロース予算は削減され、廃止という事になりました。

はっはっは！ 笑えません！ 笑えませんよこれは！

僕はこれを受け容れたら、携帯ストラップの神にされちゃうんです。

せつねーっす！ これは切ない！ やってられません！

そこで僕は考えました。無い頭捻って考えました。無知の一番搾り。その結果

そうだ、戦争しよう！ やっちまえ！ ハルマゲドンしちゃえ！

というわけで、今から大切な事を言っただけやるから、耳の穴かっぽじってよく聞け。

テメエらに正々堂々と宣戦布告してやりますから、宜しくお願ひしますクソ野郎共』

釈迦が、イエスが、ベルゼブブが、アスタロトが、その放送を同時に見ていた。

最後に映し出されたのは、思いつきり中指を立てて、ベロを出したニコラの顔。

天地開闢以降、どれほど緊張感が高まった時でさえ、神と悪魔は全面衝突を避けて、ハルマゲドンは回避されてきた。

数々の神々と魔王達が協議を重ね、平和は築かれて来たのだ。しかし、悠久の歴史も、永久の平和も、たった一人の男によって脆くも崩れ去ったのだ。

男の名前は花巻ニコラ。元人間であり、ただのサンタクローズ。それ以上でも以下でもない。

そして、そんな放送を見て、一人身もだえる少女が居た。地獄の底の、底の底。

岩窟の中でテレビに見入る、彼女の名前は六道炎夜。

「うおおおお、萌える！」

いや、燃えるわ！

やってくれたわサンタクローズ！

天界とか魔界とかお構いなし、ぶちかましてくれた！

キョんキョんしちゃう！

この男こそ、いや、このサンタこそ、六道炎夜のムコに相應しい！

決めた、彼しかないわ！」

シュツシュツと拳が空を切る音。

見よう見まねのシャドーボクシングだ。

炎夜の体は字のごとく燃え上がり、血が全身にたぎっている。

女は一生のうち何度でも、やらねばならない時がある。

戦わねばならない時がある。

そして二人のドラマは始まる。

灼熱地獄の夏物語が展開する。

待ってなさいサンタクローズ。

この私が、この六道炎夜様が、全財産全勢力全権を持って助けに上がるから。

ああもつ、殺したいくらいに愛おしい。

この手で昇天させてしまいたい。

一緒に針の山に登ろう。



血の池地獄を共に泳ごう。

地獄の釜で混浴しよう。

人間界の子供達の為に！

光と正義の名の下に！

私のきやつきやうふな未来の為に！

ハルマゲドン！ なんと素晴らしい響きか！

ハルマゲドン！ サンタクローズにこそ相應しい！

ハルマゲドン！ 天界魔界の誰よりも、この私にこそ相應しい！

ああサンタクローズ、この私の到着を待ってなさい。

首を長くして待ってなさい。

「炎夜さま、おやつをお持ちしましたよ」

不意にドアが開く。

ノックはしたのだが、炎夜はそれに気付いていなかった。

そして、反射的に体が動く。

「ほあたあーっ！ 炎夜チョーップ！」

「うひゃあ！」

思わず盆を落としてしまい、辺りに地獄チップスがちらばる。

「つと、ごめんごめん、鬼三郎だったのね」

「炎夜様、何やってるんですか……」

ぶつぶつと文句を言いながら、床に散らばった地獄チップスを拾い上げる。

いつもの事だが、この人のやんちゃは治るのだろうか。

鬼三郎は、自分より年上のはずの炎夜に対し、母親のような心境になる。

「ところで鬼三郎、今テレビは観てた？」

「いえ、掃除をしていたので」

「分かった。ありがとう。私はこれから少し出かけるけど、お父様には夕方には戻ると伝えておいて」

「お出かけですか？」

「ちよっとこれから戦争にね」

「戦争？」

「何でもない。それじゃ、いつてきます！」

不審だと思いつつも、おかしな言動はいつもの事だ。

黙って鬼三郎は彼女を見送る。

余計な事を言つと、その窓から、血の池に叩き落とされてしまいかねない。

今までに何度もそんな経験があるのだ。

UFOが墜落したから出かける。

神と悪魔が現れる以前に居た、超古代生物に会ってくる。

彼女が出かける時の理由は、たいていそんなものばかり。

おおかた戦争とか言いつつ、地獄軍隊アリの争いでも見に行くの  
だろう。

ふとテレビを観ると、既にサンタクロースの宣戦布告は終わって  
おり、放送されているのは、地獄漫才のホネホネトリオだ。

つまらないのでスイッチをオフにすると、鬼三郎はいつも通り掃  
除を始める。

今日も地獄は平和だ。

何事も無く、罪人達が阿鼻叫喚の声を上げている。

鬼三郎は軽く伸びをして、持ってきた地獄チップスを嚙りながら、  
洗剤のついたモップを水に浸すのだった。

## 第8章 悪魔の誇りと神の思い

「ちよつ、見るよ！ サンタが宣戦布告してるぞ！」

「おいおい、洒落になつてないなこれは……」

ラーフラの家に遊びに来ていたベルは、大好きな地獄漫才のホネホネトリオのコントが中断されたことの怒りも忘れて、テレビ放送に見入っていた。

まだ千歳どころか、百歳にさえならない人間風情が、天界と魔界を相手に戦争をするなどとはざいている。

洒落になつていない。

誰もが顔に泥を塗られた格好だ。

天界も魔界も、サンタクローズに完璧に「なめられている」のだ。

「はうあーっ！」

べべべ、ベルさま！

サンタさんが！」

釈迦より先に、ドラコが部屋に転がり込んできた。

勢い余つてけつまずき、一回転して壁にぶつかる。

そのまま、むきゅうと逆さまになっている。

自慢のぱんつは丸見えだ。

「それはギャグでやっているのかドラコ」

「きやーっ！ ちがいますちがいます！」

わたしはどうでもいいんです！

そんな事よりも、サンタさんが！

サンタさんがあーっ！」

「落ち着け」

ぽふつと頭に手を載せ、もう片方の手でトマトジュースを渡すと、彼女は急いでそれを飲み干す。

「ぶはーっ、おいしいです！」

やっぱりトマトジュースは血の池印ですね！」

「で、何しに来たんだドラコ」

「えーっと、なんでしたっけ？」

首を傾げるドラコの頭には、大きくはてなマークが浮かんでいる。いつもの事だが、ドラコが騒いでいるのを見ると冷静さを取り戻せる。

彼女の存在というのは本当に、魔界に於ける一服の清涼剤だ。

「サンタクローズの件だろう」

「そうでした！ サンタさんが宣戦布告するって！ 逃げましょう  
ベルさま！」

「ちよつと待て、何で俺様が逃げる準備なんてするんだ？」

「せんそーですよ！ せんそーっ！ やばいです！ あぶないです  
！」

半分泣きそうな顔をして、ぎゅっと足にしがみついてくる。

確かにまあ、半人前以下のドラコにとっては、ハルマゲドンなどと聞いたら、逃げたくもなるのかも知れない。

そもそも悪魔の中では、かなり平和的な思考の持ち主だ。

「ドラコ、戦争は怖いか？」

「こわいです！ チョーこわいです！

十字架とにんにくがわたしの家に撃ち込まれたなら、ドラコしんじやいますー！」

「俺が守ってやるから、心配するな」

騒ぐドラコを抱きしめ、優しく頭を撫でてやる。

ドラコは頭がぼわっとして、そのまま静かに目を閉じる。

「はう……ベルさま……」

「おいおい、お前にはデュラがいるのに、いいのか？」

「ドラコは別腹なんだよ」

「なるほどね。まあ、俺も人の事は言えないけど」

ラーフラは窓の外に視線を移して、今後の事を考える。

あくまでもサンタクローズが、森羅万象国際会議の議員、六道炎夜を除く一九九九人全員に対してケンカを売っただけで、実質的に

はハルマゲドンではない。

だが、釈迦やイエス、ベルゼブブやアスタロトまでを相手にするのだ。

おそらく、一日と掛からず鎮圧されるだろう。

いや、わざわざ大幹部が出るまでもない。

天使と悪魔の兵団が、一個分隊ずつも出れば、ほぼすぐにカタは着くはず。

騒ぐまでもない、些末な事だ。

「ただいま。おや、今日はベル君とドラコちゃんも来ているのですね」

「あ、お邪魔していますお釈迦様」

「おじゃましてまーす」

ベルとドラコは揃ってお辞儀をする。

「やれやれ、今日も宇宙の真理は見えなかったよ。いつの事になるやら」

近くにあった、釜ゆで温泉のお土産に買った肩たたき棒を手にして、とんとんと背中を叩く。

まるで緊張感が無い。いつも通りの釈迦の姿。

冷蔵庫からボトルに入った乳粥酒を取り出すと、ぐびぐび音を立てて飲み干す。

「父ちゃん、テレビ見たか？ やけに落ち着いてるなあ」

「見ましたよ、ええ。」

しかし、たかがサンタクロースには何もできません。

あんなもの、捨て置きなさい。

放っておけば予算は止められ、勝手に自滅するでしょう」

飲み干したボトルをごみ箱に入れると、冷蔵庫からもう一本の乳粥酒を取り出す。

まるで緊張感が無い。いや、それ以前にプライドが無いのだ。

確かに相手はゴミ同然のサンタクロース。

しかし、そんなゴミ同然のサンタクロースに、天界と魔界は顔に

泥を塗られた。

それに対して、然るべき措置、処罰を与えるのは当然のはず。ベルとラーフラは、互いにその気持ちを共有していた。

二人は天界と魔界のプリンスとして、誇りと情熱を持っている。それは血よりもなお赤く、命よりも遥かに重い。

「父ちゃん、それじゃあ仏界としてはこの件にノータッチなのか？」

「当たり前でしょう。下手に動けば、彼の思うつぼです。」

ハルマゲドンなんて馬鹿馬鹿しい。

軍費との兼ね合いも考えれば、今は全面戦争なんてできるような財源がありませんよ」

「待ってくれ。お釈迦様お供え思いやり予算って、表向きは父ちゃんのポケットマネーだが、実は仏界が来るべきハルマゲドンに向けて貯め込んでいる、秘密予算だったんじゃないのか？」

「あー、それ嘘。」

あれですよあれ、嘘も方便って言うでしょ？

それにラーフラ、お前のヘアケアに使ってる蓮油とか、その思いやり予算で買ってるって知ってましたか？」

無気力に返事をする釈迦の姿に、ラーフラは愕然とする。

誇り高き釈迦の魂はどこに行ったのだろうか。

普段はちゃらけていても、いざとなれば仏法の守護者として、剣を取り槍を持ち、ハルマゲドンさえ辞さない覚悟を持っている。

釈迦とはそういうものだった。

それが彼の思う本当の父親、釈迦の姿。

昼寝をしても、涅槃のポーズの練習だと言い張る父。

北海道に新鮮な乳粥を求めるお忍び旅行をしても、仏法の為の行脚だと突っぱねる父。

それでも、やるときはやる人だ。

彼はそう思い、尊敬してきたのだ。

そんな偉大な父親の像が、がらがらと崩れ落ちる。

木っ端微塵となって、砂のようになる。

「ふざけんなよ！」

仏教はどうなっちまうんだよ？

信徒の誇りは？

このままじゃ、イエスのおじさんに負けちまうだろう！

そうでなくても、天界じゃイエス派が幅を利かせてるんだ！」

「だからー、イエスのところが多分天使兵を派遣するから、それでいいじゃないですか。」

あと魔界からも兵が出るでしょう。ねえ、ベル君？」

「えーっと、まあ……そうですね……」

さすがのベルも、これには返答に困る。

うかつな事は言えない。仮にも相手は天界に於いて、ナンバー2の地位を持つ釈迦だ。

どれほど腐った発言をしていようと、天界の事情に、魔界の者は口出しをすることなどできない。

また、自分が何かを言えば、それはベルゼブブの発言ともなり得るのだ。

「あ、わたしのケータイが鳴ってます。ちょっとまってくださいねいきなり話の腰を折るドラコ。」

マナーモードになってるんだから、着信があつたなら、空気を読んで黙って外に出る。

ベルは額に冷や汗が浮かぶ。

とてとてと小走り気味に部屋を出るが、彼女はその途中で豪快に転んだ。

「はうあっー！」

そして起こる、今日二度目のぱんつ丸見え。

ああドラコ、お前わざとやってないか？

「あうあう……し、しつれいしますね……」

照れ笑いを浮かべながら、そそくさと部屋を出る。

だが、彼女はすぐにこちらに戻ってきた。

「ベルさま、ベルゼブブさまからお電話です」

「え？ 俺？」

ラーフラと釈迦が一触即発の状態になっている間を通り、いそいそと部屋の外に出る。

受け取った電話機からは、父親であるベルゼブブの声がする。

「おお、ベルよ。」

実はな、トイレットペーパーがあまり無いんじゃないよ。

帰りに買ってきてくれぬかの」

思わずがっくりして、膝を突きそうになる。

何だそれは。今この瞬間に言う事か？

さすがのベルも頭痛がしてきた。

「あのさー親父、メイドか執事の奴らにでも買いに走らせればいいだろう？」

それから、他に言う事があるだろ？」

「他にかあ。今夜のおかずなら、コロツケそばじゃよ」

「いや、そうじゃなくて」

「一昨日、お前の新しい消しゴムの角を使ったのはワシだったのじや……うう、すまぬ……」

「ちーがーうーっ！ サンタクローズが宣戦布告をしただろっ？」

サタン様と親父はどうするつもりだよ？」

「ああ、サンタの件か」

「それだよそれ！ で、一個分隊くらいは派遣するんだろっ？」

先に俺達が仕留めれば、天界に恩を売るチャンスだし」

「サタン様が、面倒くさいとおっしゃっているのな、魔界としては静観じゃよ」

「は……？」

その言葉に我が耳を疑う。

自分達をバカにした相手に対し、報復をするのが面倒くさいとは、誰よりも誇り高いはずの悪魔が口にする言葉とは思えない。

だが、ベルゼブブはいつも通り、にこやかに続ける。

「サンタクローズ如きに軍隊を動かすまでもないとは、さすがサタ



ン様じゃな」

「いやいやいや、待て！ 待ってくれ！ そりゃ無いだろう？」

「ベルよ。無理に争おうとするなどは愚かな事じゃ。」

そのうちサンタクロースの側も、天界や魔界が騒がないとなれば、諦めて条件を呑むじやろう」

「そういう問題じゃない！

違うだろう？」

プライドだよ！

誇りだよ！

尊厳だよ！」

「若いのう……ふおふおふお……」

気が付くと、携帯電話を床に叩きつけていた。

魔界の代表としてあるまじき行為だ。

こんな腰抜けのジジイ達が、全魔界を取り仕切っている。

守るべき誇りも持たずして、何が悪魔か。

サタン？

ベルゼブブ？

知った事じゃない。

俺達は悪魔だ。

悪魔とは力を信奉し、破壊を象徴する者達。

平和とは絶対的な力の上に築かれると信じて疑わず、あらゆる権謀術数に通じた狡猾なる者達。

神にあらず仏にあらず、妖精にあらず精霊にあらず。

「ベルさま！ わたしのけーたい！ けーたいが！」

「はあっ……はあっ……すまんドラコ。」

新しいのを買ってやるから、これはもう捨てる」

「だめですーっ！

これはベルゼブブさまがわたしに初めて買って下さったんです！」

「ベルゼブブ様が、だあ？」

ぎろりと睨むベルの目に、ドラコは怯え、後じさる。

「おいドラコ、答える」

「はっ、はい」

「親父と俺がケンカしたら、お前はどっちの味方をする？」

「わたしは……」

「ああ」

「ケンカ、してほしくないです……」

その返事に、ベルは手を振り上げる。

叩かれると思い、ドラコはぎゅっと目を閉じた。

だが、振り下ろされた手は、ゆっくり彼女の頭の上に置かれると、優しく撫でられた。

「お前は、それでいい」

「ベルさま……」

「けれども、今から俺は親父とケンカをしなきゃいけない。お前には選ぶ権利がある」

「ベルさま、ケンカするんですか？」

「ああ、とても大切な事の為に、俺は戦う」

「ベルさまは、それが正しいと思っていらっしゃるんですか？」

「そうだ。俺は今、自分が正しいと思っている」

「じゃあ、ドラコはベルさまについていきます」

「俺はお前の大切な携帯電話を壊しちまうような奴だが、いいのか」

「いいんです。ベルさまはドラコの大切なご主人様ですから」

そう言って、罪のない顔で笑う。

もし自分が父親に縁を切られ、一介の魔物に落ちぶれたとしても、きつと彼女は同じように笑うだろう。

そして自分を励ますのだろう。

「俺が何をしようとしているか、お前も分かっているんだろう？」

「わかってますよ」

「お前は将来、いい悪魔になる。末は魔界の大侯爵だな」

「えへへ、なれるといいですね」

そっと手を差し出すと、ドラコはそれを小さな手で握り返す。

何も言わず部屋に戻ると、釈迦は居なくなっており、今度はラーフラが乳粥酒を呷っている。

「よおベル、ちっちゃな恋人と屋内デートか。ご機嫌だな」

「お前はご機嫌斜めだな、ラーフラ。お釈迦様はどこに行ったんだ？」

「イエス様のところに行くらしい。」

用事を思い出したと言って、単に逃げただけじゃねえか。

おまけに続報で、イエス様も兵を出さないと言い始めたらしい。

ただし、サンタクローズに対しては天界と魔界の双方を代表し、遺憾の意を表明するんだとさ。

馬鹿か？

死ねよ畜生」

コップに乳粥酒をなみなみと注ぐと、それを一気に流し込む。

これで空いたボトルは五本目。

ラーフラも相当に頭に来ているのだろう。

しかし、イエスまでもが軍を出さないととなると、いよいよこのハルマゲドンは、単なるサンタクローズの一人芝居になってしまうだろう。

だが、本当にそれで終わりだろうか？

仮にも天界と魔界にケンカを売ったのだ。

サンタも何らかの準備をし、一定の勝算を持っているに違いない。間違いなく奴は動く。

だが、それを阻止せねばなるまい。

これ以上魔界に、天界に、泥を塗られるわけにはいかないのだ。

「なあラーフラ、やらないか」

「やるって、何をだよ」

「戦争だ」

その言葉を聞くと、少しだけ考えるように天上を見上げ、ラーフラは立ち上がる。

「五分だけ待ってくれ、準備してくるわ」

かつかつと階段を上がるラーフラの背中を見ながら、ベルも乳粥酒をコップに注ぐ。

面白くなってきた。

呵々と笑いながら、窓の外を見る。

薄曇りの空はまるで、これからの世界を示しているようだ。

足を組んで目を閉じ、これからの戦いに思いを馳せる。

初めての戦争。

初めての殺し合い。

どれほど楽しめるだろうか。

サンタクロースよ、サンタクロース。

踊らせておくれ、サンタクロース。

## 第9章 モスクワ・コネクション

エネルギーによる巨万の富をかき集め、今や世界屈指の富豪が集う都市となったモスクワ。クレムリンからほど近い、最高級の商業地区、トベリ通りにゾン重工本社はある。

各種兵器の生産からロシアの国産自動車まで、あらゆる工業製品を製造し、エネルギー産業を除くロシア企業としては五指に入る巨大企業だ。

そして、そんなゾン重工本社ビル二五階の応接間に、ニコラと倫音は訪れていた。

目の前にはサモワールと呼ばれる、ロシア特有のお茶を湧かす銀の器が置かれており、ティーポットからは温かな湯気が昇っている。だが、部屋にずらりと並んでいる絵画は、どれも浮世絵だ。

ゾン重工の女社長、アレクサンドラ・スターリナは知日派として知られており、現在日本市場を開拓している事もあり、最近はこちらとしたニュースの顔となっていた。

「待たせてごめんねリン。ようこそ私のオフィスへ」

「やあ、まいどどうも！ お世話になってますサーシャ！」

ドアが開くと、大柄ではあるものの、スタイルの良い金髪の女性が姿を現す。

倫音はソファから立ち上がると、彼女と抱擁を交わす。

二人はリンとサーシャと呼び合う程、お互いに仲が良いのと言う。

「話は聞かせてもらったわ。」

まさかサンタクローズが居るなんて、ロシア正教のゾーロトフ総主教もびっくりの出来事ね」

「はっはっは、まあ玩具業界だけで知られている公然の秘密なんですわ」

ティーカップにジャムを入れ、紅茶を注ぎながら、アレクサンド

ラの視線は倫音からニコラに移る。

「ところでそちらの色男さんはどなたかしら？」

「はい、こちらがサンタクロースでうちの幼なじみ。花巻ニコラですわ」

「どうも、お初にお目に掛かります」

立ち上がると、握手の為に手を差し出す。

アレクサンドラもまた、こぼれんばかりの笑みを浮かべながら、その手を握った。

「初めまして。本当にあなたがサンタクロースなんですね」

「本来はゾーロトフ総教主のように、ひげを蓄えた老人であるべきなのですが、僕が十歳の時に引き継いで以降、まだそれほど時間が経っていませんので。がっかりされましたでしょうか」

「いいえ、かつてのロシアでは、ひげ税なんてものが掛けられた事もあるくらいよ。別にそれでいいんじゃないかしら」

ソファに腰を下ろすと、彼女はティーカップに口を付ける。

「ところでニコラさん、あなたがサンタであるという証拠はあるんですか？」

「はい、こちらのプレゼント袋をご覧ください」

そう言って、彼は相棒である袋をぽんぽんと叩く。

「膨らんでるわね。その中に玩具がたくさん入ってる、と」

「玩具だけじゃありません。あなたが本当に望むものが入っています」

「じゃあ、今私が一番欲しいものをプレゼントして下さいかしら」

「はい、喜んで」

そう言って、プレゼント袋の中に手を入れる。

そして彼が取り出したのは、薄汚れた茶色い紐だった。

「あなたが本当に欲しいものは、この紐ではありませんか。ミス・アレクサンドラ」

「……………」

黙ったまま、ゆっくりとそれを受け取る。

彼女の手は震えていた。

「十年前、チエチエン紛争に関わるテロに巻き込まれ、ビルの爆破事件でお亡くなりになったミハイル・バイロヴィッチ・スターリン氏の愛用していたスイス製の懐中時計。

その時計にいつも付けている、古びてぼろぼろになった紐。

あなたのお父様は、この紐も含めて、アンティークの時計には刻んだ時間と歴史があると言っていた。

しかしあなたは、そんな紐ではなく、金の鎖などにすればいいのにと、そのセンスに不満を持っておられましたね。

けれどもその後、テロリストによって殺害されたお父様は行方不明となり、唯一残された時計の紐は失われていた。

あなたの手元に残ったのは、少し焼けて動かなくなってしまった時計のみ。

そしてこれは、その時無くなったお父様の時計の紐です。

時空を越えた、良い子のあなたに起こる、聖なる夜の奇跡。

どうぞお受け取り下さい」

ニコラの言葉に、彼女は胸元に紐を抱きしめ、彼女はただ静かに涙を流す。

その目は、一人の父を愛する娘のそれとなっていた。

「メリー・クリスマス。ミス・アレクサンドラ」

泣きむせぶアレクサンドラの頭を撫でて、優しく笑い掛けるニコラ。

サンタクロースは子供に必要なだが、本当は大人にこそ必要なのかも知れない。

私達は大人になる度に、大切なものを失っていく。

それは二度と、手に入らないものがほとんどだ。

まるで魔法使い、或いは世界で一番の手品師。

こんな気分にされるなんて、こんな気持ちになるなんて、もはや無いと思っていた。

溢れ出した涙は、過去の傷を洗い流していく。

「ありがとう……今日あなたに会えた事を、神のお導きと思います……」

その言葉に、ニコラは苦笑する。

その神と今から一戦交える為に、金策として自分は訪れているのだから。

「なんやなんや、美味しいとこばっか持って行って、ニコラのくせに」

「美味しいからこそ、根こそぎゲットが僕のやり方だ」

肘で小突きながらも、倫音はまんざらでもない表情をする。

商売相手ではあるけれど、それ以上に大切な友人であるサーシャ。

そんな彼女に、無くしたはずの思い出を与えてくれたニコラ。

彼はやっぱりいい男だ、すごい奴だ。

心からそう思う。

「これを頂いても宜しいのですよね、ミスター・ニコラ」

「もちろんです。これはあなたにこそ相応しい」

「ありがとう。」

でも、私はもう大人だわ。

残念ながら良い子でもない。

あなたからこれを、無料でもらうわけにはいかない」

「では、僕に協力を願えませんか？」

「分かりました。お聞きしましょう」

そこでニコラは、森羅万象国際会議によってサンタクロース予算が削減され、廃止になること。

その異議申し立ては受け付けられず、ほぼ意味が無い事。

そして、既に宣戦布告をした事を、事細かにアレクサンドラに伝えた。

彼女は真剣にそれを聞き、時にメモを取る。

「事情は把握しました。」

このままでは、サンタクロースがこの世界から居なくなってしまう、ということですね」



「そうです。僕は世界中の子供達の笑顔の為に、戦います」

「勝算はゼロ、予算も武器も無い。それでも戦う、そうおっしゃるのね」

「その通りです」

アレクサンドラは、ちらりと倫音を見る。

「ねえ倫音、あなたは彼を愛しているの？」

「ぶほっ！」

突然の質問に、倫音は豪快に茶を噴く。

「げほっ、げふっ、ちよっ、いきなり何やのサーシャ！」

「あなたが私に、商談以外で男性を紹介するなんて、初めての事だから」

「そりゃまあそうやけど、ニコラはただの幼なじみや。

ただ、何て言うか……」

「何かしら」

「サーシャと同じで、うちもプレゼントもろたんですわ。それこそ無料でもらうわけにいかんから、協力してるんやわ」

顔を真っ赤にして弁解する倫音。

そんな彼女を見て、アレクサンドラはくすくすと小さく笑った。

忘れていたもの、失っていたもの、そんなものはたくさんある。

金を追い掛ければ追い掛けるほど、それは手の隙間からこぼれ落ちていく。

けれど、止まる事はできない。戻る事もできない。自分も彼女も、そういう道を歩いてきてしまったのだ。

けれど、不意にそれは手元に戻ってくる事がある。

運命とは時に粹で、時に残酷なものだ。

「ニコラさん、あなたが望むものは何？」

「ずばり、カネです」

「あらあら、やけに俗な事をおっしゃるのね」

「このプレゼント袋は、無限にプレゼントを出す袋じゃありません。中に各種通貨や貴金属を入れると、世界のどこかで自動的に換金

され、契約をした玩具会社や各種企業、或いは望む物を作るメーカーなどに渡り、具象化されて取り出す事ができます。

僕はこれから戦争をするために、この中にお金を入れねばなりません。

それも半端じゃない金額を。

その為に、今世界中を飛び回っています」

「なるほど。」

ところでその戦争に使う武器は、我が社からもご購入は頂けるのかしら？」

「もちろんです。」

ゾン製の武器は、世界的にも評価が高い事は、同じロシアに住む人間として、良く存じ上げております。

むしろ、ゾン社の技術と武器は、この戦争に必要な不可欠なものでしょう」

「あらあら、女を口説くのも会社を口説くのも上手いのね」

「そんなことはありませんよ。ミス・アレクサンドラ」

言葉ではそう言いつつも、二人は苦笑いを交わし合う。

その場に流れている空気は、さっきまでとは違う、欲にまみれた匂いがする。

「ここに小切手があるわ。これでも大丈夫かしら？」

「はい、もちろんです」

「それじゃあ、このくらいでどうでしょう」

さらさらと書いたその金額に、倫音とニコラは凍り付く。

「二千億ルーブル（約六千億円）やて？！ ちょっと待ってサーシヤ、桁間違えてる！」

「金は稼げばまた手に入る。」

けど、父の時計の紐は、二千億ルーブルはおろか、一兆ルーブルを積んだって手に入らないわ」

「そっやけど、ええのん？」

今やったら、笑って済ませられるんやで？」

「そうねえ、この二千億ルーブルは全て、我が社の製品を買う事。という契約でいかがかしら？」

「かしこまりました。その契約、喜んでお受け致します」

ニコラが立ち上がり、右手を差し出すと、アレクサンドラもその手を握る。

商談は成立だ。

その横で、あまりの事にあっけに取られている倫音がいる。

今までに百億単位のプロジェクトは何度も動かす事があった。

だが、千億円を超えるようなビッグプロジェクトが、いとも簡単に、ぽっと出のニコラによって動かされたのだ。

悔しさと嫉妬心、尊敬と憧れが、ない交ぜになって彼女の中を突き抜けていく。

「私は今夜、石油王のカルノフ・レオニドヴィッチ・モレンスキー氏とディナーを一緒にするのだけど、宜しければあなたもいかが？」

「それはもう、是非お願いします！」

「積極的な男の子っていいわね。そう思うでしょう、リン？」

「え、ああ、そやなあ……」

ゾン重工のアレクサンドラを紹介したのは自分。

自分が居なければ、彼はアレクサンドラとの謁見は叶わなかったはず。

だからこそ、自分は立て役者であり、一番の功労者だ。

そのはずなのに、なぜか腑に落ちないものが、どんよりと腹の底に残っている。

自分がニコラに出資したのは三億円。それでも、日本であれば年末と夏の宝くじで、一等賞と前後賞を当てたに等しい、サラリーマンの生涯年収を遙かに越える金額のはず。

その二千倍の金額を、いとも簡単に çıkさせてしまふニコラの力。それはまさに人知を超越している。

うち、何してるんやろうなあ

ぼんやりとそんなことを考えながら、二人の会話に適当に相づち

を打つ。

初めての感情に戸惑いつつも、理性はしっかり保たれている。

この戦争が全て終わったとき、果たして自分はどうなっているだろうか。

何を手に入れ、何を失っているだろう。

ぼんやりと、そんなことを考える。

まだ始まってもいない戦争に、倫音は一抹の不安を抱いた。

## 第10章 星に願いを！ かけたら家が全壊した

クリスマスにはほど遠い、少し温かな小春日和の町を、ナナは買い物袋を抱えて歩いてた。

翼と耳は隠し、昔ニコラが買ってくれた、お気に入りのえんじ色のベレー帽を被っている。

街角から流れてくる少し陽気な音楽。

通りを歩き交う人達の、元気な声と笑顔が彼女は何よりも好きだ。

「こんにちはナナちゃん、久しぶりだねえ。元気にしてたかい？」

「アナスタシアさん、こんにちは！ 今日はいいい天気ですね」

「そうだね。今日は旦那も上機嫌で、ウォッカも進むって言ってるわ」

「晴れても降ってもウォッカが進む、でしょう？」

「あははは、そうだね」

手を振り、なじみにしている酒屋のおばさんと挨拶を交わす。

何気ない光景。いつも通りの町並み。けれど、もうすぐこのことも

お別れだ。

さつき、ニコラから連絡があったのだ。

二千億ルーブルという巨額の金を手に入れ、今夜はモスクワの石油王と一緒にディナーを共にするらしい。

ニコラはさらに巨額の資金を手にして、意気揚々と帰ってくるに違いない。

おいそれと、早くに帰っては来ないだろう。

午前様かも知れない。ウォッカでべろんべろんになって、頭痛をさせている事だろう。

だから、酔い覚ましにオニオンスープを作っておく。

ニコラが頑張っている中で、私にできることは何かな？

そう考えた時、答えはとてもシンプルなものだ。

疲れて帰る彼が一番欲しいものを用意して、お帰りなさいを言っ

てあげる。

徹夜だって平気。

商売相手と一緒に飲むお酒なんて、美味しいものじゃない。けれど、楽しく飲んで振りをして、大切な言葉を引き出さなければならぬ。

「美味しくできるかな、オニオンスープ」

人気の無い空き地に出ると、辺りを確認し、夕日をいっばいに浴びながら翼を広げる。

飛び立つ時には、夕暮れの空気を胸に吸い込む。

次にこの町に来るときまで、それを忘れてしまわないように。

大空を自由自在に羽ばたきながら、くると輪を描いてみたり、時には宙返りをする。

アクロバット飛行はストレスの解消になるのだ。

と、その時だった。遠くでキラリと何かが光る。

「あれ？ 流れ星かな」

とっさに願い事を三回言うことを思い出し、心の中で必死に呟く。ニコラがこの戦いに勝てますように、と。

神や仏、悪魔や精霊に最も近い、いや、そのものはずであるナナにとっては、偶然を創り出す超自然的な現象、運命こそが神に等しい。

この世界の誰もが唯一わかり得ない事、それは未来だ。

だからこそ、ニコラが勝利する未来という、可能性は絶対に存在している。

限りなくゼロに近い1%でも、それは必ずある。

買わない宝くじは当たらないように、受験しない大学は合格しないように、まず始める事が大切だ。

そして今、ナナができるのは祈りだけ。

神にさえ祈ることができない彼女は、流れ星のように曖昧なものに、願いを託す事しかできない。

もし不安を顔に表せば、きつとニコラに迷惑が掛かる。

怯えるような素振りを見せれば、彼の仕事の足手まといになるだろ。

だから彼女は気丈に振る舞う。  
けれども彼女はすがりたい。

恐れ怯えて涙を流し、部屋の片隅にうずくまってしまいたい。  
怖くて怖くて仕方が無くても、まるで気付かない振りをする。  
強がり、胸を張り、気丈な笑みを投げかける。

死ぬのは怖い。  
けれど、独りぼっちになってしまうのはもっと怖い。

だから星に願いを掛ける。  
神以外への神頼み。

星に願いを。

「あれ、流れ星がうちの方に向かってる？」

光の玉は、徐々に大きさを増している。

明らかにそれは近づいていて、自分達の住んでいる家の方に向かって飛んでいる。

これはひょっとして、すごくやばい？

そう思った次の瞬間、家の方からきこ雲が立ち上る。

「きゃあああああああああああ？！」

無惨に空に響く叫び声。

ちよっと待って！ 家を破壊してなんて願ってない！

全速力で近づいてみると、そこにあるのは無惨な姿になり果てた、ニコラとナナの家の跡。

ぷすぷすと音を立てる黒い炭。

周辺一帯は黒こげになって、見るも無惨な光景だ。  
地面に降り立ち、呆然としてひざを突く。

これからニコラを迎えてあげるはずの家が無い。

お帰りを言っただけの場所が、もう無いのだ。

呆然として、言葉が見つからない。

自分の中の何かが壊れた。

一雫の涙がこぼれ落ち、大地を濡らす。  
だが、途方に暮れている場合ではない。  
すぐに前に向き直り、ナナは立ち上がる。

この惨状をどうするか？

まずそれが肝心だ。

辺りを見渡した時、がれきの下から何かかもぞもぞと動くのを見つけた。

やがてによきりと突き出す、それは人間の白い腕だ。

「けほっけほっ、この私が着地を失敗するなんて……」

見知らぬ少女が姿を現す。

偉そうな帽子と、着物なのか洋服なのかよく分からない衣装に身を包んでいる。

どこかで見たとような気もするが、どこだっただろうか？

と、疑問に思っている場合ではない事に、はたと気付く。

彼女を助けなければ！

「大丈夫ですか?!」

「ふふふ、六道炎夜がこの程度で死ぬわけがないのよ!」

ナナの存在に気付いた炎夜は、痛いのを我慢して胸を張る。

本当はちよつと、いや、かなり痛い。

死なないだけで痛いのは痛い。

けれども泣かない、それが閻魔王の娘としての勤め。

と思つた瞬間、さっきの爆発で舞い上がっていた石の破片が落下してきた。

それは炎夜の後頭部にクリーンヒット。

変な叫び声を上げて、彼女は前のめりに倒れる。

「大丈夫……ですか……?」

「うおおおおおおお! 痛い痛いのとんでいけーっ!」

それで治るのか。

ツッコミしたい気持ちを、必死になって呑み込む。

ナナとしてはどうしていいか分からず、がれきの中から救急箱を



探す事にした。

だが、こんな状態の中では救急箱など見つかるはずもない。ただ、先ほどの爆発に巻き込まれてもほぼ無事な事から考えて、人間ではないだろう。

きつと大丈夫に違いない。

とりあえず大丈夫。

たぶん平気。

そう思う事にして、彼女に話し掛ける。

「ところで、今降ってきたのはあなたですか？」

「降ってきたんじゃない！ 降臨し損なっただけ！」

それ、降ってきたのと同じですから。

思っても言わない方がいい気がして、黙っておく。

「私は地獄界を治める閻魔大王の娘、六道炎夜。

あなたはサンタクローズのところに居候している、ナナさんかし

ら

「あ、はい、ナナです」

「よし、私の勘は当たってたわ！」

こっちの方からサンタの匂いがすると思ったのよね！

やったー、万歳！ 私すごい！ きゃっほう！」

ガッツポーズ、さらにターン。

そのまま太陽に向かって飛び上がる。

全身で喜びを表す炎夜だが、ナナの目は極めて冷静に周囲を見渡し、もう一度炎夜に注がれる。

「ところで炎夜さん、大変申し上げにくいんですが」

「何かしら？ 何でも言って」

「家、弁償して下さいね」

「そんなこと、できるわけないでしょう」

満面の笑みで語りかけるナナ。

それに対し、空っぽの財布を見せながら、眩しい笑顔で返す炎夜。その日、ナナは初めて他人に対し、カ一杯コブラツイストを掛け

たのだった。

## 第11章 仕事を終えてどや顔で帰ってきたら、あるはずの場所に家が無かった

公海とは、どの国にも属さない自由の海を指す。

そこに於いてはあらゆる法律の埒外とされ、国際法のみが適用される。

そして、然るべき手続きを踏めば、誰もが人工島を作る事が許可されている。

国籍、言語、信仰を問わず、誰もが、自由に利用する事ができるのだ。

そして、そこに臨時亡命政府「ニコラ・サンタクロース共和国」の樹立が許可されたのは、まさに電光石火のスピードと言えるだろう。

後世にまで残る名演説、「サンタクロース宣言」が行われたのは、モスクワの赤の広場だ。

単なる窓際族だったサンタクロースの廃止を、石油王のカルノフは世紀の一大事として取り上げ、これを巨大ビジネスに仕立て上げる事を決断した。

協力者はアレクサンドラ・スターリナ、そして日本から間宮倫音、ディナーの前に彼はホットラインを使い、政府関係者からイベント会社、果ては国営メディアに至るまで、全ての手配を整えたのだ。一夜城ならぬ、一夜演壇は、突如としてロシアの象徴たる赤の広場に現れる。

そして、彼はこれから何が始まるのかと、ただならぬ気配に怯える聴衆達に向かって、朗々と言い放つ。

世界にはサンタクロースが居たことを。

そして、サンタクロースが困っている事を。

さらに、サンタは助けを求めている事を。

ロシア全土に向けてテレビとラジオで放送され、各国のマスメディアはもちろんのこと、インターネットによるライブ映像の配信。

ニコラはまさに今、時の人となったのだ。

「サンタクロースは負けない！」

サンタクロースは死なない！」

サンタクロースは永遠不滅！」

子供達がある限り！」

良い子が世界に居る限り！」

何歳になっても、何年経っても、皆さんの心に残り続けるプレゼントをする。

お父さんやお母さんではない、本物のサンタクロースが！」

そのあなた。あなたはまるで奇跡のようなプレゼントを、もらった事がありますか？

手に入らないと思っていたものをプレゼントしてもらった感動を、覚えていますか？

失ってはいけません。

忘れてはいけません。

これからも、ずっとです！」

世界中の皆さん、サンタクロース一世が残した思い出を、今一度思い出して下さい！」

私は戦います！」

この体がある限り、力の限り命の限り、向かい風にも高らかに帆を揚げます！」

一瞬静まり返った後、怒濤の歓声は赤の広場を包み込む、割れんばかりの拍手喝采。

誰もが拳を振り上げ、ニコラの名前を高らかに叫び、一体となって酔いしれた。

壇上にはロシア大統領が上り、彼と固い握手を交わし、涙ながらに抱擁をする。

全てはドラマチックでエクスタシー。

カーニバルでありフェスティバル。

その日詰めかけた聴衆は、突然であったにも関わらず、一万人と

も二万人とも言われている。

大統領は演説の後、ロシア付近の公海上に、臨時亡命政府を樹立する事を正式に承認した。

あくまでも一カ国のみではあるが、国際連合の常任理事国が、その存在を許可したのだ。

条件は、あくまでも人類に対して一切の被害を及ぼさない事。

イエスや釈迦など、各種信仰者達への配慮を怠らない事。

そして、世界中の子供達に、今後もプレゼントを配り続けること。時は一刻を争うというニコラの訴えに、ロシア大統領のジガーノフは全面的に答えた。

それは何よりも、彼もまたサンタクロース一世に生きる希望を与えられ、今やこの国を代表する、世界の大国、ロシアの大統領にまで上り詰めた事に対する恩返しだった。

ニコラはその日、夜の遅くまで、カルノフやアレクサンドラや倫音と、ロシア社交界や財界の面々が集まるパーティーに参加し、サンタクロースの苦労話や喜びなどを語り明かした。

全ての準備、手はずは上々だ。

ニコラはお土産にナナの好きな特濃牛乳を買って、朝靄の中を意気も揚々と凱旋帰宅をする。が

「おかえりなさい！」

「おかえりダーリン」

何もない。

ひたすら真っ黒焦げの焦土の真ん中に、新聞紙を敷いて座る二人の少女。

やかんと携帯用の卓上コンロで湯を沸しながら微笑むすナナと、もう片方は見慣れない服装をした少女。

二人は仲良く、膝をつき合わせて座っている。

だが、名前を知らない方の少女は、体中にはんそうこを貼り付けて、やや満身創痍といった感じだ。

と、落ち着いた思考で考えたのも束の間。家が無いという事実

愕然とするニコラ。

「どうしたんだこれは？ 天界の奴らか？ それとも魔界か？  
ひどい事をしやがる……ナナ、怪我は無いか？」

「その君はぼろぼろだが、誰にやられた？」

「その暴力グレムリンの女の子にやられたの……」

よよと泣きながら、少女はちらりとナナを見る。

ニコラに見えないような角度に顔を向け、あからさまにベロを出して挑発する。

対するナナも、小動物に特有の威嚇する声を上げ、耳やしっぽを逆立てる。

「落ち着けよナナ。」

それより君は誰？ 名前は？」

「名前なんてどうでもいいじゃない。」

私はあなたを助けに来た女神よ、ダーリンっ」

「キシヤーツ！」

少女が首に腕を回して頬ずりをすると、ナナはますます威嚇の度合いを強める。

このままでは話が進まないと思ったニコラは、嫌がる少女の体を一度離すと、軽く咳払いをする。

家が無くなっている事について、言いたいことは山ほどあるが、今はナナが無事で居ただけでも、良しとせねばならない。

まず、何が起きたのかを把握しなければ。

「ナナは落ち着け。」

それと君、この惨状はいつたいうことなんだ？

良ければ教えてもらえないかな」

「あー、えーつとね、それは……うふふ……朝陽が綺麗ね」

笑って誤魔化そうとするが、ナナはそれを許さない。

「この閻魔大王の娘が、いきなり彗星に乗って我が家に特攻してきたおかげで、この辺り一帯はツングースカ以来の大爆発に見舞われたってわけよ！」

「閻魔大王の娘？」

その言葉に、彼女はばさりとマントをひるがえし、きりりとした目でニコラを見据える。

「そうよ。」

私は地獄界を取り仕切る閻魔大王の娘、六道炎夜。

森羅万象国際会議で、サンタクロース予算削減に反対したのは、この私だけ。

私は世界で一番サンタクロースラグ選手権で、あなたに敗れ、惜しくも準優勝となった。

けれど、サンタクロースを愛する心も、サンタ魂も、あなたには負けない。

もしもあなたが、サンタクロースを名乗るのに相応しい人間じゃなかったなら、殺して私がサンタクロースになってやる！

そう思ってた。

けれどあなたは、天界と魔界を敵に回してでも戦い、サンタクロースの存続を命懸けで守ろうとしている。

悔しいけど、惚れたわ。

だからねニコラ、あなたはこの、六道炎夜のおムコさんになりなさい！」

「何でそうなるのよ！」

この女デストロイヤーっ！」  
なるほど、事情はだいたい把握した。

ちよつと先走る傾向は強いみたいだけれど、悪い子ではないようだ。

何より、閻魔大王と言えば天界でもかなりの権力を持っている。

その娘が味方とあれば、これはハルマゲドンを行う上でも、強力な助っ人となるだろう。

「僕は花巻ニコラ。」

二代目サンタクロースを襲名したのは、六道さんも知ってるよね」「六道さんなんて駄目！」

「炎夜って呼んでくれなきゃ、地獄に落としちゃうんだから！」

「えーっと、じゃあ炎夜。」

「とりあえず、家が無いんだけど、どうしたらいい？」

「屋根も壁も無くても、愛があれば大丈夫よ！」

目をきらきらと輝かせて、炎夜はニコラの胸に飛び込む。

だが、彼はそれを華麗にかわすと、ナナの体に怪我が無いかを確認する。

「ちよっ、やだ、どこ触ってんのよ……」

「どこってお前、しっぽや翼くらい触ったって問題無いだろうが」

「きゅっ……あうっ……だめだよニコラ……」

「なぜお前は色っぽい声を出すんだ。ご近所に誤解されたらどうする？」

ま、それはともかく、ケガは無いみたいだから大丈夫だな」

「見て見てニコラ、ほら！」

私は全身ケガみれ！

このばんそうこうの数！

看病が必要だから、あんなところかこんなところとか、触診しち

やっつていいのよ！」

「炎夜は問題無し、と」

「なんでーっ?!」

シヨックを受ける彼女の肩に、ばんぼんと何かが当たる。

すると、プレゼント袋がプラカードを出している。

『炎夜さん、あなたね』

「何よ」

『かませ犬（笑）』

その日、ロシアの気象観測所は二度目のきのこ雲が立ち上るのを確認したが、唯一の住人であるニコラから「気にしないで」という報告を受け、面倒なのでそのまま放置する事にした。

ここは地の果て、シベリアは今日も平和だ。



## 第12章 其は死なり、其は破壊なり、汝の名は人間なり

北極海の上空、身を切るような零下の空を、ベルとラーフラは飛んでいた。

飛べない魔物を連れた、森羅万象国際会議のような大移動の際は龍の世話になるが、個々人の移動に於いては、基本的にそれぞれが飛ぶ能力を備えている。

特に龍などは、人間界には存在せず、使おうものなら人間界は大騒ぎとなるため、その使用は禁止されている。

殊に、今回は隠密行動が全ての大原則だ。

戦争というよりは、暗殺に近い。

まだ天界や魔界では、ベルとラーフラの独断専行については誰も知らないだろう。

逆に、それらの世界が騒ぎ出す前に、全てを終わらせなくてはならないのだ。

「サンタクロースってあれだろ？ 神霊でさえ無いんだろう？ ちよつと痛めつけてやれば、すぐに地べたに這いつくばって俺び入れてくるだろう」

ベルは頭から生えた触覚をびくびくさせながら、隣を飛ぶラーフラに話し掛ける。

「あまり舐めない方がいいんじゃないかな？」

あんなに正々堂々と俺達にケンカを売るんだ。

何か勝算があつてやつてるのかも知れない。

そうじゃなくても、窮鼠、猫を噛むって言うし」

「お前は臆病だなあ。

いや、仏教だからかも知れないけれど、小賢しい策とか畏とかなんて、力でねじ伏せちまえばいいんだよ。

最終的に必要なのは力だ。

相手を越える圧倒的な力」

「圧倒的な力、ねえ」

ふと立ち止まったラーフラは、少し考えるような表情をする。

「どうした？」

「あれ、見てみるよ」

くいと顎で指し示したのは、眼下に広がる巨大な円形の人工島だ。こんな物はここには無い。それは突如として現れたのだ。

真新しい巨大な砲門は整然と並び、鋼鉄の弾丸を撃ち放つ瞬間を今か今かと待っている。

それはまさに蜂の巣のように、鋼鉄に包まれた浮遊人工島を埋め尽くす。

映画のセットと言うにも馬鹿馬鹿し過ぎる程の重装備。

威嚇などという、なま優しいものは存在せず、近付く物は全てを蜂の巣にするだろう。

かつて人類が、これほど巨大な鉄の死神を、あまりにも荒唐無稽な幻想の墓標を、築く事は出来ただろうか。

トールハンマー、ミヨルニル、ロンキヌス千人長槍、あめのむすぶもの天叢雲剣、どんな伝説上の武器よりも、最高に派手で最高にクール。

殺し殺され殺し尽くす。純粹なる殺意。

いや、殺戮という名の反自然。

そしてその中心には、巨大な旗がたなびいている。

『FUCK GOD! FUCK DEVIL! KISS MY ASS!』

その文章の下には、ご丁寧なペロを出したサンタの似顔絵入りだ。ベルは思わず笑いが込み上げてきた。

ラーフラも、これには苦笑せざるを得ない。

悪趣味にもほどがある。あまりにも幼稚で、あまりにも常軌を逸しているのだ。

史上最大にして最強。

空前絶後にして、小学生レベルの無敵パワー。

SF小説家と映画監督が酒の席で、冗談交じりに考えたような超

弩級の空想科学兵器。

それは巨大な死神の横顔のように、二人に笑い掛けている。心臓を冷たい手に掴まれたように、思わずぞくりとして震える。感情を伴わない死のシステム。ひ弱で小さかったはずの人間達は、いつしか神や悪魔の領域にまで進出する。

賢者、魔女、科学者、狂信者、あらゆる種類の人間達が、時に自分達の場所を侵そうとしてきた。

その全てがことごとく失敗に終わったのは、彼らが結束をしていなかったからだ。

人間風情が十人や百人も集まった所で、天界や魔界を相手に事を構えるなどではしないのだ。しかし、十万、百万、千万、一億十億、全ての人間が結束し、その知恵を絞り、全ての力を持って無敵の矛と盾を作ったなら、それは矛盾を越えて、空をも殺すことだろう。

天を貫き、三千世界を串刺しにするに違いない。

ああ、殺戮の芸術。破壊の創造。

悪魔から見てさえ、化け物という言葉以外に出ない。

サンタクロースという男は、これほどの短期間において、神や悪魔をも越えようとしている。愚直すぎる程真っ直ぐに、その切っ先は自分達の心臓部を狙っている。

そして、それは本当に刺さるかも知れない。そう思わせるに相応しい狂気にして凶器だ。

「やる気満点だな。サンタクロース」

ラーフラは困ったように頭を搔く。

だが、ベルの体はこの上なく血が騒いでいる。

本気なのだ。本気で自分は今、死ぬかも知れない戦いに身を置くことになるうとしている。

笑いが込み上げる。

それは止めどなく溢れ返り、耐える事などできはしない。

「どうしたベル？ 気でも狂ったか？」

「馬鹿野郎！」

笑えるだろう？

笑わずにいられるか？

俺達に、神や悪魔の中でも最高位に近い俺達に！

本気でクビを獲ろうと考える愚か者が居るんだぞ？

おかしくて仕方ねえ！

ブツ殺してやろう！

望み通りに殺してやろう！

喉笛を掻き切り、心の臓をえぐり出し、鼻を削いで目玉をくり抜き、残った骨肉は餓鬼共の餌にしてやろう！

お似合いの末路を用意してやろう！

最低で最悪の死に様を！」

「やれやれ。悪魔ってのは好戦的だとは思っていたけど、本当だねえ」

「なんだラーフラ、お前は面白くないのか？」

その問いかけに、彼は軽く歯ざしりをして笑い掛ける。

「聖戦って言っちゃえば、たいていの事は許されるんだ。

ちよつとくらい殺し過ぎちゃっても、俺達が神様だから裁く者も無いよね」

背中に背負ったサーベルを抜くと、腰に付けていたひょうたんを外し、中に入っていた酒を刀身に振りかける。

「お前もやる気満々じゃねえか。安心したよ、ラーフラ」

「刀つてのは、何かを斬るためにあるんだ。使ってやらなきゃ可哀想だろう？」

酒の付いた刀をぬらりと舐めて、ラーフラは目を細める。

もうすぐ目に付く世界の全ては、鉄と血煙が支配するのだ。

絵物語でしか知り得なかった、本当の戦いが幕を開ける。

「で、どうする？ 多分セオリー通りに考えれば、海中から行けば安全に攻略できるだろうけれど」



それぞれが殺気を放ち、遙か下に見える要塞に向かって、今にも突撃をせんとしている。

バラムが号令一下をすれば、たちどころに死の空は雨となって降り注ぎ、要塞を埋め尽くす事だろう。

「我はソロモン七二柱が一人、悪魔公爵バラム！」

魔界に四十の悪魔軍団を持つ魔王なり！

相手がベル様と言えど、かような戦いくさに、一番乗りを譲る訳には参りませぬ！」

その勇姿に、ベルはヒューと口笛を吹く。

ただのくたばり損ないだと思つて、彼はバラムを馬鹿にしていた。常にベルゼブブの傍にいて、小賢しい知恵を吹き込むだけの老醜。彼は過去や未来に通じていると言つが、その予言も外れる事は往々にしてある。

そもそも天界や魔界に於いて、確実な未来を予見できるという者は、実はどこにもいないのだ。

それでもなお、神や悪魔でさえ、超自然的な知に頼ろうとする。

ベルはそんな神や悪魔達の事を、誰よりも軽蔑していた。

そして、バラムはそんな小賢しい力に頼る事しかできず、地位にしがみつくと、最低の悪魔だと思つていた。

ベルゼブブのお気に入りでなければ、何度も殺そうと思つた程、

ベルは彼を嫌っている。

「バラム、戦いたいのか？」

「もちろんですとも！」

その目は少年のように輝いている。

老人の目は、一点の曇りも無い。

老いてなお誇りは捨てず、死に場所があれば、喜んで馳せ参じる。悪魔つて奴はつくづく、救いようが無い血煙フェチの大馬鹿野郎共ばかりだ。

だが、ベルはそんな悪魔が大好きだ。

「あい分かった。」

魔界の副帝、ベルゼブブの息子、ベルとして汝に命じる。  
バラムよ、行け。

そして死ぬ！」

「はあーっ！」

ありがたき幸せ！

この上なき光栄！

皆の者、準備は良いか？

死ぬぞ！ 死にゆくぞ！

我らの名を魔界全書に残すのだ！」

バラムの眷属けんぞく達は、口々に唸り声を上げる。

ほとんど知能の無い者さえも、その体に流れる血の忠誠によって、  
主人あにじが為に死ぬのだろう。

これが悪魔。

戦を好み、血を好み、争いを好み、闇雲に散っていく。

考えるより先に体が動く。

目的も無く忠誠に死ぬ。

犬死にさえも快樂として、体の芯を駆け抜けていくのだ。

天界の神や天使、神霊や聖霊達は、誰も彼もが命を大切にと声高に叫ぶ。それは自分も正しいと思うし、相手を慈しみ、思いやる心は素晴らしい。

だが、いざ鉄火場に立たされた時、彼らに覚悟はあるのか。

絶対的なる主の為に、その身を投げうつ事ができるのか。

訓練された犬のように、自己を犠牲にする蟻のように、死ぬことはできるだろうか。

腰抜けの天界。不抜けた神々。

ああ見よ、死んだぞ。一人目が死んだ。

人間が作った科学の前に、呆気なく蜂の巣にされ、ぼろ雑巾のようになつて海に落ちていく。

二人、三人、数え切れないほどの悪魔達が、鉄と鉛と火薬の雨に突き進む。

白い雨。

青い雨。

赤い雨。

それはまるで、高速で飛ぶ巨大な虫の群れ。

そして海には、悪魔達の肉片が飛び散ってゆく。

「サタン様ばんざあああああああああい！」

一際大きな声を上げて、バラムの体が塵芥となる。

わずか一秒足らずの事だ。

しかし、主を失ってなお、死の空は次々と要塞へ降り注いでいく。

きつと最後の一匹が死に至るまで、露払いは続くのだろう。

無限に続く掃射音は、屋根に跳ね返る雨音のよう。

ベルは黙って腕を組み、彼らの死に様を眺めている。

人間が知恵の数で勝負をするならば、こちらは力の数で勝負を挑んでいる。

四十の軍団はやがて、一つの砲台を取り囲み、その全てを破壊し尽くす。

もちろん砲台はまだ無数に残っている。

しかし、一つが崩壊すれば、それは巨大なダムに空いた穴となる。

二つ、三つ、砲台は徐々に姿を消し、やがて半分以上の砲台は破

壊された。

「ラーフラ、このままなら俺達の勝ちじゃねえか？」

戦えなくて残念だが、バラムの死は無駄にはならなかった」

「これで終わりだった？」

あのクソサンタクローズがこれで終わらせる？

俺にはそう思えないね」

「まだ何かあるって言うのか」

「あるだろう、絶対に」

ベルはいらだちを隠そうともせず、蟻がたかったようになってい  
る要塞を睨み付ける。

七割方の砲台は陥落し、今頃内部は阿鼻叫喚の地獄となっている



だろう。

もはやサンタクロースの骨のかけらさえ、残っていないかも知れない。

だが、そうであれば問題は無い。

ハルマゲドンは終了し、人間界も天界も魔界も、退屈な日々が戻ってくるだけの話だ。

ただ、サンタクロースというものは、本当の伝説となるだろう。

「ラーフラ、そろそろ帰る準備でもしたらどうだ？ 残念だけど、俺達の出番は無さそうだ」

「まだだな、最後まで見届ける。油断はするなベル」

「心配性だなあ、ラーフラは」

ベルは苦笑しながら、もう一度要塞に目を移す。勝利をこの目で確かめる為に。

だが、ラーフラの不安は現実のものとなった。

挑発をする文章の書かれた旗の、文面が変わっている。そこに躍っている文字は大きく三つ。

『はずれ』

次の瞬間、要塞はまばゆい光に包まれる。

それは悪魔の放つものではない。

紛れも無く神霊の使う光の術によるものだ。

「退けえ！ 退くんだけア ツ！」

「遅いよ、ベル」

轟音と共に、要塞は大爆発を起こした。

血しぶきも骨も、灰さえ残さず焼き尽くす。

海はすり鉢のようにへこみ、やがて何事も無かったかのように静けさを取り戻す。

永遠に続くような数秒間。しかし、時は流れる。

呆然とするベルと、苦笑いをするラーフラ。

やがて、抜いていたサーベルを戻すと、ラーフラは深い溜息を吐く。

ようやく、誰と戦わねばならないのか、彼はやっと分かったのだ。

「これは多分、彼女の仕業だ」

「誰だ？ 心当たりがあるのか、ラーフラ」

「閻魔大王の娘、六道炎夜の獄炎術だよ」

### 第13章 ぱんつ再び

静まり返り、陽の光も届かない海底から、それはゆっくりと浮かび上がりつつある。

五亡星をかたどった鉄の浮島。くろがねメガフロート

破壊された要塞よりも、遥かに巨大な砲台の群れが無数にそびえる。

全体はシャボンのような空気に覆われ、空を飛んでいるようにさえ見える。

一見するとそれは、ドーム型の未来都市のようにも見えらるだろう。そして、その中央に位置する中央司令室で、口元を扇で隠しながら高笑いをする女が一人。

たった今、世界最大の要塞を一つの罫として使い、四十の悪魔軍団とバラムを葬り去った、六道炎夜だ。

「これぞ我が力！ 我が獄炎術！ 閻魔大王の娘は伊達じゃないのよ！」

「むうー、悔しいけど凄いわね……」

ニコラにもらった特濃牛乳を、いつものお気に入りのマグから飲みながら、ナナは炎夜の方を見る。

その隣にはニコラが座り、画面に映る戦況をじっと見守っている。死傷者約四万三八〇〇人。これだけでも、人間界ではちょっとした戦争レベルの犠牲者だ。

まずは前哨戦を勝利で飾る事ができた祝いに、ニコラはウォッカのグラスを傾ける。

しかし、まだまだ油断はできない。

いきなりラーフラとベル、そしてバラムが軍団を引き連れて来たのだ。

天界と魔界の若きサブレットと、魔界の大幹部による奇襲。

遺憾の意を表明などと言っておきながら、こんなやり口で攻めて

くる。

神も悪魔も、まるで食べない奴らばかりだ。

「しかしまあ、プレゼント袋ってのはすごいわね。金さえ入れれば、こんな巨大な要塞をすぐに取り出せてしまうなんて」

『えっへん』

プラカードを出して、感謝しろと言わんばかりに袋を膨らませる。確かに、彼がこちら側に居なければ、今日のハルマゲドンは実現する事は無かっただろう。

そういう意味でも、彼は一番の立て役者であり功労者だ。

「プレゼント袋、まだまだ頑張ってもらうよ。子供達の為にもね」

『死力を尽くしましょう』

ぼんぼんと袋の留め口を叩きながら、要塞が浮上する軌道の確認をする。

「ニコラ、太陽の光だよ！ そろそろ浮上するよ！」

「ああ、いよいよ本当の戦いが始まるんだ。覚悟は出来てるか、ナナ」

「ニコラと一緒になら、大丈夫だよ」

ナナが気丈な笑みを浮かべ、頷く。

握った手は、少し震えている。

平和そのものの部屋の中だが、一寸先には絶望的な死が口を開けて待っている。

サンタクローズと閻魔大王の娘、そしてグレムリンとプレゼント袋。

総兵力はわずか四人だが、負ける事は許されない。

「浮上が終わったわ。周辺の状況に気を付けて」

炎夜の言葉に、全員の目がモニターに釘付けになる。

だが、空は晴れ渡り、雲一つ無い穏やかな天気だ。

しかし油断はできない

遙か上空から押しつぶされそうな強い殺気を感じる。

おそらくバラムよりも階級が高い、何者かがまだ残っているのだ

るっ。

誰もがぴりぴりとして画面に釘付けになっているその時、モニタに何か映し出される。

落下物だ。それも、超高速で真っ直ぐに、この司令室に向かって飛んでくる。

弾丸か。それとも爆弾か。或いは新手の悪魔か神霊。

小ささとスピードの速さから、砲台はその存在を捉える事ができない。

固唾を呑んで見守る四人の目に、トマトをあしらった白い布地が映し出される。

どこかで見たとある造形。

ぷりんぷりんでむちむち。

「ぱんっ……？」

「ぱんっね」

「ぱんっだな」

『ぱんっですね』

四人が口にした次の瞬間、それは司令室の外光を取り入れるために作られた、厚さが三十センチある防弾ガラスに向かって、彗星の如く衝突する。

ぐらりと要塞は左右に揺れたが、ほんの数秒で揺れは治まる。

「はっっ……おしりいたいです……」

「おい、そのぱんっ」

「ぱんっ！ぱんっみえましたか？」

「見えるっていうか、ぱんっしか見えないんだが」

「はっっっ！えっちです！へんたいです！」

「じゃあさっさとそこから降りろ。いつまでもお前の尻が豪快に見えすぎて、邪魔だ」

「えーっと……大変もうしあげにくいんですが……」

「何だ」

「高いからこわいので、おろしてくれませんか？」

こわごわとした少女の声に、豪快に四人はずっこける。  
何だこれは。新手の罠か？

だが、声や雰囲気には一切の敵意、殺意は感じられない。  
仕方なく外に出たナナが、彼女を下ろして部屋に連れてくる。  
白髪に赤い目と、夜のような漆黒のマント。

彼女は吸血鬼族の子供だと、一目で分かる風体をしている。  
そして、頼みもしないのに、まだ空も飛ぶことができないと照れ  
ながらに彼女は語った。

「で、お前は誰だ？ 何の為にここに来た」

「あ、はいー、わたしの名前はドラコです。ベルさまの身の回りの  
世話をしています」

「可愛い！ ドラコちゃん可愛い！ 地獄に一匹欲しいわ！」

「えへへ、ドラコはかわいいんですよ」

そう言って、彼女は春のお日様のような笑みを浮かべる。

こんな緊迫した時期に、呑気にドラコに頬ずりをする炎夜。  
だが、気を張ってばかりでは疲れるだろう。

たまにはこういう息抜きも必要だ。

「ドラコちゃん、お姉ちゃんが作ったミルククッキー、食べる？」

「うわあ、おいしそうです！ ほしいです！ 食べてもいいんです  
か？」

「どうぞ、召し上がれ」

「わあ、ありがとございますー！」

ドラキュラってクッキーを食うのか。

初めて知った豆知識に、ニコラは少々戸惑いを感じる。

「あ、血の池印のトマトジュースもありますか？」

「あるよ。地獄だと安く買えるし、美容にもいいから私が持ってる  
わ」

「ほしいですー！」

「はい、どうぞ」

「うわあ、みんなやさしいです！ ありがとございますー！」

お前は漫画のキャラクターか！

トマトジュースでいいのか！

目の前で展開する、よく分からない吸血鬼の姿に、ニコラは軽い頭痛がする。

だが、そんな彼の心を見透かしたように、プレゼント袋はプラカードを出す。

『バハリン、いりますか？』

「いや、別にいいよ。とりあえず、こいつのスーパーなごみタイムもすぐ終わるだろう」

「んぐっ！ んー、んー、ぷはあ。のどに詰まっちゃいました……」

「ゆっくり食べていいよ。まだ沢山あるからね」

「はいー。でも、あまりゆっくりしているとベルさまに怒られちゃうのです」

そう言って、彼女はきよろきよろと辺りを見回し、ニコラを見る。

「ニコラさんは、あなたですか？」

「そうだよ」

「わたしは、あなたに降伏するよう伝えにきたのです」

「なるほど、和平の使者か。条件は？」

「魔界の副帝、ベルゼブブさまの息子であらせられる、ベルさまの配下になることです！」

満面の笑みで、嬉しそうに語るドラコ。

だが、ニコラの顔は無表情だ。

それに対して、あれ？ なんて喜んでないの？ と、ドラコは不安になる。

「ベルさまはやさしくてカッコよくて、とってもステキなんですよ

「！」

「で？」

「それですね、なんと今なら、ドラコがあなたのじょうしになるんです！」

ドラコ、しゅっせするんですー！」

びきびきと、ニコラの額に血管が浮かび上がる。

こんな幼いぱんつドラキュラの手下になる。それが和平の条件だと？

あからさまな挑発じゃないか。

こいつ自身は気付いていないだろうが。

「えーっと、んーっと、今ならお給料が毎月十八万へブンに、血の池印トマトジューズを一日一本付けちゃうんですよ！

すごいのです！

ドラコのお給料なんて、毎月千五百へブンに、血の池印トマトジューズが五本だけなのです！」

「小娘、お前のそれは、一般的に言う『おこづかい』じゃないの？」

「あー、ベルさまが毎月くれるお給料袋に、そんな五文字が書いてありますね。

これは魔界ではお給料と同じ意味なんだって言っていましたよ」  
騙されてるぞドラコ。

お前、全力で騙されてる。

炎夜はハンカチで涙を拭い、ナナは呆然として笑顔が引きつっている。

見た目も子供だが、中身も生活も、どうやら本当に子供らしい。

「ねえドラコちゃん、歳はいまいくつ？」

「ことしでちょうど百歳です！」

元気いっぱい両手の指を広げて言う。

一本の指で十歳なのだろう。

「私は百五十歳だから、私の方がお姉さんね！ さすが私、閻魔の娘は伊達じゃないわ！」

「うわ、ドラコまけたのです！ せんぱいです！」

「いや、歳とかどうでもいいだろう。とりあえず、返事だが」

「はい！」

「悪いけど、僕の上司はサンタクロース一世しかいないんだ。そこ



で、これを君にあげよう」

ニコラはプレゼント袋に手を入れると、血の池印トマトジュースの、二四本入りケースを取り出した。

その瞬間、ドラコの目はぱあつと輝く。

「いいんですか?! 二四本も入ってますよ?! ドラコの五ヶ月分の給料ですよ?!」

「ああ、ドラコにもメリークリスマスだ。

これは良い子の君に、サンタからのプレゼントさ」

「ドラコ、がんばってこれからもよいこになります!」

「そうだな、ベルとやらにも宜しく伝えてくれ」

「はい!」

ニコラが頭をわしわしと撫でると、ドラコは元気いっぱい返事を  
する。

彼女はトマトジュースのケースを抱えて、ベルがくれた帰還用の羽を付けると、何度も振り返りながら、大きく手を振って、空の彼方へと消えていった。

「ねえニコラ、いい子だったね」

「ああ、こんな場所には不釣り合いすぎる程にいい子だ」

「悪魔は必ずしも悪い人ばかりじゃない。

元は神霊や大天使だった者も多いわ。

ただ、神や精霊達の中でも、上の腐った連中のやり口に嫌気が射して、墮天しただけ。

私達が戦おうとしているのは、文字通りの悪魔じゃないし、絶対的な正義の化身でもない。

ニコラ、それだけは覚えておいて。

人間も神も悪魔も、大して差は無いということを」

「戦うのに理屈なんて考えない。終わったら握手をして、抱擁を交わせばいい。

今は殺し合うだけさ。

それだけが、お互いを分かり合うコミュニケーションなんだ」

ニコラは苦笑して、二人の顔を見る。

戦いはまだ、始まりを告げたばかり。

自分は大切なものを守れるのだろうか。

守り抜く事ができるだろうか。

全てに勝って生き残り、笑って抱きしめあえるだろうか。

「ねえ、話し合いで分かり合えないのかな」

「分かり合えないんだよ。」

人間も神も悪魔も、きつとみんないい奴で、たまに悪い奴がいて、不器用で滑稽で、一生懸命で格好悪い。

けれど、全力で失ったり手に入れたりしたら、その後に分かることもあるんだ」

「男の子だよねえ、ニコラって」

「でも、そんなサンタクロースが好きなんだろう、炎夜？」

「そうね。生きて帰って、私はあなたをムコにする」

「私、負けないよ。炎夜さん」

「恋にライバルは付き物。」

けれど、まずは今を生き残るため、お互い協力しましょう」

「賛成ね」

甲板の上で笑い合う三人。

命懸けだからこそ素直になれる。

これから始まる戦<sup>いくさ</sup>を前に、ほんの少しだけ分かり合えた気がした。

## 第14章 ヘルゼブブの覚醒

想定していたより、遙かに厄介な事になってしまった。

元はと言えば自分も悪いとは言え、子供のしつけというもの、普段からもう少ししっかりしておくべきだっただろう。

果たしてどうするべきか。

思い悩んだ末に、とりあえずヘルゼブブに相談しようと思ひ立ち、釈迦は魔界を訪れていた。

最初にイエスとも話はしたが、そんなことよりホネホネトリオの漫才のどこが面白いのか教えるなどと、たわけた事を言っている。

平和ボケも、ここまで来ると軽い殺意が湧く。

「まったく、イエスさえしっかりしてくれば私がこんな事しなくてもいいのに」

薄暗い闇の世界に於いては、輝く背中の後光が、ちょうどいい外灯代わりになる。

だが、魔界独特の不穏な空気は、いつ来てもあまり好きになれない。

遠くから何度か悲鳴や叫び声が聞こえる事もあるが、魔界では一種の挨拶代わりだと言う。

その変な文化も含めて、彼はいまいち魔界が好きになれずにいる。薄紫色の空の下、道端に転がる角の生えたしゃれこうべ。

大地を包むは血の匂いがする苔。

どこまでも赤く、深紅色の世界が地平線の果てまで続く。どう見ても趣味がいいとは思えない。

地獄の方がまだマシだ。

「おや、そこにおわすはお釈迦様じゃありませんかな？」

「ベルゼブブさん、どうもこんにちは。ちょうどあなたの所に行こうとしていたのです」

「おやおや、うちに来られるなら一言おっしゃっていただければ、

遣いのファフニーを寄越しましたのに」

「いや……あんなデカイ龍をいちいちうちの前に呼ばれたら、迷惑駐龍だって、菩薩の皆さんに怒られますから……」

「確かにごもつとも。それで、我が家に用とは珍しいですな。おそらく、遊びに来たという訳ではないでしょう」

「ええ、うちのバカ息子が、ひよつとしたらこつちにいらしてないかと思ひまして」

精一杯の笑みで繕いながら、ベルゼブブの様子をうかがう。

すると、彼は懐から魔界携帯モニターを取り出して、彼に見るよ  
うに促した。

そこに映っているのは、魔界の侯爵の一人、バラムが鉄の要塞に  
向かって突き進んでいく姿。

そして、彼の率いる四十の悪魔軍団が要塞を取り囲み、盛大に爆  
死をする姿だった。

釈迦はその光景に青ざめる。ベルやラーフラのような若者ではな  
く、一定の地位を持ったソロモン七二柱の一人が、既に戦いに挑み、  
死んでいたのだ。

それも、ベルゼブブの側近の一人と言われている、老悪魔のバラ  
ムが。

「えーっと、お悔やみ申し上げます……」

「お悔やみ？ ふあっふあっふあ、何をおっしゃいますやら。バラ  
ムは誇りを胸に、歓喜の内に死んでいったのです。むしろ、その喜  
びを分かち合つて下さい」

「喜び……ですか……？」

よく分らない。そう言いたそうな釈迦に対し、ベルゼブブはに  
やりと笑う。

「ここのところずっと、平和が続き過ぎて、私達は、本当に大切な  
ものを忘れていたとは思いませんか」

「平和で何が悪いんです！ 秩序こそ天界、魔界の双方が求めるも  
ののほずー！」

「確かに、私もその意見には賛成です。しかし、争うべき理由があるなら、話は別だ」

「理由など無い！ 戦争に正義など存在しない！」

「戦争になれば、お釈迦様お供え思いやり予算なんてものは、全部軍費に回されますからね。そうでしょう、お釈迦様？」

「それが悪い事ですか？ 平和上等、秩序こそ至上。今も昔も変わりません！」

そこまで言った時、ベルゼブブは仕込み杖の刃を抜き去り、釈迦の喉元にぺたりと当てる。

「いい加減にしようやパンチ野郎。」

ワシらあ悪魔だ。

ただ、ほんの少し平和ごっこを楽しませてもらってただけで、お互いに握手を交わすが、空いている手には銃や刀を背中に隠して笑いあっていたはずだ。

ベルゼブブと呼ばれるワシも、要は糞にたかる蠅の王。

だが、人や神にへつらうくらいなら、喉笛かつ切って死ぬ方がマシじゃよ。

バラムはワシに、そんな当たり前を思い出させてくれた」

「ベルゼブブさん……あなた本気で……」

「心配めさるな、今ここであんたを殺せば、本当にハルマゲドンになるじゃろつ。」

まだ今は、その時期じゃあない。

大切なのは、ワシらの顔に泥を塗り腐った上に、大切な子飼いの部下を挽肉にして魚の餌にしてくれた、あのいけ好かないサンタ野郎を、どうやって血祭りに上げるかが肝心じゃからな」

「いったい、何をやる気です？」

「緊急に、森羅万象安全保障理事会の召集を、魔界の副帝ベルゼブブの名の下に発令する。」

議題は天界と魔界、双方による共同軍の編成によるサンタクロース討伐。

「総兵力は四百万だ」

その言葉に、釈迦は顔から血の気が引く。

兵力四百万と言えば、天界と魔界のおよそ五割に及ぶ戦力の投入だ。

それこそ、一步間違えれば全面戦争のハルマゲドンともなりかねない。

「たかがサンタクローズ一人の為に、やり過ぎではないですか?!」

「お釈迦様、あんた甘すぎるんじゃないかのう。やっぱりこの場で殺」

そこまで言った時、ベルゼブブの頭が地面に転がる。

「危ない所でしたね、師匠」

「スプーティ！ お前、なんて事を！」

血を吹き出しながら倒れる、ベルゼブブの胴体。

その向こうから姿を現したのは、釈迦の弟子であり、警護役を務めるスプーティだ。

普段は賢者もかくやという聡明な顔立ちをしたその顔も、今は返り血で赤く染まっている。

「大丈夫です。魔界の副帝がこの程度で死にはしませんよ。そうでしょう、ベルゼブブ様？」

スプーティがベルゼブブの頭の上に足を載せ、こちらを振り向かせると、耳まで裂けるような口で高らかに笑う。

「クケケケケケケツ、魔界の副帝の頭を落として、ただで済むと思っておるのか？」

「あなた、ベルゼブブの形をした、ただの泥人形でしょう。私はここで泥遊びをしていただけ。畏れ多くも魔界の副帝、ベルゼブブ様を手に掛けるなど出来はしませんよ」

「なるほど。では釈迦も、ここで泥遊びをしていただけ。そうだなスプーティ？」

「おっしゃるとおりです。これでお互い、罪は不問とさせていただきます。いいかでしょう」

「良からう！ 不問に処す！ 次はKUMONOUの安保理の席上にて会おうぞ！」

だが、その際は背中に気を付けるよスプーティ？」

「ご忠告、痛み入ります」

そう言って、ベルゼブブの形をした頭を、彼はぐしゃりとすりつぶす。

腐った卵のような匂いが立ち上り、それは緑がかった灰色の液体となって溶けてゆく。

「ああ……なんて事だ……このままでは本当に、天界と魔界の秩序は崩れてしまう……」

「落ち着いて下さい師匠。あなたは天界と人間界を、導くお方はず」

「黙れスプーティ！ お前はなんて事をしてくれたんだ！ このままでは、天界と魔界の友好関係も全て崩れ去ってしまうだろうが！」

「所詮相容れぬものですよ。未開の蛮族共に対し、説法をするなど愚の骨頂」

「スプーティ！ お前は私から何を学んで来たのですか！ そもそもも神霊と悪魔達は」

ああ、こんな時だけ一人前の正義面をする。

しかし、仕方が無いのだ。

釈迦は天界に於ける、仏教勢力という有力な大派閥を取り仕切る頭目だ。

彼の言うことは、終始一貫していなくてはならない。

例え疑問や矛盾があっても、揺るぎない信念を釈迦は持っているなければならないのだ。

とは言え、世話がやけるといっつか、うるさいといっつか。

やれやれと、スプーティは肩を落とす。

さつき浴びたベルゼブブの返り血で、服がべつとりと肌に貼り付いて気持ちが悪い。

早く帰って風呂にでも入り、着替えたい気持ちで頭の中は一杯だ。

「 というわけです。分かりましたかスプーティ？」

「 はい。その教えを心に刻み付け、新たに衆生の救世を考えてまいります」

「 分かったならば宜しい。では、一刻も早く帰りましょう」

「 そうですね。遠くから人狼の吠える声が聞こえます。何かを嗅ぎつけられたかも知れません」

「 急ぎましょう。森羅万象安全保障理事会の召集もすぐにあると思います」

「 面白くなってきましたね、師匠」

「 スプーティ！」

「 はいはい、今は単なる独り言ですよ」

軽く苦笑いを浮かべると、彼は天馬へと姿を変える。

「 お乗り下さい師匠」

「 ちよつと待つて、馬に乗るのなんて久々ですから……」

「 早く！ ヒドラの群がこちらを見つけたようです！」

「 そんなこと言われても……よつと、あれ？ 上手く乗れない……」

「 ええい、くわえますから酔わないで下さいね！」

「 え？ ちよつ、うわ！ 何をする！」

後数秒遅れていれば、触手のようにいくつもつごめく、ヒドラの頭に骨まで食られていた事だろう。

魔界の生物には知能が低いものも多く、彼らは悪魔も神霊も関係なく襲い掛かる。

じゅるじゅると嫌な音を立て、ヒドラ達はベルゼブブだったものが残した液体を舐め取り、雄叫びを上げる。

最後まで嫌な置き土産をしてくれるものだ。

「 スプーティ！ 落ちる落ちる落ちる！」

「 あまり暴れないで下さい……くわえたまま飛んだり喋ったり、大変なんですから……」

「 高いよ！ うわ、マグマだ！」

落ちたら溶ける！ 溶けちゃいますよ?!」



人の話を聞いて下さい師匠。

思っても言わない自分は偉いと、スプーティは自分で自分を褒めながら、魔界の薄闇の中を飛んでいった。

## 第15章 魔界で一番いい女

北極海上空では、結局帰ってきたドラコがトマトジュースを飲む横で、ベルとラーフラが戦略についてあれこれと話し合っていた。

だが、内容はほとんど同じ事の繰り返しになっている。

海中から攻めたい慎重派のラーフラと、空から真つ正面に攻めたいベル。

「俺達二人なんだし、まず中に入る事が大事だろう？ 海だよ海、安全だし！」

「小賢しいんだよ、そういうの。俺があんな砲台に負けると思っているのか？」

「勝つとか負けるじゃなくて、あんなのを相手にしたら無傷じゃ済まないだろう？」

「大丈夫だつて！ 細かい事を気にするのは後だよ、後！」

「気にしろよ！ 本体と戦う前に、あんな無機質の物体と戦うってお前、バカだろ？」

「おいコラ、今バカつつつたかラーフラ？」

「バカにバカと言って何が悪い。俺だつて戦いたい、あんな鉄の塊とデートなんてまっぴらごめんだ」

一触即発の状態に、辺りは重苦しい殺気が漂っている。だが、そこに割って入る者が居た。

トマトジュースを飲み終わったドラコだ。

「えっと、くじをつくったのです」

「くじ……？」

「あみだくじです！ 阿弥陀如来さまの言つとおりなら、きっとそうなんですよ！」

「悪魔のプリンスである俺に、阿弥陀如来の言つことを聞けと？」

「はい！」

こいつ、阿弥陀如来を何だと思っているんだろう。

たぶん魔界放送協会で毎朝流れる、子供番組の司会か何かと勘違いしているに違いない。

だが、そんなドラコに毒気を抜かれた者が居る。ラーフラだ。

「ぷふっ、あはははっ！ そっか、そうだな、阿弥陀如来が言っておりなら、仕方ないよな！」

「おいおい、お前何言ってるんだよ……」

「お前の従者であるドラコが言っているとおりにしようって言うてるんだ。問題は無いだろう？」

「そりゃまあ……ドラコは俺の世話役だが……」

「はいっ！ どれか一つをえらんでください！ 三つのうち、一つはあたりです！」

「あたりって何だ？！」

「あたりが出ると、わたしがチユーしてあげます」

顔を真っ赤にしてドラコは言う。

こいつ、本当に魔界屈指の大馬鹿者だ。

だが、そんなドラコの事は嫌いではない。

あと百年もすれば、魔王達の誰もが振り向く、いい女になるだろう。

自分が考えもしないことを口にする。

ささくれたった場の雰囲気をややかにする。

魔族でありながら、天使のような心を持つ。

ドラコは、不思議な女だ。

「ベルさまもラーフラさまも、あたりをめざしてがんばってくださいー！」

「おやおや、天界の女性誌でキスされたい男ランキング一位の俺に、かわいいレディがキスをプレゼントしてくれるってさ。どうよ、ベル？」

「まあ、こいつの好きにさせてやるっ」

もはや苦笑いしか出てこない。

だが、そんなドラコのことをベルは尊重する。

本当に将来は、魔界の大公になるかも知れないな。

何気なく、そんなことを考える。

「さあ、どれにされますか？」

「お前が選べよラーフラ。こいつは俺の従者、公正を保ちたい」

「可愛い姫様のキスになっても、俺は責任は持たないぞ？」

「ああ、その代わり、正面から攻撃になれば、お前も俺の言うことを聞けよ」

「もちろんだ」

にやりと笑い、彼は真ん中を指す。

一番下の結果の部分は折り畳まれ、どれが何なのかは、この時点では分からなくなっている。

「それでよろしいですか？」

「いいよ。阿弥陀如来の言うとおりだ」

「では、あつみだつくじー あつみだつくじー」

スタートから徐々にゴールに向かっていく。やがてドラコの指は、一番右にたどり着いた。畳んであった部分を戻すと、そこには「うみ」と書いてある。

「あうー、ラーフラさまがあたりなのです」

「よし！ さすが阿弥陀如来様のお導きだ！」

ベルは諦め顔ながらも、公正なくじの結果には逆らえない。

ここはドラコの顔を立てる。

「あたらなかったですねー。ドラコのファーストキス、おあずけです」

「お前はよく頑張ったよドラコ、ありがとう」

ひょいと後ろから彼女を抱きかかえると、その頬に軽く唇を付ける。

「きゃーっ！ ベベベ、ベルさま！ はうっーっ！」

ぼんつと音がして、ドラコの顔から湯気が立ち上る。

彼女の顔は、耳の先まで真っ赤だ。

そんな二人を見て、ヒュウと口笛を鳴らすラーフラ。

「写真に撮って、デュラに見せてやりたいね」

「お前はそんなことしないだろ？」

「さすが親友、よく分かってらっしゃる」

「じゃ、約束通り海から行くぞ。手はずはどうする？」

「そうだねえ、一見して一分の隙も無いように見える要塞だけど、東南東の方向が少し、手薄になっている。

実際に潜ってみなければ、海中の様子までは分からないけれど、と  
りあえずあの方向から侵入を試みれば、リーダー等にも探知はされ  
ないだろう。もちろん殺気は消すんだ」

「分かった。お前の言うとおりにしてみよう。

ドラコ、俺達が居ない間、しっかり様子を見ておけ」

「ベルさま……あぶないことされるんですよ……」

「そうだな」

「さつき、バラムさんたちは死んじゃったんですよ」

「ああ」

「これ、デュラさんからおくりものです」

「え？」

ドラコが手渡したのは、籠の骨を削って作られるお守りだ。

古くから、戦場に赴く恋人や夫の無事を祈る女性が渡すと言われ  
ている。

「ごめんなさい。今までどうしてもわたせませんでした」

「ドラコ……」

「だって、ドラコもベルさまのこと、だいすきだから」

少しだけ泣きそうになりながら、けれど、精一杯の笑顔を見せる。  
彼女もまた、従者である以前に一人の女性なのだ。

「だからっ、これは二人からのプレゼントなんです！ 生きて帰っ  
てくるって、ドラコとやくそくしてください！」

「おいおい、俺が負けと思うてるのか？」

「いいえ、ベルさまは一番です！ 最強で最高です！」

「そつだよ。俺は最高だ」

「まっています！ わたし、まっていますから！」

「ああ、お前がお昼寝を終わる頃には、俺達は戻ってくるよ」

「いってらっしゃいませ……ご主人様……」

深々とお辞儀をするドラコ。

ベルは「ああ」と短く呟くと、背中を向ける。

海に潜る彼の姿を見送るのが怖くて、ドラコはぎゅっと目をつぶっていた。

サンタクロースはいい人だった。彼の周囲の人もいい人だった。

だからきつと、二人は無事で帰ってくる。

それは都合のいい幻想。子供っぽい妄想。

さつき、彼女はその目で見ていた。

バラムと四万を越える悪魔達が、肉片となって海に消えていく様を。

怖々として震えながらも、目を逸らさずに、ベルの後ろで見ていたのだ。

さつき要塞に使者に出る時も、本当は怖くて仕方がなかった。

けれど、役立たずになりたくなくて、彼女なりに必死だったのだ。

結果として、トマトジュースに懐柔されたけれど、彼らの目は濁ってなどいなかった。

伝えられなかったけれど、それは真実。

なぜ戦うんだろう。

なぜ戦うんだろう。

お互いの命を紙くずでも捨てるように、奪い合い、捨て合っただろう。

幼い彼女には分からない。

けれど、それはきつと大切な事なのだ。

ベルやラーフラにとって、バラムや四万を越える悪魔達にとって、分かりたくない大人の世界。

けれど、彼が愛するデュラハンは、それを知っている。

知っていて、自分にこのお守りを託したのだ。

小さなライバルさん、宜しくねと言って。

「お似合いですね、ラーフラさんもデュラハンさんも……」

誰も居なくなつた空の上で、ぽつりとドラコは呟く。

海は何事も無かつたように、さざ波を立てて静まり返っている。

いつか自分も共に戦えるようになりたい。

デュラハンのように、言わずとも理解し、毅然として見送りたい。

「いつか、きつと」

少女の決意は、さざ波の音と共に、ゆっくりと心の中に溶けていく。

その時こぼした一雫の涙は、子供だった彼女に別れを告げるものだった。

## 第16章 誰が釈迦の饅頭を食べるのか

「こうして共に馬を並べるなんて、思ってもみませんでしたねえ仏陀」

けらけらと気楽な笑い声を上げているのは、茨の冠をまとったイエスだ。

突如召集された森羅万象安全保障理事会は、四百万の軍隊を天界、魔界の双方から送る事を、異例のスピードで可決したのだった。

天界側の総指揮官はイエス・キリスト。

副官は釈迦だ。

二人は天界より二百万の聖霊兵を集め、あの世とこの世の境である、黄泉比良坂に陣を敷いていた。

数千口離れた向かい側では、ベルゼブブを総指揮官、アスタロトを副官とした、同数の軍勢が陣を為している。

どちらかが原因で、小競り合いでも起こそうものなら、一瞬にしてハルマゲドンは始まってしまっただろう。

それ故、特に天界側はぴりぴりとした空気が漂っている。

一方の悪魔達は、酒宴を開いて天使達を挑発する。

自分達は勝てる、強い、お前達とは違う。

明らかに、天界を挑発しているのだ。

だが、天使達も表面上は見えて見ぬ振りをしている。

平和になった世の中でも、所詮は砂上の楼閣。

天界と魔界の間には、深くて大きい溝がある。

それを越える事など、誰にも出来はしないのだ。

「私は本当は反対したいんですけどね、こうなっては何も言えないでしょう」

「分かります。私も気持ちは同じ。ですが、いつか悪魔とは争う日も来る事でしょう。その時に向けて備え、相手の実力を見る良い機会でもあります」



「イエス……あなた、本当は戦いたいと思っ  
ていませんか……？」  
「我が信仰は常に血と戦いにまみれて  
来ました。仏陀、あなたと私  
は違います」

「イエス?!」

「はははっ、冗談ですよ仏陀。戦いを好む  
なんて、ギリシヤや日本の一部の神々  
だけですから」

「あなたが言うと、冗談に聞こえませ  
んよ……」

「イエス様、仏陀様、全ての準備、整  
いました」

戦いの正装に身を包んだスプーティ  
がやって来て、恭しく頭を下  
げる。

「ご苦労様です。優秀な部下をお持  
ちで、羨ましいですね、仏陀」

「あなたの所にも、ヨハネやペテロ  
がいるでしょう」

「人の持ち物がよく見えてしまっ  
事って、ありませんか？」

口元に手を当て、くすくすと笑う。

時折彼が分からない。

イエス・キリストという人間は、主  
に次ぐ地位を持っているが、同時に  
疑問に思うのは、その「主」と呼ば  
れる存在に接することができるのは、  
イエスのみとなっている。

イエスに次ぐ地位を持つ釈迦だが、  
彼でさえも主との謁見は叶わない。

だが、以前聞いた噂によると、魔界  
でもサタンと謁見が許されているのは、  
ベルゼブブ一人と言われている。

主とサタン、どちらも天界と魔界を  
象徴する者であり、実質的には運営に  
一切関わらない、純粹な象徴として  
君臨している。

ひょっとして、主とサタンというの  
は

「師匠、お顔色が優れませんか」

「え？ ああ、ラーフラの事が心配で  
ね」

「そうですね。早まった事をしてい  
なければ良いのですが」

「これはこれは、指揮官に副官、ち  
ょうどお揃いのようにすな」  
その声に、思わず背筋がぞくりとな  
る。

振り返ると、そこに立っていたのは黒服に身を包んだベルゼブブとアスタロトだ。

これから戦場に向かうというのに、まるで喪服のようにさえ見えるその姿に、周囲の兵達はざわめきを隠さない。

「ようこそベルゼブブさん、アスタロトさん」

両手を広げ、歓迎の意を示すイエス。

彼は恐れる事もなく、ベルゼブブと抱擁を交わす。

だが、仏陀としては一度殺されかけた事もあり、おいそれとは彼に近づく気にはなれない。

愛想の良いベルゼブブとは対照的に、副官のアスタロトは、つまらなそうにあらぬ方向を見ている。

天界の事など、まるで興味が無いといった面持ちだ。

「さすがは聖霊兵の皆さんですな。どなたも立派な装備をしていらつしやる。特に天使兵の装備などは、ギリシャのヘパイストスが用意したと聞き及んでいますよ」

「いえいえ、身体能力や呪術に優れた悪魔の皆さんと違って、道具であがなう事しかできないものですから」

「これはこれは、ご謙遜をなさる」

「本当の事ですよ。日々鍛錬をされている、あなたの軍勢と比べれば、我々は見劣りをしてしまいます」

お互いが上品に笑い合い、親交を深めようとしているかに見える。

だが、誰が見ても流れる空気が最悪なのは、火を見るよりも明らかだ。

釈迦もまた、仏スマイルを崩そうとはしないが、内心は不安で仕方がない。

横では直前にベルゼブブの泥人形を切り捨てた、スプーティが居るのだ。

彼は柄に手を添え、小さく刀身を見せている。

何かあれば即座に斬り捨てる。

無言のうちにそう言っているのだ。

そして、そのあからさまな挑発を隠すつもりなど毛頭無い。

最初は一方向を見ていたアスタロトだが、それに気付いてからは、たまにちらちらとそれを見ている。

もし彼らがこのことを何か言えば、すぐに均衡は崩れてしまうだろう。

だが、イエスもベルゼブブも、まるでそんなことを気にする様子はない。

むしろ、楽しんでいるかのようにさえ見える。

「ベルゼブブ様、アスタロト様、急使が参っております！」

「ん？ 分かった、ここに通しなさい」

「このことは？ ベルゼブブさん、こちらは天界の陣営ですが、宜しいのですか」

「構わん。我々は今、共に同じ戦いに身を投じるはらから同胞なじゃから」

伝言を伝えに来たガーゴイルの後ろから、首をきちんと着けたデユラハンが現れる。

「偉大なる副帝、ベルゼブブ様。急なお目通り、恐悦至極に存じます」

「デユラよ、ワシとお前のかような挨拶は不要と言ったはずじゃが」

「はい。しかし今はイエス様やお釈迦様の手前、私も礼を失するわけに参りません」

「あい分かった。しかして、用件は何じゃ」

「ベル様とラーフラ様が、サンタクロースの築いた要塞に侵入されました」

「何ですとぉーっ?!」

頓狂な声を上げたのは釈迦だ。

この慌てようには、さすがのイエスも苦笑する。

一方のベルゼブブはひげを指先で触りながら、続ける小さく言った。

「闇雲に攻め込めば、ベル様やラーフラ様にも害が及びかねません。ご注進申し上げます」

「なるほど、ではどうすればよいと思う」

「このデュラハンに十万の兵をお預け下さい。要塞の周囲を包囲しつつ、ベル様とラーフラ様を連れて戻ります」

「女性一人では心許ない。私がお供致しましょう」

そう言つて、一步前に進み出る者がいる。

刀を戻し、いつも通りの聡明な表情を浮かべたスプーティだ。

涼しげな目で悪魔達をね睨め回し、釈迦とイエスの方を見る。

「いかがでしょう。魔界と天界、双方から使者を一人ずつ出すというのは、必要な事だと存じます」

「天界の剣聖と名高いスプーティ殿が行くなら、デュラハンも百人力、いや、千人力じゃのう」

「そうですねえ。私は問題ないですよ。仏陀はいかがですか？」

「え、ああ、まあ、イエスとベルゼブブ様、それにアスタロト様が良いとおっしゃるなら」

「私は構いません」

ぼつりとアスタロトは呟く。

誰にも見えないように、デュラハンはその返事を聞いて、一際拳を強く握りしめ、スプーティは口の端で笑みを浮かべる。

させないよ。

彼は無言で言っている。

「ではスプーティ、お前にも十万の兵を与えよう。二十万の兵があれば十分過ぎるでしょう、デュラハンさん？」

「はい。天界と魔界が手を取れば、恐れるものなどありませんか」

「このスプーティ、身を粉にして主の為、剣を振るいきましょう」

「武運長久を祈ります」

イエスが言い終わると、二人は再度深く礼をし、戦の準備にとりかかる。

その際に、スプーティはちらりと後ろを振り返った。

釈迦にだけ目配せで、大丈夫ですよと伝える。だが、彼としてはそんなものは信用ならない。何かやらかすんではないだろうか。ただでさえややこしい事態の中に、さらに不安が積もっていく。どうして自分の周囲には、これほど頭痛の種が多いのだろう。平和を希求し、その為に尽力しているはず。天界と魔界は手を取り合ったはずなのに、それも見せかけだけの姿に過ぎない。

彼は身をもってそれを体験した。

いつかきつと、本当のハルマゲドンは起こる。

これはその前哨戦であり、代理戦争だ。

互いの力がどの程度のものなのか、探ると同時に見せ付けあう。いわば戦力の誇示をする為のステージとなっている。

自分は一人置いてきぼりだ。

この巨大な三千世界で、ほぼ頂点に近い立ち位置に居るはずなのに、なぜか真理との距離は遠ざかっている。

中核となる部分から、恐ろしい勢いで遠ざけられている。

ぎりりと歯ぎしりをする、釈迦はスプーティを呼び止める。

「お待ちなさいスプーティ！」

「はい？」

「私のお饅頭、良ければ食べてもいいですよ」

その言葉に、一瞬彼は考えるように上を向き、そして頷く。

「かしこまりました」

釈迦の饅頭を食べる。

それは、釈迦が全権を委任したという事を表している。

これは仏界の隠語として、幹部達なら誰もが知っている。

そして、今それが発令されたのだ。

釈迦は自分が戦に向かない事を知っている。

時に、鉄火場に於いては暗愚でさえあるだろう。

そんな彼だからこそ、そばに仕える忠臣の事は、絶対の信頼を置

いている。

特に、釈迦の直属の十六羅漢は、表向きこそ単なる事務方を演じているが、スプーティが筆頭となって、秘密裏の内に武装を行っていた。

お釈迦様お供え思いやり予算の大半は、彼らの育成へと使われており、逆にそれをカムフラージュするために、彼は私費としてそれをラーフラのヘアケア代や、自分の乳粥代、さらに家屋敷の家賃として架空計上をしていた。

もしイエスが自分を裏切ったならば。

もし魔界と戦争になったならば。

自分は仏教派閥の頭目として、彼らを守らねばならない。

絶対などという言葉は、天界に於いてさえ存在しない。

だが、彼はそれでも愛と平和を信じたい。

暗愚と思われ、誹<sup>そし</sup>られても、それが釈迦の義務だと彼は思っている。

その一方で、こうした準備を怠らないのは、彼の弟子達が有能であり、徹底した現実主義を取っているからだ。

「そんなに美味しいお饅頭なのですか？」

イエスの問いかけに、疲れたように笑い掛ける。

「ええ、とっておきのお饅頭なんです」

「それはそれは、宜しければ一度、私も食べてみたいものですね」

「滅多に食べられない貴重なものなのです。機会があれば、いずれご馳走しますよ」

だが、そんな機会が訪れなければいい。

彼は思う。

そのお饅頭をご馳走するということは、イエスとも一戦を交えるという事だ。

にこにこ罪の無い笑みを浮かべるイエス。

だが、仏陀の中には一抹の不安が残る。

天界は、魔界は、いつたいどうなってしまうのだろうか。

既に神となって昇ってしまった自分は、誰に赦しと救いを祈れば  
良いのだろう。

その問いに、釈迦は再び同じ疑問が、先ほど考えていたことと同  
じだと気付く。

やはり主というのは

## 第17章 それは奇跡の失敗作、汝の名は人間なりや

ラーフラによる分析は、見事に当たっていた。

海中の警備は手薄で、一戦を交える事も無く、すんなりと要塞の中に侵入を許した。

もちろん、ある種の角度やルートを通る事によって、レーダーやソナーに掛からないように細心の注意は払っている。

だが、海上に於いて無敵を誇った要塞にしては、あまりにもお粗末な警備体制と言える。

彼は明らかに、自分が試されており、自分達はわざと侵入を許されているという事を、その体で感じていた。

「呆気ないもんだな。派手さも無くてつまらねえよ」

「体中を銃創だらけにして、血煙まみれになりながら戦いたかったか？」

「ちょっとくらいハンデをやらねえと、サンタなんて俺達なら秒殺しちまうだろう」

「だいたいな」

何かの搬入口らしきところから内部に入り、周囲の様子を確認する。

手から出した光弾で辺りを照らし出すと、それはまるで、人間達が最近になって作っている、映画などに出てくる宇宙船の中のようにも見える。

無機的な鉄に囲まれた空間は、通路そのものはかなり広く設計されているはずなのに、どこか息が詰まるような圧迫感を与えてくる。

「さつさと殺して帰ろうぜ。ここは嫌な匂いがする」

「嫌な匂い？ 僕がこうして歓迎してやってるのに、なかなかひどい言いぐさだな」

おいでなすった。ベルはにたりと笑いながら、舌なめずりをする。



やがて、彼は音もなく壁の中から姿を現した。

頭にだけはサンタの象徴である赤い帽子を被り、迷彩服に身を包んでいる花巻ニコラだ。

右手には、安っぽいステッキを持っている。

左手には、棒きれに紙を貼り付けただけの、安っぽい三角の旗を持ち、ボールペンの手書きでWELCOMEと書かれている。

「仮装パーティーに行く途中か？ かぼちゃの馬車でエスコートしてやりたいが、生憎全て出払ってるんだ。悪いな」

「男にエスコートなんてされたくないね。蠅の王の息子さんよ」

「そんな糞にたかる蠅の子に、お前は殺されるんだよ」

「やれるつもりか？ 来いよ、虫ケラ」

小さな旗を捨てると、中指を立てて、ベロを出して挑発する。

あからさまなその態度。背筋がぞくぞくとしてくる。

殺したい殺したい殺したい殺したい。

殺し尽くして、骨まですりつぶしてやりたい。

だが、歓喜に震えるベルの肩に、ラーフラはぼんと手を置いた。

「落ち着け。畏だ」

「待てよラーフラ、ケンカを売られてるのは俺だ」

「お前が熱くなりやすい性格だと、炎夜辺りに言われたんだろう」

「炎夜だろうが閻魔だろうが、今ここに居て、奴の片棒を担ぐ奴はぶち殺すだけだ」

べろりと舌なめずりをするベル。

だが、ラーフラはずいと前が出る。

「おい、俺の前に立つんじゃないよ」

「仲間割れしてる場合じゃない。今は敵がどの程度のものか、知る事が先決だ。」

俺が先にやる。もし俺が叶わない相手だったなら、助けてくれよ、ベル」

「それは釈迦の息子、ラーフラとしてのお願いか？ だったら、ちやんとお願いしますって頭を下げるよ」

「分かった。どうか、お願いします」

ラーフラはベルの方向に直り、深々と頭を下げる。

一瞬、何が起きたか分からなかったが、すぐに状況を察する。熱くなった自分の方が、ラーフラの弁に負けてしまったのだ。

これでいいだろうか？ 笑みを浮かべるラーフラに、ベルは苦笑する。

「仕方ねえな。俺の楽しみもとっておいてくれよ？」

「カタが着かなきゃ、後は頼むって言うてるだろう？」

ニコラの方に向き直ると、背中 of サーベルを抜き、身構える。

「茶番劇は終わったか？ 先に殺るのはお前でもいいのか」

「ああ」

「僕は二人いつぺんに掛かってきてもいいんだけどね」

「挑発に乗るのは愚かだ」

言い終わる前に、彼はニコラの懐に飛び込む。

驚いた顔をするニコラの体に対し、斜め上から刀を振り下ろす。

だが、寸前で彼は体を傾け、ラーフラの刀を避けた。

そのまま天井に飛び上がると、逆さまの状態で笑い声を上げる。

「お前、今僕のことを殺せると思っただろう？」

「普通の神霊や悪魔なら、今の一撃で葬り去っていた」

「釈迦の息子ラーフラ、お前に相応しい死に場所を用意してやるよ」

ぱちりと指を鳴らした瞬間、要塞の通路はまばゆい光に包まれる。

思わず目を閉じ、次に開いたその時、そこはもはや薄暗い要塞の通路ではない。

イエス・キリストの私庭、エデンだ。

どこまでも続く花畑と、永遠を思わせるような蒼穹。

所々では白い蝶が舞っている。

「幻術だと……？」

「お前が一番好きな場所は、ここだろうか？ 死に場所に相応しいじ

やないか。僕に感謝しろ」

宙に浮かんで、逆さまになったままのニコラが胸を張る。

ああ、憎らしい。どこまでも腹立たしい。

そんなに挑発されると、みじん切りにしてやりたくなる。

「分かったから死ねよ」

大地を蹴って飛び上がり、三六〇回に渡り斬りつける。

それは刹那、瞬く間の出来事。

天界一の名刀、雷神インドラが造りし増長天は、ソウチョウテンあらゆるものを

紙の如く切り刻む。

まさにニコラは挽肉となり、花畑の土となる。

そのはずだった。

だが、いつの間にか彼は地面に降り立ち、くるくると安物のステッキを振り回している。

「それで終わりかな？」

返事をする間も惜しいと思い、そのまま下に斬り掛かる。

空を切り、力任せの一刀両断。そこには確かに手応えがあった。

だが、一步下がって彼は笑っている。

「そろそろ反撃していい？」

「やれよ、サンタ」

飛び上がり、ニコラは杖の先をラーフラに向ける。

「サンタクローズ波ア

ッ！」

光の塊が先端に現れ、それはラーフラの方を目指して飛んでくる。

だが、彼はそれを刀で斬り捨て、飛びかかろうとした。

だが、なぜか足下に嫌な寒気を感じる。それは刹那、彼の気を散らせた。

「避けるラーフラアッ！」

「え？」

不意に響く爆発音。

足を包み込む熱。

気が付くと、彼は花畑の中に転がっていた。

「くっ……右足が……」

「僕の勝ちだね。ラーフラ」

地面に降りたニコラは、ゆっくりと近付いてくる。

勝利を確信した者の余裕。だが、それは同時に慢心でもある。

とどめを刺そうと、ニコラはもう一度ステッキの先端をラーフラに向けた。

「お前、俺を誰だと思ってる？」

「釈迦の息子ラーフラだ。こんにちは、そしてさようなら」

光が放たれるその前に、突如再生した右足で、彼は大地を蹴って飛び上がる。

増長天の切っ先は、輝く太陽に向かって突き刺さった。

ガシャンと何かが壊れる音。

再び周囲は薄暗い、要塞の通路へと戻る。

「サンタクローズ、俺は君を舐めていた事を謝らなければいけない。なるほど、君は森羅万象会議に席を連ねる議員達と、同等かそれ以上の能力を持っている。」

光を操り、光の粒子密度を高めて物質化し、時には幻術、時には影武者、時には武器へと姿を変えて、変幻自在にそれを操る。

科学になど興味の無い、神霊達には想像もできないだろう。

人間とは考える。

人間とは学ぶ。

人間とは進化する。

素晴らしい。

ああ、実に素晴らしい。

お前は俺の敵だ。

素晴らしい敵だ。

相応しい！

殺したい！

認めてやるよ！

其は人間、我らが神の愛児。

なあ、そうだろう？ 花巻ニコラ

ラーフラが睨み据える扉の向こうから、パンパンと小さく拍手をす

る音がする。

やがてゆっくりそれは開き、先ほどと同じ出で立ちをした、ニコラが姿を現した。

これくらいじゃあ、殺せないよね？

苦笑は無言の言葉を伝える。

「ついでに言うなら、多分お前も本体じゃない。ただの光の塊だ」「どうしてそう思う？」

ニコラの問いかけに、刀を床に突き刺し、ラーフラは語る。

「光とは波であり、粒子だ。どちらでもあって、どちらでもない。

極めてあやふやで、不可思議。

お前は粒子としての性質を用いたんだ。

光の粒子密度を高め、物質化する。

その為、斬れば手応えがあり、血が噴き出したようにも見せられる。

死んだようにもできるだろう。

世界のあらゆる場所をその場に造り、操ることができるだろう。

だが、それはそこにあつて、そこにない。

感触のある残像、目に見える夢。

それは神以上に神懸かった、馬鹿馬鹿しすぎるほどの無敵状態。

しかし、同時に自分を知り尽くさねばできない事だ。

科学や物理というものは、人間達の常識だ。

不可能とは人間のものだ。しかし神とは、悪魔とは、そういうたものを超越した能力を持ち、人はそれを『奇跡』と呼ぶ。

崇める。

我々にとって奇跡は日常であり、個々の能力。使い方を知れば、知恵と工夫によって、新たな奇跡はいくらでも形作られる。

だが、神も悪魔もそこで終わる。

彼ら自身が森羅万象そのものであり、それ以上のものなど無いからだ。

俺達はそうやって今まで生きてきた。

百年、千年と生かされてきたんだ。

意味も理由も分からないまま、神として。

お前は俺達以上に神で悪魔だ。

考える。工夫する。苦しみ抜いて、知恵を搾る。

主が与えたもうた能力で、神の領域に近付こうとする。

もがき足掻いてたどり着いた、その境地は素晴らしい。素敵だ！」

「べた褒めじゃないか。気持ち悪いな」

「当たり前だろう？ 俺の、俺達の宿敵は、愚かな雑魚じゃ困るんだよ。」

誰もが恐れ、怯え、震えるような主の問題作。

だからこそ、そんな奴が現れたなら、何があっても、殺してやらなきゃいけないじゃないか！」

そう言つて、ラーフラは目の前のニコラを斬り捨てる。

今度は逃げも隠れもしない。

あっさりと袈裟懸けに両断され、ご丁寧にも血を吹き出して倒れてしまう。

だが、その顔は笑っていた。

「悪趣味だねえ、神様って」

「死んでも死なないお前の方が、よっぽど悪趣味だろう？」

「はははっ、そうかも」

「いいから死ねよ、グロ野郎」

それが塵になるまで、何千、何万、何億回と刀を振る。

塵になれ！

塵になれ！

声にならない叫び声。

腹立たしかった。

許せなかった。

ほんの一瞬でも、サンタクロースに怯えを抱いた自分を、そのまま切り刻んでしまいたい。

ニコラという存在は、自分の恥の具現化だ。

それが光の粒子であって、ただの幻影であると見抜けなかった自分の愚かさ。

慎重にと何度も言っていたはずの自分が、誰よりも慢心し、おころぎ奢っていたのだ。

「その辺にしておけよ、お前らしくもない」

「はあっ、はあっ、畜生！ 畜生！ 舐めやがって！ 俺を舐めやがって！」

「大丈夫だ。奴もお前と同じくらい慢心しているさ」

「どういう意味だ？」

「戦いたかったんだよ。自分の能力を試し、自慢したかった。

神霊の中でもトップに近い俺達と、一対一でやり合ってみたかったんだ。

本当に冷静で狡猾な奴なら、こんな真似はしない。

海中に侵入ルートを残したのも、俺達をわざわざ艦内に入れたのも、奴は自分が勝てるという確信があってやってるんだ」

「そうだな……確かに……」

「気付かせてやろう。サンタクローズ風情に何ができるか。勝てる戦で勝とうとせず、手加減をした事の愚かさを」

「くくく……ははははっ……ベルが俺に説教をするなんてなあ……」

「面白いだろう？」

「ああ、ホネホネトリオのコントよりも、お前の方がセンスあるよ」「悪いけど、それは無いなあ」

ニヤリと笑い合う二人。

ラーフラはサーベルを鞘に収めると、本体の居る部屋を探して歩き始めた。

超弩級要塞の探検ゲームが始まりを告げる。

ゴールは中央司令室。クリア条件は花巻ニコラの殺害。

そして六道炎夜にお仕置きだ。

## 第18章 六道炎夜、女の覚悟

中央司令室で、のんびりときな粉餅を食べながら、ニコラは茶をすすっている。

元々光を物質化できるかも知れないことを知ったのは、テレビでやっていた科学番組のおかげだった。

児童養護施設で、小学校を卒業する事もなくサンタになってしまったニコラだが、学ぶ事を辞めようと思った事は無かった。

むしろ、学が無い事を真摯に受け止めて、時にはナナが呆れる程、熱心に勉強をしていたのだ。

そんな中で、ある日彼は、自分の出す事ができる力、サンタクロース波とは何なのかと考えていた時、それは光であるという結論に達したのだ。

やがて、沢山のプレゼントを配るのに、自分の分身を作ってみたり、星も出ない漆黒の闇夜に星空を作ったり、様々な使い方ができる事を学んだのだ。

難しい事は分からない。

現代の科学や物理学のルールなど完全無視しているだろう。

だが、神と等しい奇跡を起こす能力。

それを出来ることは出来るのだから、使わない手は無い。

そして、今回それを初めて戦闘に応用したのだ。

「きな粉餅って美味しいね。私、地獄ではこんなもの、食べたこと無かったよ」

「いつも地獄ではどんなものを食べてたの？」

「地獄トカゲの唐揚げとか、火食い鳥のスープとか、どれもこれも美味しくないの。」

あ、でも血の池印のトマトジュースだけは、天界や魔界に輸出されるくらい美味しいんだよ！」

「ああ、さっきドラコちゃんに渡したやつだね」



「うん、ナナにもあげるよ。ほら！」

ニコラの横で、ナナと炎夜もまるで緊張感の無い会話をしている。だが、狂気と死を隣り合わせにしている今だからこそ、逆に日常的に振る舞いたいと思う。

それは、誰もが胸に共有していた。

もちろん、いつまでも平和に構えているわけにもいかない。

たった今、罨として作っておいた二人の分身が殺された。

いつか全てのからくりは、彼らも気付くかも知れない。

そうすれば、全てのたくらみは水の泡だ。

「ねえニコラ、そろそろ天界テレビを見て於いた方がいいんじゃない？」

「ああ、そうだな」

スイッチを入れると、ちょうど良く女天使のキャスターがニュースを読み上げていた。

「臨時ニュースです。」

天界、魔界の双方は、森羅万象安全保障理事会の要請により、サンタクローズの花巻ニコラの宣戦布告に答える形で軍を派遣し、その数は双方二百万ずつ、計四百万という、史上最大規模の派兵になる模様です。

これについては、安全保障理事会の議員達からも、やりすぎではないかという声も一部から上がっており、天界、魔界を問わず物議を醸しているようです。

また、魔界の副帝ベルゼブ様のご息、ベル様。

お釈迦様のご息、ラーフラ様が、サンタクローズの本拠地に対し、奇襲を掛けており――

「あれ？ 炎夜の名前が呼ばれないね」

「ああ、きつと私の帰りが遅くなってるだけだと思われてるのよ。」

チヨイワル女の代表として、少しくらい帰宅が遅かったり、外泊しても平気だしね」

炎夜が得意顔で、少し自慢げに言ったところで、ニュースが切り

替わる。

「さて、迷子のお知らせです。

地獄在住の閻魔大王の娘、六道炎夜ちゃん（一五〇歳）を見かけた方は、天界テレビまでご連絡下さい」

「……………」

誰もが言葉を失う。ベルとラーフラには『様』が付くのに対し、炎夜だけは『ちゃん』付けになっているというのも痛い。

その上迷子扱い。

だが、何か言うとかわいそうなので、ナナが急いでチャンネルを変えた。

「あのキャスター、いつか地獄に落としてやる……………」

「いや、ただでさえ騒ぎが大きくなっていくのに、炎夜がこっちに居ると分かれば、火に油を注ぐようなものだろう。

だったら、迷子扱いを受けてる方がまだマシじゃないかな」

「ダーリンがそう言うならっ」

「キシヤーツ！」

抱きつく炎夜と、威嚇する毒蛇のようなナナ。

そこにあるのは、ただの平和な茶の間の風景。

それは本当に緊張感が無い。

だが、ニュースが事実なら、今頃四百万の軍勢が自分達の為に出されているはずだ。

その数は、世界有数の大都市の人数と肩を並べるものだ。

指揮官として、二つの世界からはそれぞれ有力な神霊、魔物が出ているに違いない。

本気で正面からやり合えば、ニコラ達はひとたまりもないだろう。彼は決して、蛮勇を是と思っている訳ではない。

たった一つ、天より垂れる細い細い、勝利に繋がる蜘蛛の糸に掴まり、慎重に上を目指して昇ろうとしているのだ。

この世で最も強いものは数。

数字とは冷静で残酷で無機的だ。

そして、数は力を最も正確に表している。

戦力差という数に於いて、いくら一騎当千のつわもの強者とは言え、ニコラ達が相手にできる兵力には限りがある。

『勝てますよ、ニコラ』

「プレゼント袋……」

『世界中の子供達は、あなたを求めている。それは奇跡を起こすはず』

「ああ、そうだな」

座椅子の背もたれを少し倒し、目を閉じる。

まぶたの裏に浮かぶのは、たくさんの子供達が見せてくれた笑顔。ニコラは自分がサンタクロースをしていたことに、一片の後悔も無い。それを今後も見る為なら、この戦いにも意味があるだろう。

血まみれだって、汚れていたって、守らなきゃいけないものがある。

戦いの果てにしか見えないことや、分からないことがある。

初代サンタクロースは、最後の最後でたくさんプレゼントをしてくれたのだ。

そう、これはプレゼント。天が与えたラストプレゼント。

「ニコラ、別の場所から侵入者が二人増えたわ」

モニターを見た炎夜が、不意に真面目な顔になる。

「え？ ベルとラーフラじゃなくて？」

「首無し騎士のデュラハント、釈迦の十六羅漢のトップ、スプーティ  
イ  
」

言いながら、炎夜は立ち上がり、身支度を始める。

赤蝶石の髪飾りを着け、星くずをあしらった、黒いドレスに身を包む。

それは地獄に於いて、死を覚悟した戦場に臨む際に着る喪服。

戦う相手に対する、最大の礼儀だ。

「死ぬ気か？」

「分からない。けれど、彼とは一度、小細工無しでやり合いたかつ

たの」

「スプーティって奴のことか」

その言葉に、炎夜は小さく頷く。

瞳に宿っているのは、固い決意の光。

「あいつを殺すのは私。それを魔界の掃除屋とか呼ばれてる、首無し女なんかにくれてやるわけにはいかない」

姿見の前に立ち、くるりと回って見せる。

その姿は少女のものではなく、死を覚悟した戦士だ。

最後に自らの姿を確認し、その瞳に焼き付ける。

「君も不器用な女なんだな」

「器用に生きられる人なんて、魅力も無いと思わない？」

「ああ、そうだな」

ニコラは苦笑する。

彼女の言う通り、器用な奴なんてここにはいない。

居るのはただ、不器用で救いようが無い、最高のろくでなし。

これからまさに死のうとする、くたばり損ないばかりだ。

「ナナさん、もしも私が死んだら、彼のこと、宜しくね」

「生きて帰ってよ」

「そうね。帰れるといいな」

「いきなり私達の心に入ってきて、勝手に出ていくなんで、わがままじゃない」

「私は猫みたいなものだから」

精一杯の笑みを浮かべる。

だが、ナナは笑えない。

「そんな顔しないで。あなたは私のライバルでしょう？」

「まだ認めてあげない。死んじやうような女の子なんて、私のライバルじゃないもん」

「じゃあ、ライバルになれるように頑張るわ」

「うん、なってよ」

「ありがとうナナ。サンタと同じくらい、あなたも素敵よ」

「戻ってきたら、もう一度言っただけいいな」

「残念ね、もう言っただけいいわ」

いたずらっぽく笑い、炎夜は背中を向ける。

もう振り返る事は無いだろう。

「いつてらっしやい」

「いつてきます」

その背中が、小さく震えている。

彼女を支配しているのは恐怖ではない。

喜びと絶望のない交ぜになった武者震いだ。

素晴らしい舞台。唯一無二の棺桶。

私は歌い、殺し合う。

誰にも見せたことが無い、黒い微笑みがこぼれた。

神も仏も関係ない。

復讐に燃える時、誰もが同じかお表情をするだろう。

仮面を脱ぎ去り、裸の心で斬り合おう。

肉を切り裂き血を吐いて、死ぬが死ぬまで殺し合おう。

殺して殺して殺し尽くして、二度と蘇らぬように。

## 第19章 死の意味、生の意味、それでも成し遂げたい事

サンタクローズの要塞の中、ベルとラーフラが死闘を繰り広げている真反対の方向で、密かにうごめく二つの影がある。

鎧騎士のデュラハンと、十六羅漢のスプーティだ。

「人間というのは凄いですね。こんなものを創造してしまうなんてまるで神だ」

「そうね」

そして訪れる沈黙。

さつきから、こんな事を何度繰り返しただろう。

デュラハン是不機嫌の極みになっていた。

いくら隠そうとしても、無表情で無愛想な態度となって、それは現れる。

ベルに付きまとう汚らしい害虫、そして将来のハルマゲドンの際には、怨敵となって自分達に刃を向けるであろう、将来の天界の有力議員。

釈迦の息子、ラーフラをこの手で始末できると思っていた。

だが、その企みは脆くも崩れ去ったのだ。

この仕事が無事に終われば、ベルと自分の関係は、ベルゼブブに正式に認めてもらえるはずだった。

それは幸せな二人の未来の為に。

将来の三千世界を統べる魔界の為に。

魔神はおるか、魔王にさえなれそうもないデュラハンにとって、これは自分がソロモン七二柱の悪魔達と肩を並べる為に、願ってもないチャンスだ。

「ご機嫌斜めですねえ、デュラハンさん？」

「デュラでいいわよ、スプーティ」

「別に仲良しでもないあなたの事を、呼び捨てになんてしたくありません」

その挑発に、さすがの彼女も怒りが込み上げる。

もう少して、剣を抜いて飛び掛かってしまふところだった。

だが、相手は天界一の剣聖と言われるスプーティだ。

自分を味方と思い、油断するだろうラーフラと違って、この男は私を敵と見ている。

しかも、腕は奴の方が二枚上と見ている。

剣を交えれば無事では済まないだろう。

死ねば自分に未来は無い。

そもそも、悪魔が死んだらどうなる？

悪魔には悪魔のあの世があるのか？

地獄は？ 天国は？ それとも無に還る？

考える程に恐ろしい。

恐怖感に潰れそうになる。

だが、所詮は兵卒上がりの一介の魔物の自分が、本当にベルと結ばれようと思うのなら、ここで功を上げるしかない。

スプーティを始末できれば、ラーフラを始末する事はもはや造作もない。

そして私は、魔界の辺境伯程度の地位はもらえるはずだ。

ああ、その柔らかい首を横一線にかっ切って

「私を殺したい。殺したくて仕方がない。」

けれど、剣聖と呼ばれる私を相手に、五体満足で居られる自信が無い」

「なっ?!」

「単に独り言ですよ。気になさらないで下さい」

にこにここと、まるでセールスマンのような造り笑顔をするスプーティ。

彼は今、この状況を心から楽しんでいた。

ラーフラを殺したい、現場上がり の女悪魔騎士。

無名だった彼女は、魔界で行われる、非公式の剣闘会で六六六人斬りを達成し、見事にその地位と名声を勝ち得たと聞いている。

いくら自分が剣を教えているラーフラと言えど、まだ彼は子供だ。親友であり副帝の息子、ベルの恋人と言うこともあり、時に油断もする。

その時こそ、この女は動くだろう。

そして、さも事故が起きたように見せかける。

なあに、方法はいくらでもある。

だが、自分がいる限り、彼女は殺意をおくびにも出さないだろう。チャンスはいくらでも訪れる。

もし自分とラーフラが死ねば、それは天界の大いなる損失。

将来の重大な禍根であり、師匠である釈迦を悲しみの底に突き落とす。

悲劇、それはあまりにも悲劇。

そんなことが許されるはずがない。

このスプーティの目が黒い間は、そんなことが許されてはならない。

正義は天界にあり。勝利は天界にあり。

悪魔の考える小賢しい策など、この手で全て根絶してくれる。

根絶やしにしてくれる。

不抜けた天界。墮落した天界。しかし、天界とは争いの場であつてはならない。

ましてやその頂点に立つ者の手は、悪魔共の薄汚い血に濡れてはならないのだ。

幾度となく偽りの聖戦を繰り返し、屍山血河の上にたたずみ、アーメンアーメンと喚き散らす奴らなど、天界には似合わない。

仏界こそ正義。仏界こそ至高。

ああ師匠、あなたこそ玉座に相応しい。

私はあなたの剣であり、あなたの盾だ。

考えれば考えるほど、心の中がいきり立つ。

恍惚として、歡喜の汁が溢れ出す。

「やけに嬉しそうね。これから殺し合いが始まるというのに」



「多分私は、あなたと同じような事を考えている」

「どうかしら？」

「でも、一つだけ違うことがあるとするならば、私はこの場であな  
たを殺したりはしない」

「ふうん……」

疑わしそうな目を向けるデュラハンだが、スプーティは静かに説  
明する。

「私に与えられた目的は、ベル様とラーフラ様を取り戻し、帰還す  
ることにあります。」

あなたと剣を交えるには、まだ早過ぎるんですよ」

「いつか機会があれば殺すってことでしょ」

「そうですね」

にっこりと笑うスプーティ。

だが、馬鹿正直なそのやり方は、嫌いではない。

「さて、お喋りもいいですが、早く二人を見つけて合流しましょう」  
「そうね。多分ベルは、お父様であるベルゼブ様が動かない事に  
しびれを切らして、それで出陣したと思う。」

天界と魔界がこれほどの大軍を出したと知れば、指揮官として戻  
つてくれるはず」

「ラーフラも似たような理由でしょうねえ……」

ぼりぼりと頭を掻き、慎重に目の前のドアを開ける。  
相変わらず誰も居ない。

その事に安心し、先に進もうとしたその時だった。

「久しぶりねスプーティ」

「おや、その声は炎夜様？」

振り返ると、そこには無表情でたたずむ炎夜が居た。

まるで気配を感じさせずに背後を取られた事に、スプーティは背  
筋につららが刺さったような衝撃を受ける。

だが、そんな事は悟らせぬよう、しれっと返事をした。  
冷静さを失わない。

それは戦いに於いて、最も求められる事だ。

そして、炎夜もまた、淡々と彼らに喋り掛ける。

「いけしゃあしゃあと、どの面を下げて私の前に出てきたのかしら」

「お言葉ですが、今はあなたが、勝手に私の前に現れたんでしょう？」

「うるさい！ 口を慎め下郎が！」

言っている事が支離滅裂だが、炎夜はその事に気付いていない。

不倶戴天の敵を前にして、彼女は怒りに打ち震えていた。

骨の髄まで恨みを抱え、殺したい相手を前にして、冷静で居られるほど彼女は強くない。

だが、それでも炎夜は自分なりに、必死で落ち着こうとし、呼吸を整えようとしている。

ひゅうひゅうと喉が鳴り、口の中が渴く。

熱くなればなるほど勝算は減るのに、心の中は黒い炎が燃え盛る。

「お知り合いかしら」

「閻魔大王の一人娘、あらゆる熱を操る獄炎術の使い手、六道炎夜様ですよ」

「天上界の者ね。あなたもベルとラーフラの奪還に派遣されてきたの？」

「残念、私はあなた達を殺しに来た」

炎夜は言って、ドレスの懐から何かを取り出す。

その手に持っているのは、あからさまにプラスチックの玩具と分かる、半透明の黄色い水鉄砲だ。

きよとんとするデュラハンに対し、スプーティは冷静に事の成り行きを見ている。

「お嬢ちゃん、遊びに来たの？」

「もう一度言っただけいい？ 私はあなた達を殺しに来た」

「彼女は私のお客様だよ。君は関係ない」

スプーティがずいっと前に出て、腕でデュラハンの前を遮る。

だが、置いてきぼりにされているような状況に、デュラハン是不

愉快さを隠せない。

「待ちなさいよ。水鉄砲を持った天界の女なんかには、私達の仕事の邪魔はさせないわ」

「そうですわねえ。あなたは一心、今は私と共同戦線を張っているんですよ」

「ええ、だからあなたの敵は私の敵。それでどうかしら？」

「いいでしょう。けれど、彼女を殺してはいけませんからね」

「なかなか難しいルールだわ。けれど、確かに閻魔の一人娘であれば、殺すわけにはいかない」

「それを聞いて、安心しました」

ケンカは一時休戦。今は手を組み、目の前の障害に立ち向かわねばならない。

だが、そんな二人の姿を見て、炎夜はいらだちを募らせていく。

「女を口説くのと、私と殺し合うのと、どっちが大事よスプーティ！」

「一つ聞かせて下さい。なぜあなたが、私を殺そうとするんです？ その問いかけに、炎夜は愕然となる。

開いた口が塞がらないというのを、初めて体で感じた瞬間だった。「覚えていないの?! このクス野郎! やっぱり今すぐ私が殺す！」

ぴゅつと水が飛び出した刹那、それはスプーティの目の前で、バスケツトボール大の爆発を起こす。

すんでの所で体を逸らしたが、食らえば顔に大やけどを負っていた事だろう。

「水蒸気爆発の応用ですね。人間の科学を勉強していたなんて、お父様もお喜びでしょう」

「そのお父様を……お父様をあんな目に遭わせて……どの口がそんな事を言ってるのよおおおおおお！」

手、足、そして心臓に向けて、次々と水は打ち出される。

だが、それを全て紙一重で交わしながら、スプーティは踊るよう

に後退する。

「何の事がさっぱり分かりませんね。私は仏界の者。」

仕えているのは師匠の釈迦ですが、閻魔大王もまた、私の上司に当たります」

「父はお前の謀略によって、全てを失った！ 大伽藍だいがらんの乱の裏切り者はお前だ！」

「炎夜ちゃん。仲間割れは醜いわ」

いつの間にか背後に回り込んだデュラは、彼女の喉元に刀を突きつける。

だが、地面を蹴って飛び上がり、炎夜は天井にあったパイプにぶら下がり、壁に付いているノズルに手を付ける。

「こんな奴は仲間じゃないツツツツ！」

それはスプリングクラーのスイッチだった。

天井から降り注ぐ水は、室内の全てを濡らし尽くす。

デュラは危険を察知したものの、逃げるような時間は無い。

炎夜は笑みを浮かべる。

刺し違える事にはなるが、これで確実に勝利を手にしたのだ。

だが、熱を発しようとしたその瞬間、横つ面に強烈な跳び蹴りを食らう。

そのまま炎夜の体は飛ばされ、猛スピードで壁に激突する。

全身の骨にひびが入り、気を失いそうになる。もはや立つ事さえ、気力頼みの状態だ。

だが、この程度で負けるわけにはいかない。

額から血を流しながら、よろよろと炎夜は立ち上がる。

「けほっ……はあっ、はあっ……スプーティ！ スプーティイイイ  
イイイツツツツツツツツ！」

「女の子に何度も名前を呼ばれるなんて、嬉しいですねえ」

「殺す！ 殺す！ お前だけは！ お前だけは私が殺し尽くしてやる！」

「嫌いな男と無理心中なんて、たぶん若い子の間にははや流行りま

せんよ」

「大伽藍の乱の恨み！ 忘れないぞ！

私は忘れないッ！ 地獄に！ お前を地獄の底に落としてやる！」  
満身創痍となりながらも、熱を貯めようと、拳に力を込める。

スプリングラーは止められたが、周囲は既に水浸しだ。

もし彼が逃げようとしたなら、すぐにでも爆発を起こすことができる環境は整った。

だが、約束は守れそうにない。

生きて帰る事は、どうやら叶わぬ夢らしい。

ニコラ、世界一のサンタクロースだったよ。

ナナ、あなたは彼を支えてあげて。

一足お先に私だけ、本当の地獄に旅立ってるから。

口の端だけで笑みを作り、倒れる前に熱を入れようとしたその時、  
スプーティはゆっくりと語り始める。

「デユラハンさんはご存知無いでしょう。大伽藍の乱というものを」

「知らないわ。天界の事なんて、殺意以外に興味が無い」

「あはははっ、素直なレディって好きですよ。でも、それが一般的な悪魔でしょう」

「喋るな！ 今からお前は死ぬ！ 私と一緒に灰になるんだッ！」

「じゃあ、遺言代わりに聞いて下さいよ。大伽藍の乱の事を」

## 第20章 大伽藍の乱の真相

大伽藍の乱、それは閻魔大王が天界の全権を掌握するため、クーデターを図ろうとしたと言われ、スプーティがこれを未然に阻止した事件の事を言う。

閻魔大王が当時持っていた兵力は十万。

だが、天界全土で四百万の兵があることを考えれば、これは決して多いとは言えない。

むしろ、スプーティは同じ数の兵を、当時から統べていた。

天界と魔界は既に和平が為されており、戦争とはおよそ無縁な日々が続いている。

そんな中、太平の世を波乱に導くような閻魔大王の叛乱。

それは青天の霹靂となつて、天界全土を駆けめぐった。

理由はこうだ。

不拔けた天界は、このままでは魔界の勢力に負けてしまう。

仏界には不動明王のような怒りの神もあり、武神と呼ばれる者も多く存在する。

イエスを筆頭としたキリスト諸派の軟弱な外交は内憂外患を招く国賊の行為である。

これを肅正し、肅清せねばならない。

それゆえ、自分は立ち上がる。地獄を統べる大王として、天界に對し反旗を翻すものなりと。

だが、十万の兵だけでは当然、すぐに鎮圧されてしまう。

そんなことは火を見るよりも明らかかな事だ。

そこで、彼は密かに盟約を交わしていた。

釈迦と共に、新たな天界の秩序を築く。

二頭体制による東方仏教の絶対支配だ。

その宣戦布告が為されたならば、主はイエスを筆頭とした討伐軍を形成し、釈迦もその戦線に加わる。

主への忠誠を試される、それは踏み絵と同じ行為だ。  
まさに一触即発でハルマゲドンへと繋がりがかねない、一大内乱となるはずだった。

その調整役に立っていたのは、釈迦の直参として筆頭を務めるスプーティ。

彼が閻魔大王と釈迦の間を取り持つ、密使として暗躍していた。  
しかし、スプーティはその最中にこの事実を主に密告し、閻魔大王の企みは事前に防がれる事となる。

そして、閻魔の処罰はスプーティに委ねられる事となった。

だが、スプーティはこれを不問とし、何らの罰を与えはせず、その存在は公式な記録からも削除されることとなった。

以後、大伽藍の乱は天界の噂話であり、都市伝説。

そして、天界最大のタブーとして、神々の間に語り継がれる事となったのだ。

だが、それ以後の閻魔大王は表に出る事を嫌うようになり、抜け殻とまで揶揄されるようになった。

隠然たる権力は固持したものの、地獄に関わる全ての執務は娘の炎夜が担当するようになり、森羅万象国際会議などの重要な席に於いても、彼女が代理出席をとるような形となった。

汚い閻魔大王。

主に背いた造反者。

売国奴。

様々なレッテルが閻魔に張られるが、それはごく一部のものだ。

そもそも、記録がほとんど残っていない為、何が真実で、何が起きていたのか、その一部始終を知る者はほとんど無い。

ただ、事件後から急速に釈迦の一派は勢力を増し、お釈迦様お供え思いやり予算の計上など、黒い法案もすんなりと通るようになってる。

そして、スプーティの天界に於ける序列もまた、凄まじい速さで上がっていったのだ。

閻魔大王を売って地位を手に入れたスプーティ。

それ以後、彼女はスプーティを見るたびに殺意が湧いていた。しかし、そんなことはおくびにも出さない。

にこにこして笑みを絶やさず、地獄のプリンセスとしてあるように振る舞い、釈迦やイエスとも積極的に外交を行った。

地獄という自治区の顔役として、閻魔大王以上に閻魔らしく振る舞い、その発言力を高めてきた。

それはひとえに、いつかスプーティに復讐をするためだ。

閻魔は何一つ語ろうとしない。

だが、彼女は閻魔が抱える深い悲しみと絶望を、常にそばで見ってきた。

恨めしかろう、悔しかろうその心を、誰よりも感じてきたのだ。

「私が裏切り、大伽藍の乱は失敗に終わった。そう思っているでしょう?」

「当然でしょう? 返してよ、偉大な父を! 尊厳に満ちた父を! 地獄の象徴だった父を! 返しなさいよ! 裏切り者のクズ野郎!」

「私はね、大伽藍の乱には賛成だったんです。

閻魔様がおっしゃる事は、どれもこれもが耳に痛い事ばかりだった。

そして我々仏界は、イエスの一派と比べて、どんどん力が弱まっ  
ていく。

このままでは遠からず、仏界は全て、イエスの派閥として取り込まれてしまうという状態になっており、師匠のお釈迦様も、言葉には出さないながらも、少なからず心配をしていました」

「だったらなぜ?! なぜあなたは裏切ったの?!」

「裏切らざるを得なかったんですよ。

なぜなら、こうなるようにし向けたのは、閻魔大王様の方から提案されたことですから」



「父の方から？ わざわざこんな事になりたいって言ったと言つもの？  
この上なく苦しい言い逃れね！」

「ねえ炎夜さん、これは私の独り言です。」

そしてデュラハンさん、あなたにも思い当たる事があるかも知れません。

けれども、黙って聞き流して下さい。

これは絶対に、天界、魔界に於ける最大のタブーなのですから」

「もったいぶってないで、早く言いなさいよ。聞いたら殺してやるから！」

「主は、サタンは、実は存在しない架空の存在ではないか？ とうことです」

スプーティの言葉に、辺りに流れる空気が凍り付く。

だが、ぼたぼたと水滴が垂れる音だけが、周囲の時間は動いていると主張する。

デュラハンは言葉を探し、それでも何も言えず、苦々しい表情を浮かべて足下を見る。

天界、魔界の権力中枢に近付けば近付くほど、主やサタンとの距離は縮まる。

そのはずだが、逆にその距離は遠く感じる事になるのだ。

どちらの世界もナンバー2であるイエスとベルゼブブの二人しか、目通りは叶わない。

それも、謁見する際は必ず一人で、従者も付けずに部屋に入っていくという。

誰の目から見ても怪しい。

だが、主とサタンは絶対の存在だ。

イエスとベルゼブブは、それぞれに言葉を託され、配下の神々や魔族達に命令をする。

しかし、それに疑問を呈する事などあつてはならない。

もし誰かが疑問を口にすれば、天界も魔界も、その体制の全てが揺らぎ、場合によっては崩壊をしかねない。

だからこそ、中枢に近付けば近付くほど、彼らは主やサタンへの忠誠を言葉として口にしながら。

部下達にも、その絶対性を厳しく説くのだ。

「閻魔大王様は、そのタブーについて、釈迦に相談したいと私に申し出ました。」

もし存在していないのであれば、その事を公にした上で、新体制を構築すべきではないか？

仏界としてどうか、そんな小さな話じゃない。

天界全体として、これは向き合うべき大問題だ。

今こそ真実を明らかにすることで、いつか来るハルマゲドンの前に、私達は魔界よりも一歩先を行くことができるのではないだろうか？

大王様はどのように考えたのです」

「父上……そんな危険な事を……だったらなぜ、なぜあなたは父を裏切ったの？」

天界の為を思うなら、なぜ父上を売り渡したの?!」

食い下がる炎夜に、溜息混じりでスプーティは答える。

「私が密告なんてするはずがありません。」

その言葉は、既にイエスの耳に入っていた。

私が師匠である釈迦に伝える、その前に。

そしてイエスは私を呼び出し、言ったのです。

この叛乱行為について、主は不問に付すとおっしゃっている。

しかし、まだなお逆らう事を続けるならば、釈迦並びに閻魔大王の一派を、全て根絶やしにせねばならない。

その為に、仏界を除く天界の全てが軍をさし向けるだろうと。

それが主の言葉などではなく、イエスの独断だろう事は私にも分かりました。

しかし、それは主の言葉、主のご意向なのです。

逆らう事などできません。

そして、私からその言葉を聞いた閻魔大王様は、自ら決断され、

言われるがままに権力の座を追放される事となりました。

そんな茶番劇を仕立てたのは、この私です。

結果として天界を救った英雄と言われ、名声は上がりました。けれども、その代償はあまりにも大きい。

せめてもの償いに、私はその流れを利用して、師匠である釈迦と、仏界の地位を向上する事に貢献しました。

しかし、あなたと同じで一部の者からは、売国奴というレッテルを張られたのです。

今もたまに、脅迫状や怪文書が私の元に届く事がありますよ。

特に地獄の鬼達からと思しきものが、ね」

苦笑いをして、彼はひざまずく。

そして、そのまま深々と頭を下げた。

「あなたをかように追い込まなければ、私の話を聞いて下さらなかったことでしょう。」

そして、私はあなたに手を挙げた。

あなたを傷付けた。

理由の如何を問わず、その罪、万死に値すると存じます。

私は仏法に帰依する者。

私を守るべきものは仏法であり、その守護者たる釈迦であり、菩薩であり、閻魔大王様です。

そんな閻魔大王様のご令嬢、六道炎夜様を手に掛けた。

私は償いようもない咎人です。

こうして真実を告げた以上、私の役目は終わりました。

どうか首を刎ねるなり、地獄の業火で焼き殺すなり、炎夜様の思われるように、この私を裁いて下さい」

「スプーティ……あなた……」

「本当に……申し……申し訳つ……ありませんでした……」

水滴とは違う、暖かみを帯びた液体がスプーティの頬を伝つ。罪を犯した者の流す、悔恨の涙。

だが、そんなものを流す必要があるだろうか。

今、炎夜の目の前で膝を屈している男は、三千世界の誰よりも忠義者なのだ。

炎夜もまた膝を突き、その頬を伝う涙を指ですくい取る。

「顔を上げなさい、スプーティ。あなたは仏界を救った英雄です。この六道炎夜は、あなたのような忠義者を責め立てる事などありません」

「炎夜様……」

自分よりも二回りも大きいスプーティを抱きしめ、濡れた頭の髪を撫でる。

それは赦した。

主の居ない世界を生きる神霊。

そんな彼を許してやれるのは、閻魔大王の娘である、自分の務めだ。

だが、その横で少しだけばつが悪そうにしている女悪魔が一人。

デュラハンだ。

サタンが居ない。

薄々気付いていた事を、ついにはつきりと言葉にされてしまった。もちろんそれはオフレコであり、単なる彼の独り言だ。

だが、心の中には消えない傷として、それは残ってしまうだろう。

「デュラハン、ありがとう」

「な、何よいきなり」

「私と炎夜様のやりとりを、邪魔立てもせず、黙って見ていてくれただろう。」

君は無防備な私や炎夜様を、その剣で斬り殺す事もできたはずだ」

「別に……私とあなたは今、お互いに仕事を遂行しなきゃいけないし……」

「悪魔にだって思いやりや愛があることは、私達はちゃんと知っています」

「とっ、当然でしょう？ 悪魔をなんだと思ってるのよ！」

「でも、いつかハルマゲドンになったなら、私は炎夜様や他の天界

の人々を守るため、あなたを容赦なく斬り捨てる事でしょう。

だからあなたも、その時は全力で戦って下さい」

「そうね。涙で顔をぐしゃぐしゃにしてるあなたを殺すより、よっぽど面白そうね」

「それでいいんです。それでこそ悪魔です」

スプーティは立ち上がり、右手を差し出す。

最初、何をすればいいか分からず、きよとんとするが、すぐにデュラハンも右手を出す。

天界の人間と握手をするなど、生まれて初めての事だった。

そして、それを自然に行ってしまうという、自分の甘さが少し気恥ずかしい。

だが、スプーティはそんな自分に、笑顔を返す。

「あなたとは良い仕事が、そして良い殺し合いができそうです」

「当然よ。私は剣闘会で無敗のデュラハンなんだから」

「これからは、デュラって呼ばせてもらいます」

「え？ ああ、いいわよ」

焦ったように返事をする。

その仕草はどこか少女っぽくて、微笑ましいとスプーティは思う。だが、そんな平和な時間を過ごしてられるのも今のうちだけだ。任務が完了するまで、一時として気を抜く事はできないだろう。

「炎夜様、どうか天界にお帰り下さい。この件は不問に致します」

「あのね、スプーティの言う事でも、それだけは聞けないわ」

「わがままをおっしゃらないで下さい。」

ただでさえラーフラ様とベル様が居なくなつて、天界と魔界はちよつとした騒ぎになっているんです。

この上、炎夜様がサンタの側に付いている等と思われれば、混乱は深まる一方です」

「これは私とあなたのハルマゲドンよ。」

次に会うときは全力で戦いましょう、スプーティ」

ふわりと浮かび上がると、炎夜は壁の中に消えていく。

だが、その姿を呆然として見守る事しかできない。

物体をすり抜ける能力など、炎夜は持っていないのだ。  
なぜそんなことができるのだろう？

サンタが能力を与えたのか？

「ちよつと、ぼんやりしてる場合じゃないでしょう？」

捕まえるターゲットが増えたんだから、もっと気合いを入れない  
と」

「そうですね、申し訳ない。急ぎましょう」

ぱしりと自分で頬を叩き、気合いを入れ直す。

デュラの言うとおり、炎夜も連れて帰るといふ仕事が増えたのだ。  
腰に付けた刀の位置を直すと、スプーティは先頭に立って走り出  
す。

ここは敵地の中枢部、一時も気を抜いてはいけない。

## 第21章 神生ゲームの行く末

黄泉比良坂に陣を張ったはいいが、そのまま天界、魔界共に膠着状態が続いている。

ベルとラーフラが中に居る間は、うかつな手出しはできない。

仕方なく、釈迦達は本陣の中で、ロングヒットを記録しているボードゲーム、神生ゲームをプレイしていた。

「あつ、子供が産まれたので私に五十万へブン払って下さい」

「またイエス！

またですか！

あなた子だくさん過ぎですよ！」

「ふあふあふあ、ワシはまだまだ蓄えがあるわい」

「……………」

その光景は、まるで友人の家に集まった仲良しの四人組というようにも見える。

だが、ベルゼブブとアスタロトに付き従って、陣営に足を運んだ魔王達は、神霊達に囲まれて、ただならぬ殺気を放っている。

居心地という意味では、この上なく最悪だ。

一方で、それに対抗するように、天使兵達も余興に剣舞を見せるなどして、魔王達にその力を見せ付けている。

「ところでイエスよ、森羅万象国際会議の席以外で、こうして膝を突き合わせるのはいかなり久しぶりの事じゃのう」

「そうですね。千年以上前に、悪魔達との緊張感がかなり高まっていた、和平協定をするために、地獄の赤銅池のほとりで会談して以来になりますかな」

あごひげを指で遊ばせながら、ベルゼブブは釈迦の方を見る。

にたりと笑うその顔に、釈迦は気まずそうに目を逸らした。

「ワシとして提案したいのじゃが、サンタクローズの裁判はぜひ、我が魔界にて行わせていたただきたいのじゃが、どうじゃろう？」

「お断りします。サンタクロースは元々天界の管轄。

彼の裁きは我々の手で行わせて頂きます」

「じゃがのう、大伽藍の乱などで、天界は少々信用を失っている。違いますかな」

その言葉に、イエスの顔がこわばり、釈迦は見る見る血の気が引いていく。

なぜ今この場でその単語が出る？

喉まで出かかると言葉がぐっと飲み込み、再び笑みを浮かべるイエスと釈迦。

天界最大のタブーは、各種メディアに対し、第一級の箝口令が敷かれている。

例えうわさ話でもそれを口にすれば、たちまち守護天使が現れて事情聴取をされ、最低一世紀の禁固刑が言い渡される事になる。

情報統制は完璧のはずだった。

「何の事でしょう？」

我が天界史には、そのような単語は載っていません」

「おやおや、それは失礼しましたのう。」

「じゃが、地獄では閻魔大王が蟄居ちつきよも同然の状態と聞き及んでいましたので。なあ、アスタロト？」

彼は無言でこくりと頷く。

こういう感情を見せないタイプが、一番やりづらい。

イエスはいらだちを極力見せないようにして、グラスのワインに口を付ける。

「ベルゼブブさんは何か勘違いしておられるのではないのでしょうか？

そもそも地獄は天界です。

内政干渉は慎んでいただきたい」

「しかし、地獄は魔界と最も近い場所にあり、交流も活発ですじゃ。だから例えば、サンタの裁きは閻魔大王に任せるとか、いかがか  
のう？」

「サンタの裁きを閻魔大王に任せるとか、馬鹿な！」



勢い良く立ち上がると、今までプレイしていたゲームは丸ごとひっくり返る。

だが、誰もその事を気に止めようとはしない。

あの冷静なイエスが、これほどまでにうるたえているにも関わらず、だ。

もし自分達までが動揺すれば、魔界にさらなる付け入る隙を与えてしまう。

唇を軽く噛みしめ、拳を握りしめて事の成り行きを見守る天使兵達。

そして、魔族達はさも面白そうに、ニヤニヤと表情だけで笑う。

「イエス、ちよつと落ち着いて……」

「我が方には正義の女神、ユステイティアがいる！」

彼女は法の番人にして、全てに平等な裁きを下す者だ！」

「ユステイティアなら良くて、閻魔大王に任せられない理由でもあるのですかな？」

「うっ……それは……」

露骨過ぎるまでの墓穴の掘り方に、釈迦は思わず眉をひそめて俯く。

イエスの最近にして最大の汚点、大伽藍の乱という単語に、彼は必要以上に反応している。

天界で、主に次ぐ権力者たるイエス。

だが、それは大伽藍の乱で大きく揺らいだ。

さすがの鈍い釈迦でも、薄々は気付いていたが、秩序を優先するならば、事を荒立てる必要は無いと思い、口には無かった。

しかし、もしも今、閻魔大王が表舞台に立つような事があれば、どんな波乱が起こるだろうか？

それは想像もできない。

「閻魔大王の裁きが嫌ならば、こうしましょう。」

先にサンタクローヌを捕まえた方が、彼を裁く権利がある。いかげじやろう。

これならば、公明正大ではありませんかな？」

してやったりといった顔をするベルゼブブを援護するように、アスタロトも口を開く。

「ベルゼブブ様のおっしゃるとおりかと存じます」

「いいでしょう！」

その条件で構いません、ねえ仏陀？」

「え？ あ、はあ。」

イエスが良いと言うのなら、私も構いませんが……」

その返事を聞いた瞬間、ベルゼブブの口は耳まで裂けて笑った。ギザギザの歯を剥き出しにして、嬉しそうに何度も頷く。

「聞いたか？ 聞いたか？ 聞いたか？」

聞いたな？ なあアスタロト？ 聞いたなあ？」

「はい、イエス様がおっしゃる言葉、しかと耳に刻みました」

「これほどたくさんのお天使兵と魔族達が証言者なのじゃから。」

後で撤回など、許される事ではありませんが、宜しいんですねあ？」

「当たり前でしょう？ イエスが嘘を吐くなどあり得ない！」

セラフィム ケルビム スローンズ  
熾天使も智天使も座天使も今、この場で私達の会話を聞いているのですよ？

ねえ、そうでしょう天使達よ！」

四方を囲むざわめきの中から、はいという声がいくつも上がる。

イエスはベルゼブブ達の方を向き直り、テーブルに手を突いて言い放つ。

「サンタクローヌを先に捕らえた者が裁く権利を持つ！」

我々天界は、総力を挙げて彼を捕獲します！」

「なあイエス様？」

例えばその際、うっかり殺してしまったとしても、問題は無いよなあ？」

じゅるりと長い舌を出し、口の回りを舐め回す。

ベルゼブブもまた、その熱気に興奮を隠せなくなっている。

「死んでいようが生きていようが構わないでしょう。」

私は構わない。仏陀よ、どうですか？」

「えーっと……ですからまあ、イエスが良いのならば別に……」  
複雑な表情で、しどろもどろに返事をする釈迦。

だが、ベルゼブブは満面の笑みをますます深める。

「分かりましたぞ。」

さすがはイエス様、決断が速いのは素晴らしいし事かと存じます。  
ワシのようなもつろくした年寄りと違い、若さと活気に溢れてお  
りますなあ。

羨ましい限りじゃて」

「良いですか皆の者！」

ラーフラとスプーティが今、最前線に立っています。

彼らを全力で、総力を挙げて援護なさい！」

イエスが拳を上げて熱弁を奮えば、天使達は沸き返る。

久々の大戦に、忘れかけていた血がたぎるのを感じている。  
平和の果てに置いてきたものが、不意に蘇ってきたのだ。

「さて、それじゃあワシらも帰りますかな。」

アスタロト、久々の神生ゲームは楽しかったのう」

「そうですね。また一緒にしたいものです」

相変わらず言葉少なに、アスタロトは頭を下げる。

「では、失礼致しますじゃ」

「ご機嫌よう、皆様」

陣を出るベルゼブブの後ろから、百鬼夜行の群となつて、魔族達  
がぞろぞろと後ろを歩く。

誰もが爛々と目を輝かせ、天使兵達を睨め付けていく。

一触即発の空気だったが、やがて陣内は静かさを取り戻す。

「イエス、あなたらしくないね」

「らしくない？ 何を言ってるんです仏陀。」

私はほら、いつも通りですよ！」

絶対違つて。

釈迦は喉元まで出かかった言葉を呑み込み、ぐっところ見える。それにしても、なぜサンタクロースをそこまで目の敵にするのだろうか。

もつと穩便に行く方法もあつたはずだ。

なのに、イエスとベルゼブブは目の色を変えている。

まだまだ自分には分からない事だらけだ。

いや、分かつたとしても分かりたくない。

無知であることは、案外幸せな事のような気もする。

「イエス、神生ゲーム片付けてもいいですか？」

「そんなもの、とつと戻して下さい。」

やらなきゃならない事は、山ほどあるんですから！」

やれやれ、今までは貴族然として余裕で構えていたのに、まるで小悪党のような焦りようだ。

このままでは、ベルゼブブの陣営に負けてしまいかねない。

しかし、負けたからといって、別に困ることも無いはずだ。

むしろ、気合いを入れすぎて、下手な摩擦を生み、ハルマゲドンに発展しかねない状況の今であれば、穩便に手抜きをしておくべきだろう。

「仏陀、あなたのところのスプーティさんに、頑張るよう伝えておいて下さい！」

「ああ、言っておきますよ」

やれやれ、もう少しどっしり構えて欲しいものだ。

愚鈍な私は、天界を率いるに相応しくない。

閻魔大王か、イエスのようなカリスマも無く、ほとんどの仕事は十六羅漢に任せきり。

だが、不安な気持ちは理解できる。

スプーティには今の自分の全権を渡している。

悪いようにはしないだろう。

頑張ってくれ、我が愛弟子よ。

## 第22章 陰謀とプライドとジョーク

「アスタロトよ。イエスのあの焦りよう、あれは演技か、それとも真か」

「私には判別しかねます」

「そうじゃのう。愚鈍に見せかけ、我々を油断させているかも知れぬ」

自分の陣地に戻る途中、ちらりと後ろを振り返る。

十万抜けて一九〇万に及ぶ天界の軍団は、光を放ち、夕暮れさえも焦がすような勢いだ。

だが、所詮はぬるま湯に浸りきった烏合の衆。

愛だの思いやりだのを、上っ面で語る軟弱者の集団に過ぎない。

おそらく全面戦争となれば、圧勝とは言わないが、確実に魔界は勝利を手中に収めるだろう。

「正直言つて、天界の者達には幻滅しましたね。あの程度の兵力ならば、近い将来我々の軍門に下ることでしょう」

「そうだな。だが、たった一つ彼らがワシらに勝つ方法がある」

「なんででしょう？」

「サンタクロースのプレゼント袋を手に入れる事じゃよ」

ベルゼブブの言葉に、アスタロトはその意図を計りかねる。

先ほどもイエスと激しく言い争っていたが、それほどサンタクロースという男が重要なのだろうか。

年に一度、イエスが生まれた誕生日の前夜に、子供達にプレゼントを配って回るだけ。

それ以上でも以下でもない。

魔界と天界を問わず、サンタクロースの認識とはそういうものだ。

「アスタロトよ、お前は疑問に思っただろう。」

なぜイエスとワシが、これほどまでに、サンタ如きを巡って争うのかを」

「左様ですね。私には分かりませんでした」

「その答えは、奴が持っているプレゼント袋にある」

ベルゼブブにやりと笑い、ポケットから一枚の金貨を取り出す。

「例えばアスタロトよ、この金貨が一万枚あったとしたら、お前は  
どういふ武器を調達する？」

その問いに、アスタロトは即座に答える。

「超硬金のデモナイトを用い、魔界鍛冶であるトバル・カインに依  
頼し、槍を十本作らせます」

「模範的の回答だな。軍師としては百点だが、問題はその製作期間だ。  
デモナイトは採掘が極めて限られており、十本の槍を作る為には、  
最低でも三ヶ月の期間が掛かる。」

さらに、怠け者として有名なトバル・カインの事だ。

納期はおそらく半年程度と思われるな」

「はい、九ヶ月という期間は要しますが、緊急でなければ最高の選  
択です」

「では、明日必要と言われれば、お前は金貨一万枚で何を用意する  
？」

「魔界商人の下に赴き、鉄のランスを千本用意します」

「それも模範的の回答だ。」

だが、もしも敵がデモナイトを使い、トバル・カインに製作させ  
た槍を持っていたならば、たった十人の騎士に、千人の槍兵はこと  
ごとく皆殺しにされてしまう事だろう」

その答えに、アスタロトは少々むつとする。

ベルゼブブの言うことは、当たり前的事であり、魔界の兵力とそ  
の補給について取り仕切る自分の事が、馬鹿にされたような気がし  
たからだ。

だが、ベルゼブブはそれを承知で質問したのだろう。

そう思うと、すぐに冷静さを取り戻し、ベルゼブブに返事をする。

「左様です。しかし、時間を超越する事は、我々にも天界にもでき  
ません」

「そんな時間を超越する、まるで卑怯な無敵の方法が一つだけあるんじゃないよ。」

それを使えば、金さえ用意すれば百本でも千本でも、一瞬にしてデモナイト仕様トバル・カイン製作の槍を手に入れる事が可能になる」

「まさか、それがプレゼント袋の力だと？」

「ああ、そのまさかだ。イエス達が喉から手が出る程欲しいのは、そんな禍々しいほどに無敵の最終兵器なんじゃよ」

「はあ……にわかには信じかねますが……」

「信じかねる？」

サンタクロースがこもっている、あのような巨大な要塞を、人間共の手だけを用い、たった一昼夜も掛からずして、築くことができると思うか？」

「あの要塞も?! あれもプレゼント袋から出現したと言っているのか?!」

「そうだ。そんな馬鹿げたことさえも可能にする。まさに天界と魔界のパワーバランスを一瞬にして崩壊させるほどの奇跡、それがプレゼント袋というものよ」

イエスに見せた時のように、耳まで裂けた口が笑う。

その顔に、アスタロトは思わず目を逸らした。

仮にもひとかどの魔王足る自分が、心の底から恐ろしいと思うのは、この細く小さな、年老いた魔界の副帝ただ一人だ。

「あまりにも恐ろしい道具故に、我々はその利用を双方で禁止してきました。」

ちょうど人間共が、核兵器というものの利用を牽制し合うのと同じだ。

手に入ればハルマゲドンはすぐに始まり、あつという間に決着がついてしまっただろう。

戦争と言えどルールが必要だ。

なれば、プレゼント袋は禁じ手として封じられる。

だが、サンタクロースという小役人の仕事に限って、人間界での利用と限定することにより、その使用は許可された。

その提案を発議した者こそ、かつてはこの上ない聖賢として名を知らしめた、イエス・キリストだ」

「それを今さらになって廃止ですか。一応、予算不足、財源確保の為とかがつておりますが」

「確かに森羅万象国際会議に於ける予算問題は、悪化の一途を辿っているのは事実だ。

だが、サンタクロース予算などというものの出費は、微々たる問題に過ぎないのだ。

そんなものより、他に削るべき無駄な出費は山ほどある。

ワシはそれを言うべきか迷ったが、イエスの言うことに、わざわざ異議申し立てをする必要も無いと思ったのだよ。

ワシはイエスを信頼していた

。心の底から、奴は平和を希求する者と信じて、疑いなどしなかつた」

「しかし、イエスは裏切ったと？」

「ああ、そうだ。奴はサンタクロースの廃止と同時に、それにより浮いた予算を、全てプレゼント袋に注ぎ込み、さらに天界の金庫を開けて、そこにある全ての金銀財宝も流し込む予定となっていた」

「なるほど、それにより、武装しようというわけですね」

「やはりお前の考えもそこで終わりか。凡百の意見だな」

「武装する以外に、どう使えと？」

「奴はそこから、主を蘇らせるつもりだったのさ」

「え……？」

ベルゼブブの言葉に、アスタロトは言葉を失う。

神や悪魔でさえも、絶対に侵してはならない禁忌がある。

触れてはならない問題がある。

それは彼とベルゼブブ、そしてイエス・キリストと閻魔大王のみが知っている事実。



主も無くサタンも居ないという事。

唯一無二の存在である主もサタンも、代わりを務められる者などいない。

だからこそ、彼らは嘘を吐き、それを誰にも検証させないようにしてきた。

復活などあり得ない。

いつ、どうやって亡くなったかは知らないが、少なくとも主もサタンも既にこの世には無く、これからも二度と現れないだろう。

「人間共と我々が共に学び、発展させてきた、錬金術の応用だ。

あの袋の中がどうなっているのかは知らないが、ただ、あの中に途方もない額の金銀財宝をぶち込み、生き返らせたい人間、或いは神霊、或いは魔物の名を呼べば、その手を掴む者があるという。

例えばそれは、サタン様や主でも可能だということだ。

もちろん、与太話だったのだから」

「その与太話を……実現させようとした……？」

「ああ、そして奴は言う。

主は居る。

しかしサタンは居ない。

そんな魔界は張り子の虎だと。

猿芝居を続ける愚かな劇団と我々を呼び、主の号令一下と共に天使兵となり、聖霊兵達は雪崩を打って魔界に乗り込んで来るだろう。

彼らは意気軒昂であり、あらゆる勝利を確信している。

だが、サタン様が居ない魔界の悪魔達は、総崩れとなってしまうはずだ。

士気は下がり続け、中には絶望から塵に還る者さえ続出すると思われる。

阿鼻叫喚の果てに、一人、一匹残らず魔族は捕らえられ、首輪をされて奴らの子飼いとされる事になる。

奴らはそれを『平和』と呼び、『秩序』と讃え、歌うのだ。

許せるか？ 許す事などできようか？

ワシは許さん！

誇り高き魔族に、そんな犬畜生のような扱いをさせる事などできぬ！

もしそうなれば、その責任は全てワシのものだ。

そして魔界ではベルゼブブという名は恥と同義になり、子供達が悪口として使う言葉となる。

永遠に、ワシの名は汚名として語り継がれていくのだ。

その様を思い浮かべ、イエスは毎夜笑っている。

その妄想をつまみに、奴は酒を飲んでいる！

ああ畜生。

殺したい。

ブチ殺してやりたい。

あの野郎。ワシを誰だと思っている。

恐れ多くもかしこくも、魔界の副帝ベルゼブブなるぞ！

魔界は、魔族は、戦えば負けるはずなど無い！

バラムが死と引き替えに伝えたもの、残したものは、お前にも分かるだろうアスタロト！」

「はっ、言うまでもありません」

「魔界は、ワシらは、先にサンタクロースとプレゼント袋を手に入る。」

だが、ワシらはサタン様の復活などという、愚かな真似は絶対にしない。

そんな薄汚い事に手を染めるほど、悪魔は落ちぶれてはいないのだ！

胸に刻め、誇りを捨てるな。

ワシがこの先死んだとしても、どうかベルとお前で手を取り合っ  
て、これからも悪魔達を導いてくれ。

神が奢らぬよう、人が惑い過ぎぬよう、混沌の中に秩序を見出す、  
変わらぬものであり続けてくれ」

「かしこまりました。」

しかし、私やベル様ではまだ、魔界を率いるには早過ぎます」

「当然だ。ワシはまだあと一万年は生きるぞ」

今までと違い、普通に優しい笑みを浮かべる。

肩の力を抜いて、アスタロトも笑い返した。

現在のベルゼブブが一万歳、通常の悪魔の平均寿命に達している。

そんな彼が、さらに倍の時を生きるといふのだ。粋なジョークだ。

もう五千歳を迎える自分さえ、ベルゼブブに掛ければ新人扱<sup>ルキ</sup>い。

しかし、そんな副帝だからこそ、アスタロトは叛乱を企む事も無

く、彼に付いてきている。

最強にして最凶、最後にして最期の魔王。

架空のサタン様以上にサタンらしいと、時にアスタロトは思う。

「もうすぐ本陣だ。お喋りは控えよう」

「左様ですね」

この戦は負けられない。

天界、魔界の今後を決する戦いとなるだろう。

それにしても、たかがサンタクロース一人の為に、これほど揺れ

る二つの世界。

よほど数奇な運命を背負った人間が、サンタという役を務めてい

るのだろう。

もし、この戦いが終わったならば、一度会って、茶でも一緒に

たいものだ。

そんなことを思いながら、アスタロトは自分の陣へと戻ってい

た。

## 第23章 聖夜を支配するモノ

触覚をピクピクとさせて、ベルは辺りを見渡す。

最初にニコラが現れてからは、地雷のような小賢しいトラップばかりが続いている。

光を一カ所に集中させ、炎夜の獄炎術と組み合わせで作られたそれは、通常地雷と違い、普通に床を歩いているだけでも、つい踏んでしまうのだ。

時には部屋の壁も床も、一面が接触すれば即大爆発を起こすという、とんでもない部屋まで存在していた。

「ああ畜生、何なんだよこの小賢しさは！ もう爆発とか気にせず進もうぜ！」

「落ち着けベル。まともに食らえば、足の一本は確実に飛ぶレベルだぞ」

「お前はいいよな。幻影とは言え、最初にあいつとやり合っただから」

「いじけても可愛くないぞ、ベル」

「ドラコは可愛いって言ってくれるんだよ」

「そりゃあ素敵な事だね。デュラの前でもやってみな」

地雷が無い事を確認して、次の部屋に入る。

すると、そこは限りなく白い、何も無い空間となっていた。

それは無。ただひたすら、地平線の果てまで広がる白い世界。

「ようこそ、僕の舞台へ」

少し離れた所から、さっきと同じ迷彩服にサンタ帽子という出で立ちの、ニコラがひよこりと姿を現す。

「今度は本物みたいだな」

「匂いで分かるだろう？ 正真正銘、本物の花巻ニコラ。サンタク

ロース二世だ」

「怯えて、俺の前に出てきてくれないかと思っただぜ」

「ベル、あなたは蠅の王の息子だ。

ラーフラよりも視覚、聴覚、嗅覚の三つが発達している。

さっきの戦いで、偽者の僕の姿形や特徴、血の飛び方からその匂いや熱に至るまで、分析を終了しているはず。

そんな敵を相手にして、小細工が通じるなんて思っちゃいないよ」「さんざつぱら地雷とかの、ちやちなトラップまみれで歓迎しておいてか?」

「戦いの舞台を作るのに手間取っていたんだよ。この白い部屋がそうだ」

「この部屋、ねえ」

改めて部屋を見渡す。それはとても不思議な空間だ。

無機的で、よく分からない素材でできた白い床と、どこまでも続く同じ色の白い空。

天井は存在せず、果てもどこになるのか分からない。無限という言葉が、ベルの頭を過ぎる。だが、無限や永遠などというものは、天界にも魔界にも存在はしていない。

神も仏も、悪魔も妖精も、皆等しく死に、朽ち果てる。

この世界は彼が見せる幻影。光をどう使っているのかは分からないが、ただ無限に見えるだけの、張りぼてに過ぎない。

「ラーフラ、今度こそ俺がやってもいいんだろ?」

「ああ、約束したからな」

「それじゃあ、ちよつと殺し合おうぜサンタクロース」

「いいね、退屈してたところだよ」

お互いが飛び上がり、ニコラはその手に光を集める。

ベルはジャケットを突き破る巨大な羽を羽ばたかせ、一気に間合いを詰める。

そのまま腕を振りかぶり、ベルの拳が頬に触れそうになった瞬間、ニコラは光の弾をベルの腹にぶつけると、二人の間合いは一気に開く。

「何だ、実物も意外と良い動きをするんだな!」

「実物の方がいい男って言ってくれよ、蠅の王」

「まだ王じゃない、王子だ」

「それは失礼」

言葉と同時に飛んでくる蹴りを、腕で受け止める。

ダメージを減らす為、光でプロテクターを作ったが、それさえも粉みじんに粉碎する。

なるほど、武器は使わずに体で勝負するタイプか。

ニコラがちらりと目を合わせると、ベルは楽しそうに笑った。

「知ってるか？ 昆虫つてのは本来、身体能力があらゆる生物の中で、最も優れてるんだぜ」

「ノミやアリを見て、馬鹿にする奴の方が馬鹿だと思つよ」

「ただなあ、肉体がそれほど強いなら、武器を使えばもっと強くなるんだ」

ベルは胸のポケットに手を入れると、するすると長い棒のようなものを取り出す。

およそ、普通では収納できないであろうそれは、巨大な黒い刃の槍だ。

だが、その槍の先端近くには、斧のような巨大な刃と、同じく大きな鉤爪が、おまけというには禍々しい程の存在感を放ちながら、鈍い光を放っている。

「ハルバードって知ってるか？」

人間共が西洋で作った武器の一つだが、こいつが一本あるだけで突いたり斬ったり叩いたり、幾通りもの戦い方ができる、素晴らしい戦争の発明だ」

「世界史は好きな方だから、知ってるよ。」

「サーベルよりも遥かに凶悪だね」

「歴史的な武器で、将来の副帝に屠られる事は喜びだろっ？」

「そいつは嬉しいね。涙が出そうだ」

「分身してもいいし、光の弾を撃ってきてもいい。」

掛かって来いよ、サンタ野郎」

「ありがたい提案だ。けど、周りはちゃんと良く見てたか？」  
「え？」

気が付くと、ベルの周囲を蜘蛛の糸よりもお細い、肉眼で捉える事が困難な糸によって、何百本と囲まれていた。

「武器自慢なんてする暇があれば、さっさと首でも斬ればいいのに」  
口元に手を当てて、ニコラはくすりと笑う。

「やばい！ 逃げるベル！」

「光と死のダンスステージ、踊り明かせよ悪魔！」

「うおおおおおおおおおおおおおおお！」

せめて相打ちにしようと、ベルは斧の刃をニコラの首筋に向かって叩き付ける。

だが、転がった首から出てきたのは、小さな旗に『はずれ』の三文字。

「あみだくじの時といい、運が無いねえアンタ」

背中から声が聞こえた刹那、腕を反射的にそちらに振ろうとする。だが、ぼとりと嫌な音を立てて、それは地面へと転がり落ちる。

「ベエルウウウウウツツツツツ！」

「だいたい一八八分割。粗挽きミンチの出来上がり」

緑色の血を吹き出し、ずるりべちゃりと響き渡り、ベルの肉片が降っていく。

魔界屈指の権力者、副帝ベルゼブブの息子としては、少々呆気ない終わり方だ。

だが、油断をすれば自分が挽肉にされていた。勝負というのは、案外素早く片づくものだ。

「さーて、まだあなたと戦わなきゃいけないんだよね。ラーフラ」

「ベル……ああベル……テムエ……よくもベルを……」

「悪魔と仲良しの釈迦の息子って、なかなか不思議な関係だね」  
地面に降り立ち、ベルの目を踏みつぶす。

ぐしゃりと嫌な音がして、腐った卵の匂いが立つ。

だが、それには目もくれずに、光の弾を手の上に作る。

「なあお前。さっき何個に分割したって？」

「一八八だ。殺し過ぎたかも知れない」

頭を掻きながら返事をするニコラに、ラーフラはにたりと笑う。

「殺しすぎた？ そいつは目出度いな。たかが一八八分割で、殺し過ぎた、か」

「え？」

「ザコが調子に乗って勝ち誇るごっこ、そろそろ終わろうぜ？」

背後から声が聞こえた瞬間、ニコラの首にハルバードの切っ先が突き刺さる。

ぴゅうと勢い良く血が噴き出す。確実に彼の首筋にある、大動脈を捉えていた。

「馬鹿だねえ。ベルは六六六以上の肉片に分割しないと、殺せないの」

「そしてニコラ、お前のこの血の温かさ。そして何よりもこの匂い。お前こそは本物、お前こそはオリジナル、唯一無二の花巻ニコラ、本人だ」

けらけらと高笑いをし、その返り血を舌で舐め取る。最高の勝利の美酒の味だ。

「か……はっ……ごぼっ……」

「悪いな。遺言を言う暇を与えてやるほど、俺も優しくないんだ」

「おめでとうベル。お前の勝利だよ」

どさりと倒れるニコラの為に、彼は手を合わせる。

今度こそ確かな死を見届けた証として、懐から数珠を取り出し、念仏を唱える。

「駄目だよ、相手が死んでも油断しちゃ？」

突如聞こえるニコラの声。

やがて空から、彼は階段を下りるようになり、何も無い空間をゆっくりと近付いてくる。

おかしい。ありえない。

初めてベルは混乱した。



さつき殺したのは、確かに花巻ニコラのはず。  
だが、足下には死体はおろか、血の一滴さえこぼれていない。  
何度も足下と空から降りるニコラを見直した時、再び辺りに光の  
糸が張り巡らされている事にベルは気が付く。その糸の数はさつき  
の比ではない。

六六六以上に分割されれば、彼は確実に葬られる。

脳裏に浮かぶ死の文字。次の瞬間、彼の体は再び挽肉にされてい  
た。

「勝ったつもりでいい気になる敵キャラごっこ、終了」

右手で銃の形を作ると、口でバンと言いながら撃つ真似をする。

少年のままの笑みを携えて、彼は再び蘇る。

「バカな……バカなバカなバカなあつ！ さつきお前は死んだ！  
俺も見た！ あれは確かにお前だったはずだ！」

「共感覚って知ってる？ 音の色や、光の匂いを感じるっていう、  
人間界のオカルトじゃあ、ちょっと有名なシックス・センスの事な  
んだけど」

「光の……匂い……？」

「ほんの少しの想像力が、人間に奇跡をもたらす。  
弱いからこそ学び、学んだものを積み重ねる。」

サンタクロース二世の僕は、人間なんだよラーフラ」

「はは……はははっ……本当に人間か？」

物理や科学なんて無視する俺達を、さらに無視して無敵モードか？  
ありえねえよ！ くそっ！

お前っ、本当に何なんだよ！」

「教えてやるう、僕こそが花巻ニコラ。」

クリスマス・イヴ  
十二月二四日の支配者、別名をサンタクロースと言うんだ」

胸を反らせ、親指を立てて自分の胸元をとんとんと叩く。  
馬鹿馬鹿しいまでの神々しさ。

圧倒的過ぎる非現実性。

ラーフラはその場がくりと膝を突く。

勝てる気がしない。

かつては自分も同じ人間だった。

そして、自分が絶対に勝てないと思った人間は、自分の父親である釈迦と、自分に剣を教えたスプーティくらいのものだ。

だが、それを越えたもの。

人智を、神智さえも越えたもの。

神や悪魔を凌駕する。

其の名はサンタクロース。

「テメエ……なんで六六五で止めた……」

「ベル！ 生きてたのか！」

死の直前、一歩手前まで切り刻まれて、さすがのベルも傷は深い。だが、立ち上がる程度の力は残っている。

倒れそうになりながら、ラーフラの肩に掴まるベルを見て、ニコラはそつと右手を差し出す。

「お前は殺されるより、生き恥をさらす事を屈辱と思う男だ」

「だったらなおさらだ！ 殺せ！ 殺しやがれ糞野郎！」

「やだね。頼まれたって殺してやらない」

「畜生！ 畜生！ 畜生！」

何だ？ 何が望みだ？！

悪魔が命と引き替えの情けを掛けられたなら、俺はお前の願いを一つ聞き届けねばならない！

それがお前の狙いだろう？ 最悪だ！ 早く言え！」

「待ってたよ、その言葉」

ニコラはポケットから、くしゃくしゃになった書類を取り出す。

そこに大きく書かれている文字は契約書。

内容は、月給が一五〇〇ヘブンと血の池印のトマトジュースが五缶で、花巻ニコラの部下となる事。

ただし、仕事は年に一度、クリスマスの日に自分の手伝いをするだけ。

そして、その書類を今度は、おこづかいと書かれた封筒の中に入

れる。

「これが僕の望む願いだ」

「くく……ははは……ドラコのやつ、帰ったらお尻ペンペンだあああああああああ！」

ベルが獣のような咆哮を上げた時、空の上で二人の帰りを待ちわびているドラコは、背筋につららが突き刺さるような悪寒を感じたと後に語った。

## 第24章 交渉と敗北は紙一重、畏と準備は十重二十重

要塞の上空は既に、二十万に及ぶ聖霊兵と、悪魔達によって囲まれている。

出撃命令を互いに今か今かと待ちわびており、時には小競り合いも辺りで起こり始めていた。

剣聖であるスプーティにデュラハンは負けると言われ、カツとなつた悪魔と天使の間で乱闘が起きたりといったところだ。

だが、基本的にはぴりぴりしつつも、秩序だけは保たれている。

「見る、スプーティ様とデュラハン様。

それにベル様とラーフラ様だ！

けれど、真ん中に居るあいつは……誰……？」

要塞の甲板上に、ニコラを中心として五人が立ち、聖霊兵と悪魔達に手を振らせる。

まずは無事を確認させる為だ。スプーティはこれと言って感慨の無い顔をしているが、デュラハンとベル、そしてラーフラはそれぞれ複雑な表情をしている。

ラーフラを殺せず、サンタ討伐の戦列に加わる事さえできなかったデュラ。

自分が付いていながら勝利を手に出来ず、初めて恐怖を感じてしまったラーフラ。

そして、情けを掛けられ、ニコラの部下にされてしまったベル。

その契約はあくまでもベルとラーフラ、そしてニコラの間のみに通じる秘密契約とされたとは言え、あまりにも内容は屈辱的なものだ。

しかし、負けた手前、その事を否定はできない。

真ん中で誇らしげに胸を張るニコラは、取り囲む二十万の兵達に向かつて大声で叫ぶ。

「森羅万象国際会議に於ける、サンタクローヌ予算削減に関する異

議申し立ては認められず、僕はこうして武力行使により、解決を図った。

結果は見ての通りだ！ 言わずとも分かるだろう？

今から黄泉比良坂に陣を張る、イエス及び釈迦と、ベルゼブブ及びアスタロトと話し合いを申し上げたい。

邪魔立てをすれば、この要塞がお前達を容赦なく撃ち殺す。

死にたい奴だけ掛かって来い！

僕の首を持って帰れば、お前達には勲章が贈られる事だろう！」

ニコラは張り裂けんばかりの大声で叫ぶが、むしろ、今までにわかにはざわついていた二つの陣営、計二十万の兵達は、しんと静まり返る。

天界と魔界の有力者が計四人、ニコラのそばにいて、何もせず突っ立っている。

これは、彼らが降伏、或いは何らかの和平を持ちかけられたという事を意味する。

誰かが独断飛びかかるものなら、たちまち蜂の巣にされて、魚の餌になるだろう。

今や悪魔達にさえ、命を惜しむ心が戻ってきていた。

恐怖が、その場にいる全ての者達を支配していた。

そして、誰も動かないと見て取るや、ニコラは高笑いをする。

それは勝利宣言にも等しい。

「賢明な判断だ！ では、今から僕達は黄泉比良坂に行く。

道を空ける、サンタクローズが通るぞ！

僕が居れば、そこはクリスマスだ！」

その言葉に、空を覆い尽くす二十万の軍が、モーゼによって割られた紅海のように、一本の道を形作る。

天界、魔界と人間界を繋ぐゲートに向け、それは真っ直ぐに開かれた栄光への道。

「ニコラさん、私達は確かにあなたに降伏という形を取りました。しかし、イエスやベルゼブブがこれで納得するとは思えません。

手打ちを計るにしても、まだあなたの方が不利です。

交渉材料の乏しい中で乗り込んで、逆に残り三八〇万の軍勢が、場合によってはあなたに襲いかかる可能性だつてある。思い直すなら今ですよ？」

スプーティの忠告に、ニコラはありがとつと返す。

その顔には、交渉が不調に終わるかも知れないという不安が、微塵も感じられず、それが逆に不審でさえあつた。

「それじゃ、行こうか」

ニコラが飛ぶと、他の四人も連れ立って宙へと舞い上がる。

天界と魔界の有力者四人を、まるで従者のように携えて、威風堂々とニコラは先頭を切っている。その姿を、誰もがその顔を目に焼き付ける。いつか殺すべき怨敵。自分達の顔に泥を塗った逆賊。そう思う一方で、怯える者や、ある種の尊敬の眼差しを向ける者もいる。

やがて光に包まれ、見えなくなった彼らを追つて、二十万の兵達も黄泉比良坂へと撤退を始める。

次の命令が下るまで、何も行うことができない。

そして、最期の一人が消え去つた後に、辺りは普段と変わらない、北極海の光景を取り戻す。

そこにはつい今しがたまで存在したはずの、あの超弩級要塞は、影も形も見当たらず、煙のように消え去っていた。

波は静かに流氷に打ち寄せ、何も語ろうとはしない。そこで何が起きていたのか、知るのは海と空のみ

## 第25章 審判の日

「お初にお目に掛かります。イエス様、お釈迦様、そしてベルゼブ様、アスタロト様。」

僕は二代目サンタクロースを襲名した、花巻ニコラです」

殺気に満ちた三百八十万の目を一身に受けながら、ニコラは急ごしらえで作られた、円卓の椅子にゆっくりと腰を下ろす。

いつも無表情なアスタロトと、どうしていいか分からない状況になつて困っている釈迦。

その一方で、イエスとベルゼブは、満面の笑みを湛えてこれを迎えた。

「急ごしらえで恐縮ですが、野点のたてもたまには風流なものでしょう」

「僕としては地べたに新聞紙を敷いただけでも、一向に構いません。ビジネスの話し合いに来たのですから」

「ははは、サンタクロースさんはジョークもお上手だ」

「そんなことより、僕の要求ですが」

単刀直入に切り出すニコラに、四人は静まり返る。

そこで言葉を切ったニコラは、一度深呼吸をしてから、ゆっくりと切り出した。

「僕が求める条件をお伝えします。」

此度の戦争に掛かった費用と賠償金です。

およそ三兆ヘブンと、サンタクロース予算の削減撤回を求めます」

一瞬、時が止まった錯覚に誰もが陥った。

その突拍子もない要求、あまりに桁外れの金額。

ニコラ達を取り囲んでいた聖霊兵や悪魔達が、にわかに騒ぎ始める。

冗談というには笑えない、本気であれば正気を疑う。

ここはサンタクロース予算の復活のみで、手打ちとなると思っていたのだ。

イエスと釈迦、ベルゼブブとアスタロトは、現時点で苦々しくも、手打ちの方向で腹の中を決めていた。

それはもはや、言葉にせずとも、誰もが場の雰囲気を感じていた。だが、それを自らの手で、交渉のテーブルを突然ひっくり返したも同然の出来事。

よほどおかしかったのか、ベルゼブブは大声を出して笑い始めた。

「吹っ掛けたなサンタクローズ！ ベルの命を金で買えと言っのか！ 魔界の副帝を前にして、おそれ多くもよく言ったものだ！」

「すまない、親父……」

椅子も用意されず、後ろで突っ立っているベルは、ぎりりと歯ぎしりをする。

そして、その横ではラーフラも同じく、小刻みに体を震わせている。

本当は、ここで増長天を使い、一刀両断にしていみたい。

だが、それもはや叶わぬ事なのだ。

「そうですね、ニコラ君。」

三兆ヘブンというのは、天界全体の予算で考えれば、ものすごい出費になるんですよね。

あまり調子に乗っていると、和平交渉も台無しになりますよ、はい。

だからね、今の言葉は聞かなかった事にしてあげますから、訂正しませんか？」

イエスは笑顔を崩さず、淡々と切り返す。

しかし、ニコラは首を縦に振らない。

「聞こえませんでしたか？」

僕は三兆ヘブンとサンタクローズ予算の復活を要求しています。

あなた方の意見を聞きたいとか、僕の口から言った覚えはありません」

「あ……あのねニコラ君……天界とか魔界にもね、都合ってものがあるんですよ、うん。」



君の言いたいこともわかるけど、ここはひとつイエスや私、ベルゼブブさんやアスタロトさんの顔も立ててもらえないかな？ ね？」  
「お釈迦様、仏の顔も三度までと言いますが、僕は四回でも五回でも、千回でも一万回でも、聞かれれば同じ事しか言いませんよ？」

あまりにも尊大な態度に、さすがの釈迦も少々眉をひそめる。  
確かにベルやラーフラと戦い、彼は勝利を収めた。

それにより、このテーブルで話し合いに着く交渉権を彼は手に入れたが、あくまでもそれは、話し合いに着く権利であって、過剰な要求を通せる、絶対的優位を手に入れた訳ではない。

仮にも今、立場はニコラの方が優位にあるかも知れないが、まともまらない要求を無理に続けられれば、この場で彼はくびり殺されてしまう事だろう。

むしろ、それはとても簡単な事であり、ベルゼブブなどはすぐにも実行に移しかねない。

「若造、何かワシらにまだ隠してるんだらう？  
でなければ、お前もただの命知らずじゃない。」

とっておきを見せてくれ、それ次第で考えよう」

「さすが副帝、話が早い。それでは空を見上げていただけますか？」  
「空か。別に澄み渡る黄泉の黄色い空だが」  
「ベルゼブブは言葉を失う。」

突然空は闇に覆われ、何かの影の下に、自分達はすっぽりと覆われているのだ。

それは先ほどまで、戦況を見ていたモニターに映っていた要塞。  
それがそのまま、今自分達の頭上に浮かんでいるのだ。

この事態に、三百八十万の軍勢は浮き足立つ。  
何が起きているか分からない。

それはまるで、今までに自分達が起こしたり、見たりしてきた奇跡というレベルを遙かに超えた、笑い話のような魔法。

「これは……ニコラ君……いったいどんな魔法を……」

「イエス様、目に見えるとはどういうことか分かりますか？」

「え？」

「目に見えるとは、反射した光の色を我々は見ているに過ぎません。では、全ての光を透過してしまえば、それは無色透明となります。そして僕の能力は、光を操る事。」

もう、お分かりになりますよね？」

テールにほおづえを突いて、天界と魔界を束ねる四人の顔をそれぞれに目で追う。

だが、四人共に言葉を失い、ただ呆然とするだけ。それ以外に何ができようか。

そして、その結果に深い満足を抱き、ニコラはほくそ笑む。

「ねえ神様、ねえ魔王様、あなた方は全知全能ですか？」

「残念ながら、ワシらは全知全能ではない。教えてくれ、まだ何かあるだろう」

「はい。あの空飛ぶ要塞には、人類が作り上げた究極の悪魔、ツァーリ・ボンバが一二八発搭載されています。」

中途半端な数字ですが、あの国に今残っている、全ての在庫を搭載させていただいたので、こんな数になってしまいました。

正式名称はRDS 220、コードネームは雷帝<sup>イワン</sup>。

ツァーリとは皇帝、ボンバはそのまま、爆弾を意味します。

実際の人類の戦いで使われた事はありませんが、その実験に於いては、半分の威力で行った結果、衝撃波は地球を三週半したと言われる、まさに人類が生んだ最終兵器です。

こいつを魔界と天界の中間点にある、平和自治区に時速千五百キロで叩き落とし、起爆させれば、二つの世界は塵となるでしょう。

面白いと思いませんか？」

人間達はある種の薬品に天使の塵なんて名前を付けていますが、その本物ができちゃうんです。

どうです、とても笑えるでしょう？」

「ニコラ、あなたも死ぬのですよ？ 死ぬのは怖くないのですか？」

「サンタを辞めるくらいなら、死んだ方がマシですよ。」

それにね、あの要塞には僕の大切なパートナーのナナと、閻魔王の娘である、六道炎夜が乗っている。

二人はきつと正確に、あなた方の世界を焼き尽くす。

ゴモラの町を灰にした炎を、インドラの矢を、人類は既に手に入れている。

破滅が大好きで、愚かで救いようがない。

しかし、あなた方にさえできないことを、人類は平然とやってのける。

すごいでしょう？ 格好いいでしょう？ 神よりもなお悟り、悪

魔よりも破滅的。

死んでも死んでも死にきれない。

何度殺しても殺しきれない。あなた方の創られた愛見まなこは、本当にどうしようもない。

心底、本当に、永遠に救いようが無いでしょう？」

立ち上がり、両手を空に向けてニコラは笑う。

それは真正銘の終末。

ハルマゲドンの際に吹き鳴らされる天使のラツパより、遙かに終末的なものだ。

狂っている。この少年は狂っている。

いや、こんなものをいつの間にか作っていた、人類こそが狂っている。

死が怖くないのか？ 破壊が怖くないのか？

悪魔でさえも、無駄に死ぬことを尊しとはしない。

彼らでさえ、冷静になれば命乞いをし、背中を見せて逃げまどう。釈迦の頭の中ではもはや、考えが名状しがたいものとなっている。

紫色と灰色の何かが渦を巻き、溶け合っては分離し、形を為しては霧散する。

「神様！ 魔王様！ 僕は戦いました！

精一杯戦いました！ 来た！ 見た！ 勝った！

あなた方は僕が作り上げた幻想の要塞と戦い、本体はこうして空

中を移動している事にも気付く事ができず、ただ指をくわえて死を待っていた！

破壊を待ち望んでいた！

しかし今なら引き返せる！ 簡単なことでしょう？

たったの三兆ヘブンだ！ そして、サンタ予算の削減について、撤回するというだけだ！

聞かせて下さい、あなた方の選択を！

あなた方の答えを！ 僕の耳に聞かせて下さい！

そうすれば、僕は兵を退きましよう！

ああ素晴らしい！ 実に素晴らしいでしょう？」

狂気さえも笑いに変えて、目的の為なら手段は何も厭いとわない。

ああニコラ、お前はサタンだ。

サタン様だ。

サンタとサタンは似ているなんて、ホネホネトリオは言っていた。大当たりだよ馬鹿野郎。

お前達に予言者の称号をくれてやる。

なんだ、プレゼント袋なんていらなないじゃないか。

ここに居る。

こいつこそがサタン様だ。

ベルゼブブは苦笑する。

こんな男が、なぜ人間だったのだろう。

なぜサンタクロースなどという、木っ端役人になったのだろう。

しかし初代サンタクロースよ、お前は見る目があった。

ワシが隠居したなら、魔界の全てをベルよりも、こいつに引き継がせてやりたいくらいだ。

だが、きつと彼は断るのだろう。

僕はサンタクロースですからと、笑いながら言っのだろう。

「完敗ですね、私達は」

「そうだねえ、イエス……」

「本当のハルマゲドンが起こる時は、実は天界と魔界じゃなく、対

人間界かも知れませんが」

にいつと歯を見せてイエスが笑う。

洒落にならない皮肉だ。

しかし、同意せざるを得ない。

そして、その姿に釈迦は背筋が寒くなる思いだった。

天歴二万八九九年、森羅万象国際会議に於けるサンタクロース予算削減に伴う廃止について、異議申し立てをしたサンタクロース二世、花巻ニコラは一時的にだがハルマゲドン状態を作り上げ、その事は歴史書に刻まれる事となった。

サンタクロース危機。

現在も天界と魔界の歴史で必ず誰もが習う、かの有名な歴史的事件であり、大伽藍の乱を除けば、公式には史上初のクーデターとなっている。

## エピソード クリスマス・アゲイン・モスクワ

十二月二四日は、世界的にはクリスマスだが、ロシアのクリスマスは一月七日が正式なクリスマスだ。

電力やガス、電車やバスなどを除き、たいていの人々はこのクリスマス前後から休暇が始まり、年を明けてもなお、クリスマスのムードは続く。

だが、ゾン重工は多忙を極め、アレクサンドラは自らのオフィスに今日も出勤していた。

本来ならば欧米の顧客も多いため、クリスマスパーティーに引っぱりだこにされるはずだが、今年に限ってはそうも言っていない。

最高級の黒檀の机と、人間工学に基づいて作られたという椅子。そして広々とした社長室も、彼女にとっては今や、まるで拷問の道具にさえ見える。

「えーっと、ロスのアルマート・インダストリーズとの契約期日が来月末で、予算が確か三億ルーブル。商売としては小商いだし、断れば良かったかしら」

一人ぼっちで仕事をしていると、自然に独り言も増える。

そして、そんな書類の山に囲まれているアレクサンドラに、誰かがドアをノックする音が聞こえた。

「開いてるわ。ネルスキー？ それともイワノフ？」

「まいど！ 間宮倫音、クリスマスケーキと七面鳥、それにシャンパンを持ってただ今参上！」

久しぶりの友人の来訪。思わぬサプライズに、アレクサンドラは椅子を蹴って立ち上がり、彼女を抱きしめる。

「久しぶりね、ありがとう！ メリークリスマス、リン！」

「はっはっは、寂しいクリスマスをお過ごしヤホンスキのレディに、日本人のリンは弱いんやな！」

「あなた、サンタクローズのダーリンは一緒じゃないの？」

その言葉に、少し寂しげに倫音は俯く。

「あいつの席の隣は、もう予約が入ってんねん。」

「うちは商人、所詮はゼニの亡者やから」

「商人が恋しちゃいけないなんて、誰が言ったかしら」

「アカンことはないねんけど、やっぱり、あいつにはお似合いの人がおるんや」

「ふうん、野暮はお互い言いつこ無しね」

「そういうこっちゃ、ほな、ボトル開けて乾杯しよや。」

とっておきのクリュッグとロースターキー、それにブッシュ・ド・ノエルを用意したんやで」

ポンと景気のいい音をたてて、コルクの栓が天井に当たる。

転がったそれを拾うと、なぜかお互い笑いが込み上げて、気が付けば笑っていた。

「あれからもう半年経つけど、サンタクローズ吹雪爺さんは元気かしら」

「さあな、うちの口座に倍の六億円が振り込まれてから、まるっきし音沙汰が無いんよ。」

「多分忙しいんやな、あいつも」

グラスを傾けながら、モスクワの夜景を見下ろす。

この夜景の中にはたくさんの子供達が居て、彼ら、彼女らに笑顔を配って歩く。

サンタクローズというのは、とても素敵な商売だ。

カップラーメンからミサイルまでを扱う、強欲な商人の自分とは違う。

はあっと息を吐き掛け、ガラス張りの壁を曇らせると、そこに文字を書く。

「相合い傘の片方にはニコラ、もう片方には

「メリークリスマス！」

「良い子にしてたかなリンネ、アレクサンドラ？」

「ぶほっ！ げふげほっ！ に、ニコラ！」

突如窓の外に現れたのは、ナナがソリを引き、隣にはベルとドラコを乗せている、サンタの正装に身を包んだニコラだ。

だが、ベルはどこか恥ずかしそうに頬を染め、顔を横に向けている。

「メリークリスマス。そちらも忙しそうね」

「一年で一番多忙な夜だからね。」

けれど、子供達の為にも弱音は吐いてられないさ」

「お隣の紳士と、可愛いお嬢さんはどなた？」

グラスを掲げ、ちらりと目線を動かすアレクサンドラ。

それに答えるように、ニコラは二人を手で指し示す。

「新しい助手のベル君とドラコちゃんです！」

「ドラコです！ よろしくです！」

「ベルだ……よろしく……」

「羨ましいわねドラコちゃん。格好いいお兄さん二人に挟まれて」

「はい！ ドラコははっぴーです！」

両手を広げて、幸せを体で表現する。

おっこちそうで、少しだけ危なっかしいけれど、とても微笑ましい。

「元気そうやなニコラ。安心したで」

「ありがとうリンネ。あれから連絡も取れずにごめん、また一緒にお茶でも飲もうよ」

「悪いけど、あんたの隣にはもう予約が入ってるやん。なあ、ナナちゃん？」

「え？ あ？ 私？」

どぎまぎとして、ナナは顔を真っ赤にする。

やっぱり、この子が彼にはお似合いだ。

倫音は思わず苦笑する。

「予約なんて入ってないよ。何を言ってるんだ」

「入っとなのや！ そんなことより、ここで油売っててええのんか



「？」

「おっと、そうだった。二人にプレゼントがあるんだ。受け取ってよ」

「ガラスを突き抜けて受け取れってか？ 冗談きついで」

「もう、アレクサンドラさんの机の引き出しに入ってるよ。それじゃ、メリークリスマス！」

嵐のように現れて、嵐のように去っていく。

まるでテレビの特撮ヒーロー、あいつの名前は花巻ニコラ。

世界で一番のサンタクロース。

世界中にメリークリスマスを叫ぶ。

聖夜に幸せを配り歩く、花巻ニコラの未来に乾杯。

グラスを掲げ、倫音は笑う。

「ちよつとリン、見てよこれ！」

「なんやー、何が入った？」

「見てよほら、私とあなたが初めて会った、あのカフェに置いてあったオルゴール。」

最初に会話を切り出したのはリンで、このオルゴールを聴くと嫌なことも忘れられるって言っていたでしょう？」

「ああ……ホンマや……アンティークのリュージュのオルゴール……」

優しい音色、透き通るような旋律、それは心に染み込んでくる。

思い出が詰まった、あの場所。

「あれから私達三年になるのね。」

「あなたも私も駆け出しの社長で、お互いに二世経営者として、役員達から嫌われていた」

「そっちなあ、うちらはめっちゃ頑張った。」

ロシアに來ると、うちはあるのカフェに足を運んで、必ずこのメロディーに耳を傾けながら、バラのジャムが入った紅茶を飲むんや」

降り積もる雪のように、それは心に広がっていく。

「クリスマスBGMとしては不釣り合いだけど、とても素敵」  
「ミスマッチがええねんで。アレクサンドラ」  
そう言って、口付けを交わす恋人をあしらった磁器の頭を、指先で小突く。

優しい音を奏でる度に、それはゆっくりと回っていく。

それはまるで回転木馬だと、倫音は思った。

## エピローグ 三千世界にメリー・クリスマス!

「あーもおーっ! 鬼三郎っ、酒!」

「はい、ただいまお持ちいたします!」

地獄の執務室で、酒を飲みながら血の池を見下ろす炎夜。

本当はサンタの仕事を手伝いたかったのだが、クリスマスだとい  
うのに悪人が多かったせいで、彼女も仕事漬けとなっていた。

目の前に積まれた書類には、びっしりと細かな文字で、生前の罪  
状が書かれている。

「なんで悪いコトするかな! 閻魔大王が怖くないの? 地獄が怖  
くないの?」

「僕に言われなくても……」

困ったような顔をする鬼三郎。

そして、その後ろから二人の見慣れた男女が姿を現す。

「ご機嫌斜めですねえ炎夜様」

「メリークリスマス、炎夜」

「スプーティ、それにデュラ!」

白い正装に身を包んだスプーティは、ろうそくの立ったクリスマス  
スケーキを持っている。

隣に立つデュラは、今日は鎧を外して赤いドレスに身を包み、首  
もすっかり上に付いている。

「何よ何よ、独り者ばかり集まっちゃって寂しいわね」

「ちよっと、あなたと一緒にしないでよ! 私にはベルがいるんだ  
し!」

「はいはい、ケンカは後にして、中に入りましょう」

岩盤で出来たテーブルにケーキを置くと、デュラは大きく四つに  
切り分ける。

そして、三枚しかない皿の一つにそれを載せると、鬼三郎に渡し  
た。

「僕に……ですか……?」

「ケーキはお嫌い?」

「好きです! はい!」

「じゃあ、あなたにもクリスマスね」

「おひはふほー、あわへへはへへ、のほひふはへはへはひほーひ」

口一杯にケーキを頬張りながら、炎夜は何かを注意する。

多分、慌てて食べて喉に詰まらせないように、とでも言っているのだろう。

そんな姿を見ると、地獄はこれで運営できているのか、スプーテイとしては不安になる。

「閻魔大王様は、お元気ですか炎夜様」

「うん、多分来年中には復帰できるよ」

「え……」

スプーテイは我が耳を疑う。

ほぼ復帰は絶望的と思われると思われていた閻魔大王が、戻られるというのだ。

それは天界にとって、この上もない大ニュースだろう。

そして、スプーテイにとっては、ほんの少しだが肩の荷が下りる事になる。

あまりにも嬉しいニュースだが、なぜ今さらなのか?

突然の朗報ではあるが、疑問が残る。

不思議そうな顔をするスプーテイに対し、炎夜は補足する。

「ニコラが来て、何かプレゼントしていったみたい」

「ああ、あの人が」

「不思議よね。プレゼント一つで、あれほど落ち込んでいたお父様を立ち直らせるなんて。

嬉しいけど、少しだけ悔しい」

「でも、そんなサンタクロースが大好きでなんでしょう、炎夜様?」

「当然よ!」

バンとテーブルを叩き、立ち上がる。

「閻魔の娘、六道炎夜の伴侶となるのは、花巻ニコラこそ相応しいわ！」

「ふふふ、ナナちゃんも大変なライバルさんを持ってしまったわね」

「あなたもドラコちゃんがいるじゃないですか」

「そうね、負けてられないわ」

歳の離れたデュラと、お互いに笑い合う。

何歳になろうとも、恋は女の最大の仕事だ。

「あーっ、俺抜きでパーティーしてんの？ ひっでえ！」

「ラーフラ！」

「酒と地獄トカゲのジャーキー持ってきたんだ。食おうぜ！」

ずかずかと入ってくると、そばにあつた椅子を引き、どつかと腰を下ろす。

「あなたも今日は、ベルに振られちゃったのね」

「だってクリスマスはサンタの部下なんだし、仕方ないだろう」

「しゃれこうべの盃に酒を注ぐと、それを一気に飲み干す。」

「寂しく盛り上がるうぜ。クリスマスをよ！」

そう言つて、今度は炎夜の器に酒を注ぐが、もちろん彼女もそれを飲み干す。

すると、良い飲みっぷりだとラーフラは満面に笑みを浮かべた。

「不思議ですね。仏教に帰依する私達と、悪魔が共にクリスマスだなんて」

「いいんじゃないの？ サンタクロースがいるくらいに、何でもありの世の中だ」

「サンタクロース！ いつか私のムコに！」

「炎夜様みたいに凶暴じゃ、サンタ様どころかお嫁さんのもらい手が僕は心配です」

「鬼三郎……ちよつと表に出なさい……」

「ひいいっ?!」

「まあまあ、今日は無礼講つてことで炎夜ちゃん、ね？」

こうして、地獄のイヴは更けていく。

やがて、宴もたけなわとなる頃、仕事を終えたベルとドラコ、ナ  
ナとニコラが現れるのは、数時間ほど後の事だ。

クリスマスは特別な日。

クリスマスは幸せのかたち。

サンタクロースは笑顔を運び、人も神も魔も関係なく、心と心を  
繋いでいく。

たくさんプレゼントが配られ、その数だけ笑顔が生まれる。

世界中の子供達が思う。

毎日がクリスマスだったらいいのに。

ニコラは言う。

僕もそうだといいなって思うよ！

天界に、魔界に、人間界に、降り積もるメリークリスマス。

また来年も、幸せなクリスマスで会いましょう。

(了)

## エピローグ 三千世界にメリー・クリスマス！（後書き）

さて

これにて『超弩級要塞のサンタクロース』は終了となります。  
ずいぶん昔に投稿小説用として書いたものです。

当時は伏線は全て回収する！ というルールを知らなかったばかりに、そういう部分で消化不良が否めない部分が残ると思います。

お目汚し、ご容赦下さい。

また、ここまで読んで戴いた読者の皆様に、心からの謝意を。

ご批評、ご感想、もしあれば、おっしゃっていただければ幸いです。  
これからも色々書いてゆきます。

またご覧頂ければと思います。

それでは、ありがとうございました！

>

</

追伸

ホラー小説『爪の音』（完結）を掲載しています。

もし私の作品にご興味を持って頂けたなら、こちらでもご覧下さい！

<http://ncode.syosetu.com/n75360/>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7419o/>

---

超弩級要塞のサンタクロース

2010年11月11日16時40分発行